

人魚姫と野球小僧

ホークス馬鹿

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もし、唯我成幸に野球の天才の幼馴染がいたらのお話です。

うるかがとても好きで、思いつきで書いてしまったので、投稿ペースが著しく遅いです。ご了承ください。

原作と違い、うるかが成幸に惚れている描写はありません。

オリ主×うるかなので、成うるが良いという方はブラウザバックをお願いします。

投稿しては変えたりするを繰り返しているため、結構小説の中身が変わったりします。読みづらと思います。ご了承ください。

目次

11話	10話	9話	8話	7話	6話	5話	4話	3話	2話	1話	設定
98	92	82	76	62	51	37	29	23	15	7	1

24話	23話	22話	21話	20話	19話	18話	17話	16話	15話	14話	13話	12話
247	231	213	200	190	179	171	160	145	131	122	117	108

3 3 3 3 3 3 2 2 2 2 番外 2
6 5 4 3 2 1 9 8 7 6 編 5
話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話

385 378 361 344 338 323 315 292 286 277 268 261 254

4 4 4 4 4 4 4 4 4 3 3 3
8 7 6 5 4 3 2 1 0 9 8 7
話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話

506 496 484 475 463 449 441 437 424 413 408 399

設定

オリキャラ

安達純（18）

身長：181センチ

体重：75キロ

誕生日：9月4日

ポジション：投手

性格：普段はクールで大人しく、友人思いの性格である。しかし試合になると人が変わわり、気迫のこもった投球をする。

容姿：かつて負けないエースと呼ばれていた鷹のエースの顔をイメージしていただけると。

詳細

今作の主人公であり、一ノ瀬学園に通う高校3年生である。成幸とは小学校からの幼馴染であり、成幸の事を『成（なり）』と呼び、成幸も『純』と呼ぶほどの仲であり、野球以外では、よく一緒にいることが多い。

入学してすぐに試合に出場し、1年の秋からエースナンバーを背負い、一ノ瀬学園を昨夏は甲子園準優勝、今春の選抜はベスト8に導いている。

選手としては、MAX150キロのストリートに加え、スローカーブ、Hスライダー、SFF、チェンジアップを持っており、どの球種も高いレベルを誇る。また、回を追うごとにスピード、キレが増すタイプであるため、プロのスカウトが最も高く注目している。

気温が上がれば上がるほど調子が良くなり、特に夏場になると手がつけられなくなる。

勉学は、古橋程ではないが、文系科目を得意としており、特に日本史に関しては、学園トップクラスの成績である。

家族は、父親を中学入学前に事故で亡くしており、現在は、母親と一緒に暮らしている。

恋愛には興味がなさそうに見えるが、実は密かにうるかのが気になっていて、小林だけ薄々だがそのことに勘づいている。

西辺浩智（36）

一ノ瀬学園野球部監督。12年前に野球部監督に就任し、就任わずか2年で、野球部を夏の甲子園に導き、その後も甲子園に出場し、一ノ瀬学園の名を全国に知らしめた。

監督としてのスタイルは、選手の自主性に任せ、選手と同じ目線で対応する事から、選手達からの人望は厚い。

桐須先生に何度もアプローチしているが、ことごとく全て撃沈している。

学校設定

一ノ瀬学園

過去の実績は殆ど無いが、現監督である西辺監督が就任してから急速に力をつけ、12年間で夏4回、春3回の甲子園出場を果たし、特に昨夏は、夏の甲子園準優勝を果たしている。練習時間は非常に短く、週休3日であり、その分選手の自主練に費やしている。

選手ステータス（パワプロ査定）

投打：右投右打

フォーム：パワプロ2021のオーバースロー64

球速：150キロ

スタミナ：A（81）

コントロール：A（85）

球種：スローカーブ（4）

Hスライダー（6）

S F F (7)

チェンジアップ (4)

弾道 : 4

ミート : A

パワー : B

走力 : B

肩力 : S

守備力 : A

捕球 : A

特殊能力

・強心臓

・怪童

・不屈の魂

・ドクターK

・威圧感

・驚異の切れ味

・変幻自在

- ・クロスファイヤー
- ・リリース○
- ・球持ち○
- ・低め○
- ・牽制
- ・打球反応○
- ・闘志
- ・終盤力
- ・鉄腕
- ・ギアチェンジ
- ・根性
- ・対強打者○
- ・チャンスA
- ・盗塁A
- ・走塁A
- ・広角打法
- ・流し打ち

- ・高速レーザー
 - ・サヨナラ男
 - ・ケガしにくさA
 - ・速球中心
 - ・テンポ○
 - ・夏男
- 成長タイプ：晩成2
体質：普通

1 話

世の中には天才と呼ばれる人がいる。

そう、例えば、

先生「じゃあこの問題解けた人から前に出て解いてもらおうかな。」

俺の隣にいる幼馴染である、唯我成幸のさらに隣の席の女子が立ち上がった。

成幸「!？」

先生「ぜ…全問正解です。でも…緒方さん途中式は？」

緒方「途中式…すみませんとぼして解いてしまいました。」

女子生徒A「すごいよねー緒方さん。」

女子生徒B「天才ってああいう人言うんだらうねー。」

純（すげー、俺マジでこういうのわかんねーのによく解けるな。流石『機械仕掛けの親指姫』）

成幸「フフ…なかなかやるな緒方…！次は勝つてやるぜ！」

成は緒方にそう言ったが、

緒方「はいどうぞ、勝とうとは思っていませんので。」

成幸「ガーン!？」

純「成、ドンマイ。」

次の授業の現代文では、

純（古橋、よく寝てるなー。あと10分で提出なんだが…）

先生「コラ古橋、おきろー。」

古橋「はひやいっ!! あっ!、ど、どうしよう!」

純（ありやりや、こりや大丈夫かね?）

俺は古橋が必死に作文を書くのを見ている。

10分後…

先生「古橋ーっ、後はお前だけだぞー。」

古橋「はーい! 出来ました!」

たった10分で終わったのか? 俺とおそらく成も思っていると、

先生「おっふ、なんて心に訴えかける感動的な小論文だ!! こ、これをコンクールに出

させてくれ古橋。」

純「すげー、日本史は分かんがそれ以外の文系科目ではこいつに勝てる気がせん。流石『文学の森の眠り姫』」

この二人がいる限り、成は永遠に文系も理系もトップをとるのは非常に難しい。

昼休み

大森「まーまーいいじゃんか唯我。成績上位は常にキープしてんだからさ。」

小林「てか、ウチのツートップ美少女と席が隣っつー幸運をフツーに楽しみなって。なあ、純ちゃん。」

純「ははっ。」

成幸「そんなわけにいくかつ！俺はこの学校で『特別で優秀な生徒』と認められなきやならんのだ！」

大森「唯我は来週面接の『特別VIP推薦』狙ってんだっけ？」

小林「は？特別VIP？何ソレ？」

純「特別VIP推薦つつうのは、この学園において歴代の生徒の中でも特に優秀と見なされた者にかぎり、その後の大学進学にかかる全ての学費を免除するっていうのだよ。」

成幸「ああ、そのためにこの学校に来たと言っても過言じゃないぜ！」

純「確か来週はその審査面談だったよな。頑張れよ、成。」

成幸「サンキュー。ああそれと大森、今度のテストでお前が間違えそうなところ纏めてやって。これだけやるときやとりあえず赤点はねえだろ。」

純「俺からは今度の日本史の小テストで間違えそうなところ纏めといたから。」

大森「おおー、いつもサンキュー、唯我！安達！」

小林「純ちゃんも成ちゃんも、そんだけ面倒見良いのに、なんで彼女いないんかねえ。特に純ちゃんはイケメンなのに。」

成幸「うっせえ。そんな余裕はねえよ。」

純「まあ、俺の場合は野球に集中したいから。去年の借りを返したいし。」

大森「去年なんかホントあと一歩だったもんな。頑張れよ、応援してるから。」

純「ありがとう。成も頑張れよ。おばさんや水希ちゃん達の為に。」

成幸「ああ、お前もな。」

俺が野球に集中したい理由、それはうちが母子家庭だからだ。

純「ただいまー。」

母「あら純、おかえり。練習お疲れ様。」

俺は畳の部屋に行き、親父の写真を見る、そして、

純「親父、ただいま。」

5年前に親父が事故で亡くなって、今では俺と母さんの家族2人だから俺は全国制覇をして更にプロの関係者からの評価を上げ、プロになって活躍し、母さんに楽をさせてあげるのが俺の夢だ。

ただ、あいつらには野球に集中したいって言ったのは本当だけど、実は気になってい
る人がいるのは内緒だ。つつても、こばは薄々勘づいてると思うが。

それから数日後

俺はいつもの通り、俺入れて4人の投手がブルペンで投げ込みをしていた。すると、

西辺「安達、調子はどうだ？」

純「監督、自分は何問題ありません。」

西辺「そうか、なんかあつたらすぐに言いなよ。お前達も。明日は準々決勝、気合い
入れてけよ。」

「「はいっ!!」」

この人は西辺監督、一ノ瀬学園を全国クラスの強豪校に導いた監督だ。この人は選手
と同じ目線で話したりして、常に選手第一の監督だ。だから俺含め、他の部員達は皆こ
の人のことを慕っている。

西辺「今日こそ、桐須先生とデートを!!」

こういう一面を除いて…。

その帰り道、楠本公園を通っていたら、

純「あれ、成じゃないか。何やってんの？つーかこの問題集は？」

成幸「純か。実は…。」

俺は成幸から今に至る経緯を聞いた。

純「なるほど。VIP推薦の条件として、緒方と古橋の教育係を任されたと。」

成幸「ああ、二人とも不得意分野を受験するって言っし、それにこの時期だ、無理せず得意分野で受験したら良いと薦めたら、怒って帰ってしまったよ。」

純「そっか…。」

そう言いながら、俺は問題集を開いてみた。

成幸「まあ、俺の推薦のためにも、明日もう一度説得を…。」

純「なあ、成。彼女達の意志を尊重すれば良いんじゃないか？」

成幸「えっ？けど…。」

純「成の言っていることは正しいよ。ソレが普通だと思っし。でも、ここまで問題集がボロボロになるまでやってるし、それにこれ、全ページ隅々までびっしり書き込んでる。緒方なんか現国の答えを計算で出そうとしてるし。それだけその道に行っつて、何か

勉強したいんだと思う。後、おじさんも生前言つてただろ。『出来ない奴を分かつてやる男になれ』つて。まあ、後はお前がどうするかだよ。それにお前、こういつた人たちの気持ち、一番理解出来ると思うから。それじゃ、明日試合だから、またな。」
そう言つて、俺はバッグを抱え、その場を後にした。

その後、唯我とあの二人の仲は改善され、放課後よく一緒に図書室に行つて勉強をしているのである。もつとも、大森からは醜い嫉妬を受けているが…。

ちなみに俺ら野球部は、準々決勝を突破。俺は、調整登板で1イニング投げた。

それからしばらくが経ち…

純「それで、なんのご用件があつて、呼び出したのでしょうか…学園長。」

俺は今、学園長室にいる。

学園長「ふむ。安達純君。我が学園の野球部のエースとして、去年の夏は甲子園準優勝。今年の春の選抜はベスト8という成績を残し、プロから高く注目されている。加えて勉強においても、文系科目、特に日本史に関しては9割程度の成績を残し、生活態度も申し分なし。非常に優秀な生徒だ。」

純「ありがとうございます。」

学園長「そこでだ。君に一つ頼みたいことがある。入りたまえ。」

そう言うと、後ろの扉が開き、成と緒方と古橋の3人が入ってきた。

純「えっと…、学園長。これは一体。」

もう嫌な予感しかない。

学園長「うむ。君は唯我君とは小学校時代からの友人であるらしいね。」

純「はい、そうですが。それが何か。」

学園長「そこでだ。君には唯我君のサポート役として、緒方君と古橋君の勉強を見て

もらいたいのだ。時間があるときだけで良いから。」

純（呼び出した目的はこれか。メンドーだけど嫌なんて言えねー。）

純「分かりました。」

そう言うしかない俺であった…。

2話

成の教育係のサポート役を任命されてからしばらくがたった後、俺は小林と大森、成と一緒に廊下を歩いていった。

純「成。今日って、学園長に定期報告だっけ？」

成幸「そうだよ。」

純「そっか。俺今日自主練だからあの2人の勉強見れねーわ。」

成幸「分かった、伝えとく。」

純「サンキュー。しっかし、今日の自主練はプール練やるんだけど、あれ、結構鍛えられるんだよね。」

成幸「そうなのか？」

純「ああ、肩関節が柔らかくなったり、スタミナがついたり、心肺機能が強化されるなど、結構メリットあるよ。」

成幸「へえ。」

純「お前も泳げれば案外面白いかもよ。スタミナもつくし。勉強って、案外体力使うじゃん。」

成幸「そうだな。まあ、泳げたらただけど。」

そんなことを成と一緒に話していると後ろから、

??? 「純ーっ!!」

純「ん?・・・ぐはっ!!」

成幸「純、大丈夫か!?!」

後ろから強烈なラリアットを喰らった。

??? 「ノート貸してー。」

純「出来れば出会い頭のラリアットはやめてくれ、武元。」

うるか「ゴメンゴメン。あたしこれから自主練でパワーありあまってさー。んなわけ

で宿題ヤバイんすわー!純ならとつくに終わらせてるよね?」

純「まあ、一応。」

うるか「はよ貸して、写させて。てかよこせ♡」

純「同中とはいえ、無遠慮半端ねーな。お前、たまには自分でやってみろよ。」

成幸「純の言うとおりだぞ。自分でやってみるよ。」

うるか「わーん!頼むよ見せてくれよー!勉強キライなんだよー!!」

純「身もフタもねーな、オイ。」

大森「唯我だけではなく、安達のまわりにも美少女が・・・。しかも確かあの子、水

泳で有名な……。」

小林「中学から全ての大会で優勝してる『天才』だよ。」

大森「ええー、マジで!!」

小林(……相変わらずだな、武元は。純もだけど。)

純「ほい、ノート。後今日俺、プールで自主練すつから。」

うるか「オツケー。後、ノートさんきょう。ソッコーカンペキに写して返すからねっ!」

純(つたく、相変わらず世話が焼けるな……。)

成幸「色々察するぜ。」

純「ある意味慣れたよ。そんじゃ、俺行くわ。」

成幸「ああ、頑張れよ。」

純「おう!」

そして俺は、許可を得て、プールに行くと、ちょうど武元が練習をしていた。

純(中学ん時から凄かったけど、またレベルアップしてんな。流石将来のオリンピック候補でもあり、『白銀の漆黒人魚姫』の名は、伊達じゃねーな……。)

うるか「ん?あれーっ、純じゃん!なになにノゾキに来たわけー!?もーっ、エロいなー

」

純「ちげーよ、自主練だよ。てかお前、ノート渡す際言ってただろ。」

うるか「ジョーダンジョーダン。あつ、そういや、先日の準々決勝投げたんだって。」

純「調整登板でーイニングだけな。」

うるか「へえー。準決勝は先発で投げんの？」

純「多分な。」

うるか「へえー。頑張つて!!」

純「ああ。ありがとう。」

うるか（準決勝、時間があれば見に行こうかな・・・。）

純「今年も甲子園出場したら、ゼツテー去年の借りを返してやる。」

うるか「頑張つて!!今年はゼツタイ日本一だね。」

純「ああ、お前も頑張れよ。」

そんなこんなで練習を開始して約1時間後・・・

うるか「あれーっ、成幸じゃん!!何しに来たの、エロいなー♪」

成幸「ちがうから、後ポーズとんな!!お前に話があるんだよ。後、純も関係がある。」

純「俺も？」

プールから上がってきた俺と武元に成は事情を話した。

うるか「教育係？」

成幸「お前、スポーツ推薦で音羽大学受けるんだってな。」

うるか「えー、なんで知ってんのー？スポーツ推薦なら勉強しなくていいもんね！」

純「あれ、でも確かそこは今年から文武両道推奨とやらで、大会の成績に加えて、英語も試験内容に入ったはずだぞ。」

その瞬間、武元は顔を青ざめフラフラとよろめいた。そして、

うるか「じゃあ、やめる。」

と、半泣きで言った。

成幸「テキトーか、お前の人生。悪いが俺も推薦かかっているんだ。是が非でも勉強してもらうぞ!!」

うるか「えーん、勉強やだーっ!!」

そう言いながら、二人は取っ組み合いを始め、最終的には成が武元に馬乗りになる形となった。

純「成、それ以上はやめろ、捕まるぞ。」

成幸「うっ、それはマズい。」

そう言い、成は馬乗りをやめた。するとそこに、

古橋「あ、いたいた。唯我君と安達君ここだつて学園長が言つてたから。」

古橋と緒方がやって来た。

うるか「あれっ？ウチの天才2人組じゃん！えっ、純と成幸の知り合いなん？」

古橋「あつ、えつと…。」

緒方「実は…。」

2人は武元に経緯を話した。

うるか「…なるほど。天才にも苦手なものがあるんだねー。いがい。」

古橋「はは…、唯我君と安達君が一生懸命『教育係』してくれて助かってます!!」

純「つつても、俺は『サポート役』だけだな。」

うるか「ふーん…。」

少し考える様子をした武元は、突然2人の肩を取り、自分に寄せる。

うるか「んーじゃ仲間じゃん！あたしも今日から純と成幸に『教育係』してもらおうこ

とになったから！」

古橋「わー、一緒だねえっ！」

さつきまで泳いでいたので、少ししぶきが出てくる。

緒方「あの、しぶきが…、というか近いです…。」

成幸「はああ!?武元お前…、何で急にやる気に!?さつきまでの全力泩りはなんだっ

たの!？」

純「見事までの手のひら返しだな・・・。」

うるか「まーまーいいじゃん。カタイことは。」

成幸「なんなんだよ、もう・・・。」

純「まあ、形はどうあれ、結果オーライだし、いんじやね?」

成幸「はあ、そうだな。」

帰り道、武元は純に借りていた一冊のノートを見て、中学時代を思い出す。

うるか『ねーねー安達!ノート写さしてよー。』

純『またか?武元。しょーがねーな・・・ほい、丸写しすんなよ?』

うるか『やったあ♪』

その当時からたまに純にノートを貸りては丸写しをしていたうるか。その時はまだ便利な人くらいしか思っていないかった。

うるか『へへへ、安達っていつもなんだかんだ見せてくれるし、便利な奴っ!写し終わったら後は返すだけってね♪』

階段を上がり、純にノートを返そうとしたところ、純と成幸と小林が話しているところに出くわした。

小林『ねーねー純ちゃん。なんでいつも武元にノート写させてやってんのさ。純ちゃんに全然メリツトなくない?』

成幸『確かに、俺もそこは気になってた。』

純『いや・・・流石に誰彼構わず見せようとは思わんが。』

小林『じゃあなんで?』

少し恥ずかしそうにしていた純だったが、口を開くと、

純『あいつが、遊びも勉強も色んなもん犠牲にして、必死で水泳頑張ってるって知ってるから。』

成幸『へえ、純らしいな。』

小林『んなこと言ってホントは好きなんじゃないの、日焼け跡エロいもんね!』

純『何言ってるんだ、そんなじゃねーよ。』

その会話を偶然聞いたうるかは顔を真っ赤にしていた。

うるか「(純が野球だけじゃなく誰にでも一生懸命なのは知ってる。だったらせめて・・・!) 一番! あたしに一生懸命にさせてやるんだから!」

武元は一人心に誓ったのであった。

3 話

成幸「……だから、ここの『that』は『あれ』じゃなくて関係代名詞。『allow』は『洗う』じゃなくて『許す』な。」

純「つーか、『allow』を『洗う』と訳す奴はじめて見た……。」

成幸「英語で点を取るにはまずとにかく単語と文法だ。そして、スラスラ訳せるようになるまでひたすら同じ文章を反芻して……。」

俺たちはいつも通り図書室で勉強をしているところであり、成が武元に英語のアドバイスをしているが、

純「成、武元がショートしているぞ……。」

そう言われて、武元を見た成。すると武元の頭には煙が出ている。

うるか「もう限界だよー!!泳ぎたいよー!!暴れたいよー!!」

開始して30分も経ってないのだが、武元は泣きながら机を叩く。

その様子を見て俺がなだめるようなことをしていると俺の隣に座っていた古橋が立ち上がる。

古橋「あ、ごめんね……。私ちよつと用事があつて……。ちよつとだけ抜けるね。」

成幸「またか？ここんとこ多いな。何か忙しいなら手伝うけど・・・。」
古橋「あつ、ううん。全つ然大丈夫！すぐ戻るから！」

階段隅

山岡「こんにちは古橋さん。また呼び出しちゃってごめんね。」

古橋「あ、ううん大丈夫・・・。それで・・・、山岡君今日は？」

成幸「おい武元。無理矢理引つ張つてきてなんなんだお前は。」

うるか「だーつて気になるじゃーん♡」

純「あれつて、サッカー部の山岡だな。」

確か女子から評判はかなり高い奴だよな。

成幸「あのな・・・、こういうの趣味悪いぞ。俺は戻るからな。」

緒方「同感です。武元さんはそういうところを改めるべきかと。」

そう言いながら、成と緒方がその場を立ち去ろうとすると、

山岡「好きです。付き合ってください。」

その言葉を聞いた2人はすぐに俺たちのいるところに戻る。

うるか「・・・ねえ、あんたら今あたしのことなんて言った？」

純「まあ、こいつらも一応気になるんじゃない？」

古橋「あ、あの・・・つ、き、気持ちひとつでも嬉しいんだけど・・・、ごめん・・・なさい・・・。」

山岡「えーつ、今日もダメ!? 僕・・・そんなにダメかなあ?」

古橋「い・・・いやそのつ! あなたがダメとかじゃなくて・・・つ。」

どうやらハッキリと断ることができなかつたようだな、古橋。

山岡「えつ ホント!? 良かった〜! じゃあまた来るね! じゃつ!」

古橋「え、あのつ、何度来てもらつても・・・つ!」

2人の会話を聞いて我慢出来なくなった武元が古橋のところに行く。

うるか「もつたいなーい!」

古橋「ええ!? みんな・・・、なんでここに!」

うるか「何やってんのさ文乃っちー! 今の、サッカー部のイケメンで有名な山岡つ

しよ!?! こんなスエゼン食わぬとは何事かー!!」

古橋「えっ!? いやその・・・。(何この状況・・・)」

いきなりの説教状況に訳が分からなくなっているな、古橋。

うるか「全く、今の様子じゃ、もう何度も告げられてるみたいだね。うらやまけしから

ん・・・。」

うるか「恋愛つてーのは、カケヒキも大事だけど・・・、たまには女からニクシヨク

になってこそ・・・、彩りが生まれるってーものだよ!!」

古橋「い、彩りが!!」

緒方「で、そう言う武元さんは恋愛経験が?」

うるか「えっそれは・・・、まあ・・・、予習は万全ってゆーか?」

緒方「ないのですね。」

古橋そつちのけに言い争いを始める2人。

成幸「戻ろうぜ、古橋。」

口論している2人をよそに、成が古橋に手を差し出す。

古橋「唯我君。」

成幸「その・・・、悪かったな・・・。つい好奇心に負けてのぞいちまって・・・。」

純「俺も、なんか悪い・・・。」

古橋「う、ううん大丈夫・・・。」

その時、古橋の手が震えてることに気がついた俺と成であった。

図書室

純「じゃ、時間だから、俺部活行くわ。」

うるか「あつホントだー!んじゃ、途中まで一緒に行こー!!」

緒方「私も店の手伝いがありますので……」

成幸「おー。言ったトコ、ちゃんと家でもやつとけよ！」

うるか「うげっ！」

成幸「うげっ、じゃねーよ。」

そう言いながら、図書室を後にした。

部活に行く道中、

うるか「ねえ、純？」

純「何、武元？」

うるか「文乃っち、どうするんだらうね。」

純「さあな。でも、古橋は受験に集中したいから付き合う気はないと思う。ただ、はつきりと言えない性格なんだろうな。だから山岡も何回も来るんだと思う。」

うるか「そっか、そうだよね。」

純「しかし、告白か、俺もいつか武元に……。」

うるか「ん、何か言った純？」

純「えっ、いや、何でもない。そんじゃ、また。部活、頑張れよ！」

そう言い、俺は武元の肩を叩いた。

うるか「う、うん！また！」

そして、俺は武元と別れた。

純（危ねー、聞かれるところだった。もし聞かれたら、俺、今後武元の顔を直視出来ないかも・・・。）

一方武元は、

うるか（じ、純に肩を叩かれた！ヤバい、叩かれたときの感触がまだ・・・／＼／＼。）
廊下の真ん中で赤面しつつ、幸せそうな顔をしていた。

最も、その姿を川瀬と海原に見つかり、からかわれたのであるが。

後日、古橋と山岡の件は、成が解決したらしい。何故頭を怪我しているのかは知らんが。

4話

土曜日。天気は快晴、絶好の野球日和だ。

俺は今、野球場にいる。今日は、春の県大会準決勝だ。

今日のウチの先発は俺。相手は、今年一緒に選抜に出た学校だ。

これに勝てば、関東大会出場は決まるし、何より、夏に大きく繋がる。

それに今日は、武元が見に来ている。

気合を入れるぞ。

そう思っていると、主将の吉田が戻って来た。

純「吉田、じゃんけんどうだった。」

吉田「勝った。後攻めにした。」

純「そっか、わかった。」

そして監督が来た。

西辺「ここから先の戦いは全て夏に繋がっている!!本気で全国制覇を狙うというのなら、この一戦を取れ!!」

野球部メンバー「二はいっつっ!!!」

その頃、スタンドでは、

うるか「いやあ、間に合った間に合った。」

成幸「つたく、今日純の試合とは、しかも先発。」

緒方「私、ウチの野球部が強いことは知ってますが、安達さんは、凄いですか?」

古橋「確かに、私もあまり安達君のこと詳しく知らないや。」

唯我「純は、入学してすぐに試合に出てたぞ。1年の秋からエースナンバーを背負って、去年の夏、甲子園準優勝したし。今年の選抜はベスト8だったし。プロ注目の選手だよ。」

緒方「そうだったんですか。」

古橋「へえ、詳しいね。唯我君。」

成幸「まあ、あいつとは小学生の頃からの付き合いだし。その頃から上手かったなあ。」

古橋「そうなんだあ。」

うるか「それはそうと、早く試合始まんないかなあ。(早く純のカッコいい姿見たいし

♡)

海原「ははあーん、乙女ですなあ、川瀬隊員。」

川瀬「全くですなあ、海原隊員。」

うるか「何よもう、うっさいなあ!!?」

唯我「ほらお前ら、試合が始まるぞ。」

審判「これより、試合を始めます。礼!!」

「「しゃーっす!!?」

コール「まず守ります、一ノ瀬学園のピッチャーは、安達君。」

その瞬間、球場がどっと湧き上がる。武元と川瀬、そして海原は大丈夫だが、緒方と古橋に関しては、間抜けに辺りを見回していた。

緒方「な、何ですか?」

古橋「安達君の名前が呼ばれたみたいだけど。」

そして、純はマウンドに上がって土を均した後、純の表情が変わった。

緒方「あれ、安達さんですよ。」

古橋「うん、多分そうだけど・・・。」

成幸（緒方と古橋は、普段の純とのギャップに驚いてるなあ。）

うるか（ヤバイ、めっちゃカッコいい♡）

成幸（武元なんか、目がヤバイし。）

川瀬・海原（ホント、乙女だなあ。）

そして、純は軽いフォームで投球練習をし、キャッチャーミットを叩き上げ、パーンと小気味良い音を奏でていた。

緒方「えっ!？」

古橋「は、速い!？」

緒方と古橋が言葉を失つてる間に投球練習は終わり、打席には、相手のバッターが構えていた。

そして1球目、純はストレートを投げ込んだ。

審判「ストライークツ!!？」

気合の入った審判のコール。その瞬間、球場から、名前をコールされた時に匹敵するような歓声が聞こえた。

緒方「あつ、あれ見てください!!？」

緒方が指差す方向を見ると、バックスクリーンに『150km/h』の表示が灯つていた。古橋なんか、呆然としている。

成幸（すげえ、いきなり自己最速タイとは。純の奴、相当気合が入ってんな。）

俺たちがそれぞれの思いで見ているのを尻目に、純は、初回を3者凡退に抑えて、軽快な足取りでチームメイトと共にベンチへと下がっていった。

その後、一ノ瀬学園のチームは、コツコツと点を積み重ねていき、純は、初回に見せ

たストレートと、鋭い変化球を織り交ぜていき相手を抑え、時折雄叫びを上げるので、緒方と古橋なんか終始びっくりしていた。

若干1名は目が本格的にヤバいが……。

そして7回に入ろうとしていた。

古橋「ここまで6―0。何か上手く言えないけど、凄いね、りっちゃん。」

緒方「はい。普段の安達さんとは全く違います。」

うるか「だよね!! スゴイよね!! でも、こっからがホントにスゴイんだよ!!」

古橋「えっ、どういう意味、うるかちゃん?」

緒方「何が凄いのですか、武元さん?」

うるか「まあ、見れば分かるよ!!」

そして、7回の純のピッチングが始まった。するとその初球、それまでとは違う150キロのストレートを出した。

緒方「何か、それまでの150キロとは違う気が。」

古橋「うん、なんか速く感じたような……。」

うるか「純はね、回を重ねれば重ねるほど、スピードとキレが増すの!!」

緒方「つまり、また一段階調子が上がるということですか!?!」

成幸「ああ、普通は終盤あたりまでいくと、疲れでスピードとキレが落ちるんだが、あ

いつの場合は、落ちるどころか、増すんだよ。」

緒古「!!」

成幸「つつても、この時期だからまだ本調子じゃないんだけどな。」

緒方「えっ! これでもまだ本調子ではないのですか!？」

成幸「ああ、あいつは気温が上がれば上がるほど良くなるのだが、とりわけ夏場が凄
いぞ。」

うるか「そんな時の純なんか、めっちゃカッコいいかんね!!」

川瀬「あんた、ちよつと落ち着きなよ。」

海原「そうだよ、もう。」

そういうことを話していると、最後のバッターを三振に打ち取り、純の雄叫びが響
いた。

純「シャーーーーー!!!」

成幸（今日一番の雄叫びだな。）

うるか（はう・・・、純、カッコよすぎるよう・・・／／／）

その後、一ノ瀬学園は、裏に1点追加したことで、この試合は7回コールドとなり、決
勝進出が決まった。

純はこの試合ヒット2本しか打たれず、奪った三振の数は13奪三振の圧巻の投球であつた。

その帰り道・・・

緒方「しかし、あれで本調子ではないというのが未だに信じられません。」

古橋「ホントだね・・・。」

成幸「いやあ、マジでヤバイよ。今日のピッチングが可愛く見えちゃうほど。」
うるか「ソウダヨ!!ホントにスゴイんだから!!」

川瀬（久しぶりに安達の試合を生で観たからか、うるか、いつに増してハイテンションね。）

海原（ホント。よほど嬉しかったんでしようね。）

それぞれ色々な思いを抱えながら、帰路についたのであつた。

一方、一ノ瀬ナインは、

吉田「なあ、純。今日はいつに増して気合が入っていたな。」

純「ああ、今日友達が来てたからな。」

吉田「そうか。そりやあ気合入るわ。」

純（後、武元も来てたし……。今日は、武元楽しめたかな？）

そう思っていた純であった。

その翌日の決勝戦、俺は投げなかったが、一ノ瀬学園は4―0と快勝し、春季県大会を優勝した。

5話

決勝の次の朝、俺は朝練で早く来て、軽いトレーニングとストレッチなどをした。

朝練後、下駄箱に行き、ちょうど武元と会った。

うるか「純!! オツハヨー!!」

純「おう、おはよ。」

うるか「いやあ、一昨日はスゴかったね。ナイスピッチング!! 後、県大会優勝オメデト!!?」

純「ありがと。後、来てくれてメツチャ嬉しかったよ。」

うるか「そりゃあ、純の投げる試合だったら・・・ゼツタイに・・・その・・・」

純「うん? なんだって?」

うるか「う、ううん!! 何でもない!! 次の関東大会の初戦は投げるの?」

純「多分な。」

うるか「じゃあ、見に行こつかなあ?」

純「構わねーけど、開催場所は県外だぞ。その期間は普通に授業あったし。お前も練習あるだろ。」

うるか「そっか……。残念。」

純「はは。まあ、しょうがないよ。でも、気持ちだけは受け取っとく。」
うるか「うん……。」

純「でも、また見れるから、その時は来れたらで良いから、見に来て。」
うるか「う、うん!!もちろんだよ!!必ず見に行くよ!!」

純「ああ、楽しみにしてる。」

そう言つて、俺は武元の頭を撫でた。その際武元の顔が真っ赤になっていて、その姿が可愛いと思つたのは内緒だ。

その後廊下で武元と別れた後、

緒方「安達さん、おはようございます。」

古橋「安達君、おはよう。」

純「おう、おはよ。」

緒方「一昨日の試合、お疲れ様でした。後、県大会優勝おめでとうございます」

古橋「うん、凄かったよ。お疲れ様。」

純「ああ、ありがと2人とも。」

緒方「安達さん、普段とは全く違いますね。」

古橋「うん、なんか凄い気迫を感じた。」

純「ああ、俺それよく言われるわ。なんかこう、スイッチが入っちゃうんだよね。」

古橋「へえ、そうなんだ。でも、かつこよかったよ。」

純「はは。ありがと。んじや、また後で。」

古橋「うん、また。」

緒方「はい、また。」

その後3—Bの教室に入り、

成幸「おはよう、純。一昨日はお疲れ。後、県大会優勝おめでとう。」

純「おう、ありがと。」

成幸「しかし、お前は相変わらず野球になると凄い気迫だな。」

純「はは。単純にスイッチが入るだけだよ。」

成幸「そうか。ああ、そうだ。お前今日練習ある？」

純「いや、今日はオフだけど。なんで？」

成幸「実は今日、家族が親戚の集まりでいないから、久々に自分の勉強に集中したいんだけど、ちよつと日本史で分かんないトコがあったから、見てもらいたくて。」

純「ああ、んなことなら、いいよ。」

成幸「本当か、助かる。」

純「なに、俺とお前の仲だろ。」

成幸「すまん。それじゃ、学校終わったらな。」

純「ああ。」

そして学校が終わった後、成の家に行った。

純「成の家に行くの、久しぶりだなあ。」

成幸「そうだな。まあ、適当に座って。」

純「ああ。」

成幸「それで、早速なんだけど、ココの時代がよく分からなくて。」

純「ああ、ココの時代。ココの時代はね……。」

そうやって1時間が経った……。

成幸「なるほどね。ありがとう、純。」

純「いや、たいしたこととしてねーよ。他は大丈夫？」

成幸「ああ、他はね……。」

すると、「ピンポーン」とチャイムが鳴った。

純「誰だ？新聞か？」

成幸「わかかんねー。ちよつと見てくる。」

そう言つて、成は玄関に向かった。

緒方「こんばんは。」

成幸「緒方？なんで？」

緒方「唯我さんに用があつて来ました。」

成幸「まあ、とりあえず入れよ。」

緒方「はい、お邪魔します。」

そして、

純「緒方？なんで？」

成幸「俺に用があるんだつて。」

純「ふーん。」

緒方「安達さんこそ、なんで唯我さんの家に？」

純「俺は成に日本史を教えてくれつて頼まれたからな。ちようど今日練習オフだった

し。」

緒方「そうだったんですか。」

純「それより、一緒に持つてるそれはなに？」

緒方「ウチのうどんです。良かったらどうぞ。」

純「マジか!! すごいや、もうこんな時間か。道理で腹が減るわけだ。」

成幸「そうだな。いただくか。」

そうして、俺と成は緒方の家のうどんを食った。

成幸「・・・で、緒方。この日も暮れようかという時間にやってきて、小論文のコツを教えろって？」

緒方「はい。明日までに提出しなければならず、大ピンチなのです。」

成幸「・・・しかしこのうどん美味いな。」

純「ああ、コシがしっかりしてて、今までの中で一番美味しいうどんだわ。」

緒方「ウチの自慢のうどんです。食べたからには教えてください。」

純・成（ワイロじゃねーか!!）

成幸（あああ・・・、せっかく今日家族が親戚の集まりでいないから、久々に自分の勉強に集中したかったんだが・・・。）

成幸「ふむ・・・、『文明と人の関係について』・・・か。」

緒方「今まで何度か提出しているのですが、何故か全て却下されてしまつて・・・。」
 緒方の書いた論文には、『興味がないので特にありません。』と2行しか書かれてない
 原稿用紙を見て、俺と成は啞然とする。

純「何故か、と言えるのが逆にスゲーぞ。」

成幸「何か、もうちよつとあるだろ・・・。」

緒方「・・・思つてもないことを、自分の中で解に出ていないものを書くなど、私には無理です。」

純「まあ、一理あるな・・・。」

成幸「つつてもなあ、俺も基本的なことしか教えられないぞ。」

成が「どうしたもんかなあ」と考え事をしてしていると、緒方のスマホの通知が鳴った。

うるか『こんばんちゅ♡』

うるか『今日久しぶりに練習オフで、ひとりカラオケ中♪リズりんもおいでよ♡文乃たちは勉強中だつて断られちつてさく(＞＜)』

うるか『LOVE YOU♡』

純(うわあ、スツゲエイヤそんな顔・・・。武元か)

緒方『行きません。』

緒方『今、唯我さんの家で安達さんと一緒に勉強中ですので。』

するとドドドと地響きがし、それと同時に襖を開ける音がし、純と成幸は振り返る。

うるか「あつれえ、リズりんぐうぜーん!!」

成幸「武元!」

うるか「いやーっ、あたしも丁度純と成幸に教えてもらいたいことがあつてさーっ!」

緒方「ひとりカラオケ中だったのでは?」

すると、

うるか「せーい!」

緒方「ひやう! な、な、何するんですか!？」

武元は緒方の胸を鷲掴みにした。成は硬直しちやつたよ。

うるか「リズりん胸大つきいんだから、そんな細かいこと言わない。」

そう言つて、武元は鞆を逆さにしたが、出てきたのはお菓子類だった。

うるか「つてあれ? 筆記用具無いや。」

純「何やってんだよ、お前・・・。」

成幸「勉強する気ゼロじゃねえか!!」

成幸「つたくしよがねえな。テキスト貸してやるから待つてろよっ!!」

すると突然、部屋の電気が消えた。

うるか「びっくりしたーっ。停電? ブレーカー?」

成幸「妙だな……。今月確かちちゃんと電気代は払っていたはず……。」「純「気にするとこ違うね？」

うるか「確かに……。」「

そう言い、俺と武元はスマホのライトを灯けた。

うるか「うわっ、街灯も全部消えてんじやん！」

純「ホントだ！」

成幸「こりや完全に停電だな。」

うるか「うひゃーっ、停電だって！テンションあがる!!」

純・成「「なんでだよ!?!」」

俺と成が同時に突っ込む。

緒方「まったく理解に苦しみますね。停電くらいで……。一体何をはしゃいでるのですか。」

緒方はそう言いながら、成の体に密着していた。成が横にずれると緒方も成の近くに移動する。

成幸「あの、緒方……。もしかして暗いの怖」

緒方「1ピコメートルもそんなことはありません。」

成と緒方がそんなやりとりをしていると、俺と緒方、そして武元が持っていたスマホ

の電池が切れる音がした。

うるか「ありや・・・、充電切れちった。」

純「俺もだ。やっべえ、充電器鞆の中だ・・・。」

すると緒方は成の体に密着した。それを見た俺は、

純「武元。その・・・、なんだ・・・、手、繋ぐか？危ないし。」

うるか「えっ、いいの？」

純「ああ、なんか暗いと不安だろ？だから、さ・・・。」

そう言つて、俺は武元の手を取る。すると武元は、

うるか「う、うん!!喜んで!!」

俺の手をギュツと掴む。

うるか（恥ずかしい・・・／＼でも、幸せ・・・／＼）

純（武元の手、柔らかいな・・・。よく見えないけど、なんか良い匂いするし・・・。つて何考えてんだろ、俺!!）

そう思っていると、

成幸「純、武元、緒方、心配すんな。」

そう言うと、成はアルミホイールとサラダ油を取り出し、ティッシュをろうそく代わりにして、即席ろうそくを作った。

成幸「うちはしよつちゆう電気止められちまうからな。そう言う夜は、こいつの灯りで勉強するわけよ。はっはっはっ。」

純「お前、けっこー笑いづれーよそれ……。」
すると、緒方が、

緒方「なんだか……、お誕生日みたいです……。」

成幸「だよな！」

成は共感するが緒方はすぐにそっぽを向く。

緒方「今のは失言です。忘れてください。」

成幸「俺なあ……、電気は便利だし、使えないと困っちゃうけどさ、たまに誰かと暗い中灯りを囲むのは嫌いじゃないんだよ。普段あつた人との距離がぐつと縮まるような気がしてさ。」

成の言葉に緒方は恥ずかしそうに言う。

緒方「まあ……、そういう側面も、なくはない……かもしれないね。」
成は緒方の言葉に微笑む。

うるか「ところでさー、この火って、どのくらいもつの？」

成幸「まあ、その油の量なら30分くらいは……、つてかあんま息を吹きかけると……」
成の忠告も虚しく、武元の息によりろうそくの火が消え、全員がパニックになった。

うるか「わああっ、消えちったあ!!」

純「落ち着け武元!成、ライターはどこにあるの?」

成幸「確かこの辺に:。」

純「お前、それ俺の手!」

成幸「わあ、悪い、じゃあ、ここか。」

緒方「ちよ:っ、唯我さんそれは:ひゃん♡」

成幸「あ、あれっ!?ちがった!」

俺たちが暗闇でドタバタしていると急に部屋の電気が点く。

成幸「あつ:停電、直ったみたいだな:つてあれ:?どうしたの?」

純「あつ、武元、大丈夫?」

うるか「う、うん。大丈夫／＼／」

純「つて、わりい、近かったな!!」

うるか「ううん!!大丈夫だから!!(嬉しいけど、恥ずかしい／＼／)」

緒方「最低です:。」

成幸「怖っ!!俺は一体何をした!!」

俺たち3人は、それぞれ背中を向けて座っている。成に至っては、背中に『私はヘン

「タイです」と書かれた紙を貼られている。

成幸「え、えーと…、まあ、なんだ。停電も直ったことだし…、小論文の続きをやるか、緒方。」

純「ああ、そうだったな。」

緒方「…いいえ、もういいんです。帰ります。」

成幸「はあ!!まだやれるって!!」

緒方「それではさようなら。」

成幸「緒方アア!!」

純（答え、見つかったのか?あれで…。）

翌日…

成幸「…え?提出できたの?小論文。」

純「マジか。」

緒方「はい。提出したら、今回はちゃんと受け取ってもらえました。」

成幸（何だったんだよ昨日のは!?)

緒方「唯我さんと安達さんのおかげです。ありがとうございます。」

成幸「お…、おう…？」

純（俺ら結局なんかしたっけ？）

一方、職員室では…

桐須「それ、緒方さんの小論文ですか？」

先生「ええ。やつと提出してきましたね。『文明の庇護から離れた時にこそ、人と人との本来あるべき距離を再認識できるものなのかもしれない』か…。」

桐須「凡庸。いつそ稚拙といつてもいい見解ですね。」

先生「相変わらず桐須先生は手厳しいですな。ですが、あの緒方がこうやって自分の意見を書いてきたんです。そこは進歩じゃないですか。」

そういつた話をしていたのであった。

6話

成幸「なんだって!? 来週までに英単語50個覚えないと補習!」
うるか「そう!! 補習で部活出れなくなっちゃうんだよう!!」

俺達は今、放課後武元の英語の勉強のためファミレスに来ている。

来週スポーツ特進クラスの英単語テストがあり、結果が悪ければ補習があり、部活に出れないという話だ。

純「そういや、そんな話あつたな・・・」

うるか「もうあたしどうしたら良いのかーっ!!」

成幸「うん、覚えれば。」

純「まあ、そうだな。」

うるか「そんな他人事みたいに!! なんか愛足んなくない?」

緒方「100%他人事ですし、愛とかありませんし。」

純「つーか『覚えろ』以外どう言えと?」

成幸「確かに。」

うるか「あーもう分かってない!!あたしにとつてものを覚えることがどれほどしんどいことか!!」

成幸「威張ることじゃないだろ・・・。」

純「成、出題内容は分かっているんだと思うし、一旦テストしてみたらどうだ？」

成幸「そうだな、そうしてみるか。」

その結果、

うるか「てへぺろっ。」

見事に0点だった。

純「お前、マジかよ・・・。」

緒方「部活・・・、残念でしたね。では私達はこれで。」

うるか「決断が早いよ、リズりん!そういうリズりんは、英単語どれくらい出来るっていうのさーっ!!」

緒方「私ですか・・・?」

そう言うと、緒方は鞆の中に入っている用紙を取って、

緒方「これは今日の小テストですが?」

うるか「68点!?そ・・・そんな、信じていたのに・・・っ!!」

緒方「単語に限らず、英語なら平均点くらいは取れますが。」

うるか「はっ、そうだ文乃っち！文乃っちは味方だよね!!」

古橋は武元に100点の答案用紙を見せる。

それを見た瞬間、

うるか「ギヤアアーツ!!」

武元は倒れた。

古橋「あつでも・・・、暗記がちよつと得意なだけで、普通の英語のテストは私も平均点くらいだよ！ホラ暗記なんて誰にでも出来るし！」

古橋の最後の一言が、武元に刺さる。

その様子を見てられなくなった俺と成は武元に言う。

成幸「いいか武元・・・。暗記は地道に根気強く!!だ!!」

純「うん、何度も何度もひたすら書いて覚えるしかねーよ。」

成幸「反対語や派生語は無視していい。まずは一語一義をカンペキに!!そして、単語と意味を何度も口に出し、音として耳に定着させる！発音記号をちゃんと見て、正しい発音を心がけろ！」

すると武元はげんりとした顔になる。

純「あからさまに嫌そうな力才すんなよ。気持ち分かるが・・・。」

古橋は席を立ち上がり、武元の隣に座り言う。

古橋「よーし、うるかちゃん頑張ろっ！ね？私達も手伝うからっ。」

緒方「達!？」

純「そうだな。成も緒方も手伝おう!!」

成幸「そうだな。」

武元「あ．．．う、うん。ありがと、文乃っち！」

こうして俺達は、武元の英単語テストに向け英語を教えることになった。

うるか（な．．．なんかこの距離で改めて見ると文乃っちって．．．、圧倒的美少女
すぎない!?髪サラツサラだし肌きれいだしまっげ長いし．．．、その上優しくて守って
あげたくなるカンジで．．．、てかめっちゃ良い匂い．．．）

うるか（ぶっちゃけ．．．、あたしの理想そのものなんですけど!!やっぱ純も、こう
いう子が好きなのかな。そりやそうだよね．．．、あたしが文乃っちに勝ってるトコな
んてひとつも．．．）

すると武元は、古橋のある一点を見て、

うるか（あ、いつこあつた．．．!）

純「おい武元。さつきから全然手動いてねーぞ！」

うるか「よおーっし、負けないから!!暗記だろーがなんだろーがドンとこーい！」

古橋「あれ・・・、なんでかなあ、今心に謎のダメージが・・・。」

それから5時間後、

うるか「もうヤダ・・・、勉強あきた・・・、泳ぎたいよう・・・。」

緒方「武元さん・・・、5分毎にそうなるのやめてください・・・。」

純「お前どんだけ集中力ねーんだよ!!」

さつきから何度もテストをしているが全て0点だった・・・。

古橋「あはは・・・、大丈夫大丈夫うるかちゃん、もうちよつと頑張ってみようよ。」

古橋に至っては、口から魂が抜け出していた。

成幸「古橋からなんか出とる!! 戻れえーっ!!」

成は抜け出した古橋の魂を元に戻す。

うるか「うう・・・、辛いよう・・・、勉強って全然楽しくないんだもん・・・。あ、

あのさ、こういうのってさ・・・、まず英語の楽しさとかそういうの先に教えてくれたりしないのかなーって・・・。」

すると成が、

成幸「ねえよ、そんなもん。」

成の言葉に武元は驚く。

成幸「『できない』奴にとつて、勉強は辛くて当たり前なんだ。『できない』まま楽しくなるなんてあり得ない。『できない』なりに地道にコツコツ積み重ねて、少しずつできるようになって初めて『楽しさ』が生まれると俺は思う。」

純「俺も同感だ。俺だって、最初から野球ができたわけじゃない。毎日ひたすら練習をして、試合に出て結果を残してから、野球が楽しくなってきたよ。武元だって、初めっからすげえ水泳好きだったわけじゃないよな・・・？」

うるか「う、うん・・・。(最初はただ悔しさをバネに毎日ひたすら練習をして・・・、確かに水泳が楽しくなったのって、タイムが出るようになってからだった・・・けど。)」
うるか「な・・・、なんだよ、そんなの覚えてたわけ？キモイなー純。(覚えててくれたんだ・・・、嬉しい・・・。)」

純「まあ、お前の水泳に対する集中力は半端ねーからさ、俺も見習わなくちゃってよく・・・。」

その時、俺は一つのことを閃いた。

純「そ・・・、そうか。良いこと思いついた!!」

成幸「純、どうした？」

純「みんな、明日の放課後学校のプールに来て水着を着てくれないか。」

俺はそう言って解散した。

翌日、

純「行くぞー武元！『degree』！」

それを聞いた武元は水中に潜り、「程度」と書かれたボールを持って上がる。

純「正解ッ!!」

そのあと俺が英単語を言い、武元がその答えが書かれてあるボールを水中から取るという作業を繰り返して、そして・・・、

うるか「50個達成!!みんなありがとーっ!!」

古橋「やったあーっ!!」

純「やつぱり、武元の水泳への集中力を勉強に活かしてみても正解だったな。」

成幸「さすがだな、純!!」

古橋「安達君えらい！」

緒方「まったく、何故私までこんな事を・・・、自分の勉強はあまり・・・」

すると武元が、緒方の後ろに行き、

武元「リズりんもありがとーっ！」

緒方のパーカーを取った。

緒方「な．．．っ、何をするんですか！」

純（成、チラチラ見すぎだ。気持ち分かるが．．．。）

うるか「何って．．．、せっかくプールで水着なんだし．．．、泳がなきゃねー♡」

古橋「確かに！」

緒方「え．．．、いや私は．．．。」

すると武元が、

うるか「あれっ？もしかしてリズりんも泳げなかった？」

純（あつ、成が反応した。）

緒方「心外です。あまり見くびらなだけでいただけですか、武元さん。」

そう言つて、緒方はプールに入ったが、

古橋「キヤーツ、りっちやーん!!」

純（成同様、カナヅチか．．．。なんで強がった．．．。）

うるか「リズりんってさー．．．、けっこーイミもなく強がるよね。」

成幸「メチャクチャ同類じゃねーか！」

帰り道、

うるか「よおっしや！これでテストもカンペキ！気兼ねなく泳げるー♪」

成幸「あのな・・・、今日覚えても定着させなきやすぐ忘れちゃうからな。テストまでしっかり復習しとけよ。」

純「後、普段よく目にする机やトイレの壁に単語貼つとくのもおすすぬかな。」

うるか「ねえ・・・純、成幸。」

武元が俺と成を呼ぶ。

うるか「勉強は辛くて当たり前だつて言つてたじゃん？」

純「ああ。」

成幸「それがどうした？」

うるか「あたしもそう思うし、勉強はやっぱキライなんだけどさ、そんな辛いことでも、文乃つちやリズりんみたいな仲間と一緒に目標に向かって頑張るのつて、けっこう楽しいよ。」

純「そつか・・・。」

成幸「武元・・・。」

うるか「ま、まあ一番は純・・・が一緒にいて・・・つてトコが・・・その・・・。」

純「？俺が？何？」

うるか「なんでもないつ。」

そう言つて、俺に紙袋を差し出す。

純「え……？」

うるか「お礼！今日のこともそうだけど、いつも世話になってるし……さ！ちゃん
と使えよなーっ！」

そう言つて、武元は緒方達2人のところに行つた。

純「なあ、成。教育係つてのも、案外悪くねーな。俺はサポート役だけど。」
成幸「ああ、そうだな。」

安達家

純「……で、武元よ……。これを……。どう使えと……。」
紙袋には使用済みの水着が入っていた。

同時刻、武元家

うるか「うぎやーっ!!純に渡す袋間違えたーっ!!」

武元の横には、本来渡す筈であつた野球のアンダーシャツが置いてある。

うるか「好きな男子に使用済み水着渡す女子高生がどこにいるんだよオーっ!!いつそ

殺せよーっつ!!」

後日武元は純に無事アンダーシャツを渡すのであった。

7話

成幸「よーしみんな！来週からはついに3年最初の中間テストだ!!なんとしても平均点以上とってやろうぜ！」

俺達は、来週行われる中間テストのため、図書室で勉強をしていた。

うるか「おお！気合入ってんね、成幸！」

純「まあ、教育係になって初めてのテストだ。そりゃあ気合入るわ。」

うるか「そうだね！あり？それにひきかえ・・・、文乃つちとリズムりん、なんか元気なくない？」

純「確かに。どうかしたの？」

古橋「そ、そんなことないよ！よおーしががんばるぞお！」

そして、俺達は勉強を始めた。

成幸「だからここの『have to』は、『持つ』じゃなくて、『しなくてはならない』で・・・」

うるか「うえつ、えーつ・・・と、『must』と同じってこと？」

成幸「おつ、よく覚えたな！でも、否定文では意味変わるから気をつけろよ。」

純「スゲーじゃん、武元。」

うるか「へへ、ありがとう、純。」

すると、

緒方「あの・・・、唯我さん。お願いがあるのですが。」

緒方が成に話しかけてきた。

緒方「明日の日曜、私のうちで勉強を見てくれませんか。」

どうやら、勉強の手伝いをお願いらしい。

成幸「ああ、いいぜ。」

緒方「ありがとうございます。では、明日。」

そう言つて、緒方は勉強を再開した。

そして、中間テスト当日・・・

純「うーっす、成。」

成幸「おお、純か。」

純「ああ、いよいよだな。」

成幸「ああ、あいつらなら大丈夫だろう。」

純「そうだな。じゃ、また後で。」

成幸「ああ、また。」

そう言つて俺達は席に戻つた。

そして、初日のテストが終わつた後・・・

成幸「自己採点結果・・・、」

純成幸うるか「71点!？」

成幸「えええマジで!?どうしたお前!？」

純「マジスゲーじゃん!？」

うるか「リズりんスゲー!!」

緒方「国語でこんなハイグレードな点数初めてとりました・・・。」

成幸「よく頑張つたなあ、緒方・・・。」

純「成が泣いてる・・・。」

うるか「ああーっ、ホントだ!」

成幸「バツカ、泣いてねーよバツカ!」

緒方（抜き打ち問題、マグレで正解したのは黙っておきましょう・・・。）

純「後は明日の数学だけだな。」

成幸「ああ、気合入れていこうぜ古橋!!」

そう言つて、俺達は振り向いたが、

古橋「まつかせてー、ゴホゴホ……。」

純「おい、これつて……。」

成幸「アカンやつや……。」

明らかに体調がヤバイ姿であつた……。

保健室

成幸「38.5度。完全にダメなやつじゃねえか……。」

純「ああ、これは……。」

緒方「大丈夫ですか文乃？」

うるか「こりや明日のテスト厳しそうだねー……。」

成幸「そうだな……。先生に相談して、明日の分は追試にしてもらおうか……。」

純「だな。そうした方が良いかも。」

すると古橋が、

古橋「そつ、それはダメ……!ゴホゴホ!」

そう言ってきた。

うるか「文乃っち!!」

緒方「う、うどん食べますか!？」

純「お前ら、落ち着け。」

古橋「ゴホゴホ……。追試になったら、テストの点数8割換算になっちゃう……。

数学、ただでさえ厳しいのに、それじゃ平均点なんて絶対……。」

成幸「いや、でもお前……。」

純「これで体壊したらヤベーぞ。」

すると武元が、

うるか「じゃーさ、明日までに治すつきやないね!」

一瞬場が微妙な空気に包まれた。

うるか「ダイジョーブ!風邪なんかあったかい物食べて、一晚寝れば治るから!」

純「まあ、そうかもしんねーが……。」

成幸(武元、誰もがお前と同じシンプルな体の作りをしてとは思わない方がいいぞ……)。

うるか「てなわけで、気合入れて看病するよ、純、成幸!」

そうして、武元と俺、そして成の3人で古橋の看病に行くことになった。

その道中・・・

成幸「看病は良いけど、本当に俺達が行っても良いのかな・・・」

純「まあ、いんじやね。別に看病くらいで古橋は文句言わねーだろ。」

成幸「そうだけど・・・、しかし緒方、店の手伝いで行けないからって、食材やら何やら持たせすぎたろ。」

純「まあ、そんだけ古橋のことが心配なんだろ。おつ、地図によるとココだな。」

俺達の目の前には、でかい家というか、屋敷があつた。

純「スゲー家。」

成幸「さては金持ちか。」

そう言つて、成はインターホンを鳴らした。

成幸「おや？」

純「そういうや、『今日誰も家にいないから、勝手に入って良いよ。』つて言つてたな。」

成幸「そうだったな。それって、ハードル高くない？」

純「まあ、本人がそう言ってるんだから、いんじやね。お邪魔します。」

成幸「お・・・、お邪魔します・・・、うお、玄関広・・・っ！」

純「階段もフカフカだし、音もしねーな。」

成幸「ああ、そうだな。」

そう言つて、俺達は古橋の部屋の前に着いた。

純「ここか。」

俺はノックをし、

純「おーい古橋、具合はどうだ・・・？」

うるか「あつちよつ待つ!!」

古橋「え・・・っ。」

俺達の目の前には上半身裸になつて武元に背中を拭いてもらつている古橋の姿があつた。成に至つては、固まつちやつたよ。

古橋「え、え・・・？」

純「あつ、わりい。」

うるか「純のばかー!!女子の部屋返事聞かずに入るとか何考えてんの!?変態っ!!」

純「だから、悪かつたつて!!」

成幸「わーっ、すみませんすみません!!」

うるか「早く出てけ!!」

そう言つて、武元は俺達にタオルを投げつけた。あつ、避けたら成に当たつた。

純「ああ、俺中学の時に武元んちに行ったことがあつて、その名残でつい・・・。」

成幸「何してくれてんだよ、お前!!」

うるか「もう入っていいよ。」

成幸「ひやいつ!!」

純「そっか。」

すると武元は、俺と成を、特に俺のことを見つめる。

純「何、どしたの？」

うるか「別にい……、やっぱ純も男の子だし……、『そういう』の……、見たいと思うもんなの……かなって。」

純「そういうのって……?」

うるか「はっ、違うから!見せたりしないからね!純のエッチ!!」

純「何言ってるの、お前!」

そして、俺達は古橋の部屋に入った。

成幸「古橋、具合はどうだ?これ差し入れ……って、なんで顔まで布団かぶってるだ?」

成がそう言うと古橋は、

古橋「……だって、パ……パジャマだし……、か……髪とかボサボサだし……恥ずかしい……。」

成幸「おっおおそうか!!」

純（こりやあ、普通の男が見たら、コロツと落ちるぞ・・・。）

うるか（ぬうーっ、女のあたしから見てもカワイイなくっそー!!）

俺達はキッチンに移動し、

うるか「ひゃー、広いキッチン！うちとは大違い！さてと・・・、純と成幸が食材持ってきてくれたし、腕を振るっちゃおうかな♡」

成幸（おいおい大丈夫なのか・・・!?!）

成が不安を感じていたので、

純「大丈夫だよ。こいつの料理はマジで美味いから。」

そう言ってやった。すると武元はそのまま素早い手つきで、料理を作った。

うるか「じゃーんっ、うるか特製玉子がゆと・・・、しょうがとねぎのとろみスープ

！あつたまるよーっ！」

成幸「おおーっ!?!」

純「やべ、美味そー!!」

そして、成と俺は玉子がゆを口に運んだ。

成幸「うっまーっ!!なんだこれ超うめえ!純の言うとおり、ホントに料理できたんだ!!」

純「お前また腕上げたんじゃね!?更に美味くなってる!!」

うるか「まあ、あの時純に褒められたのが嬉しくて・・・／＼／＼」

純「しかし、お前そういうカツコしてると、なんか新妻みてーだな。」

うるか「えっ・・・。」

すると武元の脳内の中で・・・

うるか『ダーリン、ただいまのチューは?』

純『ハニー、ただいまのチューだ。』

妄想終了

うるか「ななななに言ってるのもーっ!!」

純「?」

そして夜……

古橋「ん。」

成幸「起きたか古橋。具合どうだ？」

古橋「うん……、ありがとう。3人のおかげで熱もだいぶ下がったみたい……。」

純「うん、大分顔色良さそうだな。」

成幸「ああ、そうだな。」

純「あつ、俺ちよつとスーパーに行つてくるわ。」

成幸「ああ、分かった。何買うんだ？」

純「ちよつとな。」

そう言つて、俺はスーパーに行つた。

古橋「唯我君、安達君と本当に仲が良いわね。」

成幸「まあ、小学校の頃からの付き合いだしな。」

古橋「そう言えば、そう言つてたね。あつ……。」

成幸「あ、あの、すまん古橋……、机の上に広げてたテキスト、見させてもらったんだが……、お前今回のテスト範囲……、けっこう解けてるじゃねーか！」

古橋「え、えへへっ、やつぱりそうかなつ？」

古橋「……ちよつと前にね……、唯我君教えてくれたでしょ？『数式も結局は人

うるか「終わったよー。まったく成幸ったら・・・。」

成幸「なんか言い出しづらくて・・・。」

うるか「ふーん。それより、純はどこに行つてたの？」

純「近くのスーパーに行つて、肉とモヤシを買つてきた。風邪用の肉野菜炒めを作ろうと思つて。」

うるか「おおーっ、そうなんだ。」

純「お前らの分も作るぞ。」

うるか「ホント!!メツチャ嬉しー!!」

純「はは。武元ほどじゃねーけどな。成も良いよな。」

成幸「ああ、良いぜ。」

純「よし!じゃあ待つてろ!!」

そう言つて、俺は素早い手つきで、肉野菜炒めを作つた。

純「ほい、肉野菜炒めの出来上がり!!」

うるか「ヤバイっ!!チョー美味しい!!」

成幸「お前また腕上げた?」

純「たいしたもんじゃねーよ。さて、古橋にも持つて行くぞ。」

そうして、俺達は肉野菜炒めを食べたのであつた。

そして次の日の放課後・・・

うるか「コホン。てなわけでー！中間テスト、クリアおめでとー！よし今日は飲むぞー！」

成幸「武元・・・、お前の英語全然赤点ギリギリなんだが・・・。」

純「成。今日くらいはいんじやね。」

古橋「そうだよ、唯我君。」

成幸「ま・・・、そうだな。」

純（第一関門はクリアつてとこか。先は長そーだけど・・・。）

成幸「ふえ・・・、ふえーつくしよーい!!」

純うるか緒方「!!」

古橋「ゆ・・・唯我君・・・!？」

その後、成は思いっきり古橋の風邪がうつったのであった・・・。

8話

春季県大会を優勝した、俺達一ノ瀬学園は、意気揚々と関東大会に挑む。

俺達は、明日の2回戦の第2試合だ。

今さつきその相手が決まり、相手は今年の選抜の準々決勝で負けた相手だ。俺はその日チーム事情で投げず、ベンチで敗戦を見届けた。

あの日の借りを返すチャンスだ。

純（あの日は投げなかったけど、今日は俺が先発。ゼツテー借りを返してやる！）

吉田「純、行くぞ。」

純「ああ。」

よっしゃ、やってやる!!

一方成幸たちは・・・

うるか「しっかし、成幸風邪が治って良かったね！」

成幸「ああ、なんとかなったよ。」

古橋「ごめんね。私の風邪がうつっちゃったんだよね。」

成幸「古橋のせいじゃないって。体調管理を怠った俺が悪いんだし。」
緒方「でも、テストが終わったタイミグで本当に良かったですね。」
成幸「ああ、そうだな。よし、今日も気合入れて勉強頑張ろうぜ！」
すると、

うるか「そういえば、今日純の試合だったね。」

成幸「そういえば、そうだったな。」

うるか「観に行きたかったなあ・・・。」

成幸「まあ、こればかりはしよーがねーよ。俺ら授業あるし、武元は部活だろ。」

うるか「うん・・・。」

成幸「さあ、気を取り直して勉強しようぜ。」

こうして、成幸達は勉強を再開したのであった。

ちなみに一ノ瀬学園は、初戦を5―0と快勝し、純もこの試合完封勝利を収め、準々決勝に進出したのであった。

それから4日後、

その日武元は、部活が終わり、家の部屋のベッドの上で寝転んで天井を見上げていた。

うるか「・・・純。」

ここ最近、勉強も部活もあまり身が入らなかつた。それは純がいないからである。去年もこういったことが普通にあつたのだが、ここまで寂しい気持ちにはならなかつた。そのため、川瀬と海原はもちろん、他の部員達には迷惑をかけてしまった。

純が成幸の教育係のサポート役になって、純と特に深く関わるようになったからか、以前よりもっと、顔が見たい、会つて話が見たい、そんな気持ちが日に日にどんどん強くなつていったのである。

うるか（これって、純のことがもっと好きになつたつてことかな・・・。）

右腕を顔の上に乗せて目を閉じる。すると真つ先に純の顔が浮かび上がってくる。

うるか（純・・・、会いたいよ・・・。会つて、色々話が見たいよ・・・。）

一方一ノ瀬ナイン達は、

純「・・・？」

不意に、純は武元の声が聞こえた気がしたので、視線を窓に向ける。じつ、とその方向に目を向けたまま純は黙つてしまう。

吉田「純、どうかしたか？」

純「いや・・・、なんもない。」

吉田「そうか。明日決勝だからな、今日はゆっくり休めよ。」

純「今日投げてねーから疲れは全くないんだが、まあ、お言葉に甘えて。」

吉田「ああ、お休み。」

純「ああ。」

そして、2人は別れた。

純（なんか、武元の声が聞こえた気がするんだが、気のせいか・・・。）

そう思いながら、休んだ純であった。

翌日、関東大会決勝は、純の投打に渡る活躍で、10—0と快勝し、堂々と関東大会を優勝で飾ったのであった。

それから数日後、

一ノ瀬学園3—B教室では、

海原「うるか、最近元気ないね。なんでかは分かるけど・・・。」

川瀬「そうね。にしても異常じゃない？去年まではこんなことなかったのに。」

うるか「うう、そうだけど・・・。」

川瀬と海原、武元ら水泳部員が一緒になって話している。

川瀬「でも安達君、関東大会では大活躍だったじゃん。」

うるか「そうだね・・・(はあ、寂しいよ・・・)。」

海原「ダメだこりゃ・・・。」

そう話していたときだった。

純「ああ、いたいた。おーい、武元。」

うるか「純!?!」

武元が勢いよくガバツと起き上がった。

純「おはよ、武元。川瀬も海原も。」

うるか「オ、オハヨウ、純!?!」

海原「おはよう、安達君。」

川瀬「おはよう、安達。」

純「武元、勉強はかどってる?」

うるか「うん、まあなんとか。」

純「そつか・・・。」

うるか「あつ、関東大会優勝オメデトー!」

純「ありがとう。」

うるか「次は夏だね。頑張つて!!ゼツタイ観に行くから!!」

純「ああ、ありがとう。」

そう言つて、純は武元の頭を撫でた。

うるか（久しぶりの純の姿。そして頭を撫でられた。ヤバイ、幸せ……／＼／＼このまま永遠に続けば良いのに……。）

するとチャイムが鳴り、

純「そんじやあ、俺行くわ。」

うるか「えつ、あ、うん。また後で。」

そうして、純は3—Bの教室を後にしたのであつた。

最も、その日武元は川瀬と海原の2人に盛大にからかわれたのであるが……。

9話

一ノ瀬学園女子水泳部部室

海原「えーっ!?嘘でしょ、うるか!」

川瀬「あんたまだ告白してないの!」

うるか「ちょ・・・、声でかいつて!」

海原「一体何年越しの恋よ。」

川瀬「どんだけ乙女なわけ、あんた……。つーか、頭撫でてもらってるんだから、もう付き合ってるのかと・・・。」

うるか「もう、どうだつていーじゃん、うっさいなーっ!!」
すると、

海原「困ったもんですなー、川瀬隊員。」

川瀬「まったくですな、海原隊員。」

うるか「また筋肉ついたかなー?」

海原「ねーねー、うるか。」

うるか「ん？」

川瀬「部活終わったら、ツラ貸しな。」

そして部活が終わった後、3人はレディースファッションにいた。

川瀬「ホラうるかー。」

海原「恥ずかしがらずに出てきなつて。」

すると試着室にいる武元は、

うるか「ムリ。ムリムリムリ!!こんなあたしに似合うわけないじゃん!」

恥ずかしがって出てこなかった。

海原「んなことないつてばー。」

うるか「んなことあるよー!やっぱもう脱ぐ!!」

川瀬「いーからカンネンして出てきやがれ!!」

渋る武元にイライラした2人は、試着室のカーテンを開けた。すると、

うるか「ひやつ!!」

いかにも、お姫様みたいな可愛らしい姿をした武元がそこにいたのであった。

うるか「うゝつ。」

川瀬「・・・うん。もういいから、それで安達に迫ってこい。」

海原「それな。」

うるか「迫・・・ッ!？」

川瀬「すみませーん、これ買いまーす。」

うるか「ああ、ちょ!!」

海原「制服は預かつとくねー♪」

うるか「ええーっ!？」

海原川瀬「「じゃっ。」

うるか「ちよちよちよ、ちよつとー!」

仕方なく、武元はその格好のまま、店を出たのであった。

うるか（ううう、こんなカツコ、どう考えてもあたしの柄じゃないじゃん!!もしこん

なトコ、純に見られたら・・・。）

すると、

純「あれ、武元?」

うるか「ひい!？」

純「こんなところでどーしたんだ?」

うるか「へっ、あの、その、さ、参考書買おうと思って、それで・・・。」

純「ああ、だったら付き合おつか? つつても、俺もちょうど本屋に寄ろうと思ってた

トコだし。」

うるか「はっ？」

そして、2人で本屋に入った。

純「うーん、これか、いやしかし……。成がいたら分かるんだろうけど……。」

うるか（な、なんでこんなことに？このカツコのこと、純はどう思ってるのかな……？）

すると、1枚のポスターに目が入った。

うるか「あつ……。。」

回想

うるか小学生『うるかねー！大きくなったらお姫様になりたい！』

少年A『はー？何言ってるんだよ。』

少年B「全然似合ってるねーっての！」

少年C『それより高才ニしよーぜ！』

回想終了

うるか（『似合っていない』、『柄じゃない』って、こういうの諦め始めたのって、いつからだっけなー。）」

すると、

純「武元、これなんかどうだ!？」

うるか（近い!!）

純「成ほど分析できたか分かんねーけど、英単語・熟語やるなら多分これが良いと思う。」

うるか（耳元吐息!!ひゃあああつ!!）

子供「ママー、カップル!!」

うるか「!」

母親「コラ!指さすんじゃないやありません!」

うるか（カップルって・・・、あたし達って今・・・、恋人同士に見えるん・・・!?!）

うるか（肩・・・、当たってる・・・。あつたかい・・・。このまま・・・、このままくつついて、はなれなくなっちゃったらしいのに。って、何柄でもないこと考えてんだろ、あたし・・・。この服のせいだな・・・。きつと。）

純「って聞いてんのか?武元。」

うるか「ひゃいつ!!」

純「どうかしたか？」

うるか「あ、あははっ。なんでもない、なんでもないからあははっ!!」

そして、2人は本屋を後にした。

うるか（イカンイカン。レーサーにならないと！あたしと純がカップルに見えるはずない。）

店員「こちらカップル限定です！豪華賞品多数用意してますよー！ラインナップはこちらー！さーさー、カップルの皆様いかがですか？」

すると純が、

純「な!?あれは前から欲しかった、斉藤○巳モデルのグローブじゃん!?マジかつ!!こんなお宝、そうそう簡単に手に入れらんねーぞ。」

うるか（『カップル限定』。カップルだと安く買えるのかな?）

武元は純の手を取り、

うるか「行こつ、純！」

純「えっ!武元!!」

うるか「ほ、ほらあたし達ちようど男女だし?カップルって言い張りやなんとかなるっしょ!」

純「え．．．でもお前いいのかよ?俺とカップル役なんて．．．」

うるか「あ、当たり前じゃん！あたし、そういうのぜんっぜん気にしないし……。」
純「わるい、じゃあ頼むわ。」

そして、

店員「さあー、今年も始まりました！カップル限定お姫様抱っこ大会！！最後まで残った最も愛の深いカップルには……、豪華賞品が贈られるぜーっ！！」

純（んだこの大会……。っーか今年もつてことは、これ去年も一昨年もやつてたつてこと!?!）

うるか（近い!!嬉しい!恥ずかしい!!でも、何より……。最近また筋肉ついちゃったし……。『この筋肉女重い』とか思われたら……。どうしよう!!!）

店員「おーつとお、次々脱落していく!!最後に残るカップルは誰だー!?!」

うるか（純に重いか思われたら、あたし、生きていけないツツ!!）

純（こんくらいヨユーだけど、これいつになったら終わるんだよ!!武元はどう思ってるのか……。!）

すると、純が武元の様子を見たら、泣いているのに気づいた。

純（武元……。お前、泣くほど我慢してくれていたのか!!ならば、負けるわけにはいかねーなー!!）

うるか（うわああああん、あと汗臭いとかおもわれちゃったらどうしょオオオ!!）
純（ゼッター勝つからな、武元オオオ!!）

そして、純と武元のペアが優勝したのであった。

その帰り道・・・

純「・・・なんか悪かったな、武元。」

うるか「へ？何が？」

純「いや、その・・・お姫様抱っこ、泣くほど恥ずかしかったんだろ？」

うるか「・・・なんか、さっきの衝撃で、そういうのマヒしちやったかも・・・。」

純「え!？」

うるか「それより、このグローブ、斉藤○巳っていう選手のモデルなんだって？」

純「ああつ！俺が野球を始めたきつかけでもある選手だよ。俺、この人がいなければ、野球を始めてなかったし、むしろ野球を好きになってなかったかもしれないんだよ。」

うるか「そうなんだ!？」

純「ああつ!!背も高くてイケメンだし、投げるボールもヤバくて、何よりバッターを打ち取った時の雄叫びがメツチャカッコいいんだよね!!」

うるか「へえー。(いつもより饒舌だ・・・)今でも現役なの?」

純「いや、この人怪我、特に肩の怪我に苦しんで、18年のプロ生活だったんだけど、表舞台で活躍できたのは、4年間だけだったから、もう引退しちゃったよ・・・。」

うるか「そうなんだ・・・。(純、なんか寂しそう・・・。そんなに好きな選手だったんだ・・・)」

純「でも、この人のファンになったことは全く後悔してねーよ。だから、いつかこの人みたいに、いろんな人を魅了する選手になりたいんだ!!」

うるか「そっか!!ガンバってね!!(この純、なんかカワイイ・・・////)」

純「ああっ!!」

うるか「そうだ。ねえ、純。今日のあたしさ、お姫様みたいじゃない?」

うるか「こ・・・、このカツコ、似合って・・・ないかな・・・?」

純「に、グフウ!!なにすんだ武元!!」

うるか「あ、あはは。やっぱいいや!純の感想なんて、別にどうでもいいしっ!じゃあねっ!」

純(・・・?なんだ?)

純(でも、恥ずかしくて最後まで言えなかったな・・・、似合ってたって・・・。)そう思っていた純であった・・・。

その翌日・・・

川瀬「なにイイイ、お姫様抱っこされただつて!?! そんな女子の憧れ第3位をいきなり!!何があつた!?!」

海原「今夜は赤飯だー!!!」

うるか「だから、声でかいて!」

そんなやりとりをしていた3人であった。

10話

古橋家

古橋「ふーっ、さっぱりした！よし、夜の勉強も頑張るぞ!!」

その時、体重計が目に入った古橋は、体重計に乗って、測ってみた。すると、古橋「!?きやあああッ!!」

翌日・・・

古橋（ふ・・・太ってしまった・・・。でも一体どうして・・・?）

古橋（太るようなことなんかしたっけなあ・・・。まったく見当もつかないよ・・・。）
そう思いながら、教室に入った。すると、

うるか「あつ、文乃っちだ。お菓子食べるー?」

緒方「うどの差し入れもありますよ、文乃。」

古橋「わーい、食べるー♡」

そう言い、古橋は2人のトコに座って食べた。

古橋「2人ともいつもありがとー♡」

うるか「うめー♪」

緒方「おかわりもあります。」

古橋「お菓子もおうどんも大好きっ!!」

すると、

古橋（つてコレだよーっ!!毎日こんな間食してるから太っちゃったんだよー!!）

古橋「ふ、ふたりとも、私以上にいつもいっぱい食べてるけど・・・、女の子として
もうちよつと節制しないと・・・、そ、その、太っちゃったり・・・とか・・・ねえ？」

すると武元が、

うるか「リズりんってさー、栄養全部おっぱいにいっちゃうタイプだよねー。」

緒方「ごふっ!!」

うるか「まー、あたしもなんかねー、いくら食べても太んないタイプっぽくってさー。
つーわけで、心配しなくても大丈夫じゃね!?!」

その発言を聞いた緒方と古橋は、

うるか「いたいたい。えー何コレなんの愛情表現ー?」

武元の頬を引っ張り合った。

古橋（・・・決めた。もう絶対余計な間食はしないもんっ!!）
すると、

純・成「「ういーす。」」

成幸「なんか妹の水希が、チーズタルト作り過ぎちやったとかだな。」
うるか「うおお！」

緒方「ほう・・・！」

純「水希ちゃん、マジ料理のレベル上がってるわ。」

古橋（チーズ・・・タルト!!）

古橋「・・・いつ、今おなかいっぱいだから・・・、4人で食べて・・・っ！」
うるか「えー、いいのー？じゃリズりん、純、コレ3等分ねー。」

緒方「待ってください。武元さんの方が2・4度大きいです。」

純「細かつ!!」

古橋（我慢・・・、我慢だよ、古橋文乃!!）

古橋（心頭滅却して勉強に集中すれば、このくらいの誘惑・・・ッ!!）

翌日・・・

うるか「見て見て！いつも行列で買えないレアプリンゲットしちゃった！！人数分あるから、みんなで食べよう♪」

成幸「おおー！」

純「いいねー！」

緒方「ほほう！」

古橋（えーと、接線の公式、 $y=f(a) \parallel f \boxtimes (a)$ だから・・・）

その翌日、放課後・・・

成幸「えっ！！緒方んちの試作品!？」

緒方「はい。」

うるか「ウナギうどん!?超ゴージャス!!」

純「ゼツテー美味いつて!!」

古橋（ $\text{COS} \cdot \theta \parallel \text{プリン} - \text{sin} \cdot \theta \times \text{プリン} \cdot \cdot \cdot$ ）

またその翌日

成幸「なんかまた、妹が本気出しちゃったみたいで……。」

純「水希ちゃん、何目的で作ったんだよ、それ……。」

うるか「妹ちゃんパネーツ!!」

古橋（プリンX・+ウナギーf（t）||うどんf a / b …）

純（先日から気になっていたが、あれヤベーな……。）

5日後……

部活の道中、

純「なあ、武元。」

うるか「なに、純?」

純「最近古橋、なんかおかしくね?」

うるか「えっ、そう?」

純「なんか最近、ムリして間食してねー気がする。」

うるか「ああ、なんかここんどこあんまし食べてないね文乃っち。今日の勉強もあまり集中してなかった気が。」

純「だろ。まさか、ダイエットしてたり。」

うるか「ええーっ、まっさかー！文乃っち、全然痩せてんじやん！」

純「それな。てか女子って、なんでそういうトコ極端に気にするんかねー？まあ、俺やお前の場合は、アスリートだからってのもあるが。」

うるか「まあ、あたしの場合は、いくら食べても太んないんだけどね。」

純「・・・お前、それ今のうちだと思うぞ。」

うるか「ああ!!それメツチャ失礼だかね!!」

純「いてて、殴んなって。冗談だよ。」

うるか「もう!!」

純「まあ、でも案外あっさり解決しちゃったりしてな。じゃ、また。」

うるか「うん!!部活頑張っ!!」

純「ああ、お前もな。」

うるか（ああ、純に頭撫でられるの、メツチャ幸せ・・・／／／）

後日、古橋の体重は、無事に元に戻ったのであった。

11話

本日は球技大会だ。この大会は、結果次第で体育の内申が加算される。俺は野球とバスケットに参加する。いっちょやりますか!!
つと、その前に、

3-Dの教室

純「ういーす。」

海原「あつ、安達君。おはよう。」

川瀬「安達、おはよう。」

純「おはよう。海原、川瀬。あれ、武元は？」

海原「うるかなら、まだ来てないよ。」

川瀬「多分遅刻だと思うよ。」

純「えっ、マジで。しゃーねーな。」

海原「何か用なの？」

純「ああ、先日武元に借りたCD返しに来たんだけど、どうしよっかなあ．．．。」

川瀬「私らが預かるよ。」

純「ホントか。悪い、助かる。ほい、コレ。」

川瀬「うん。しつかり渡しとくね。」

純「ありがとう。じゃ、また。」

そして、純は3—Dの教室を後にしたのであつた。

その後、

川瀬「おー！うるか、セーフ！」

海原「うるか、大丈夫？」

川瀬「球技大会だよ。後コレ、純から。」

うるか「ああ、ありがとう。つて、球技大会？いつ？」

海原「今日だよ。」

川瀬「いーからさっさと着替えてこんかい。」

うるか「うん。コレ食べたら。」

そう言つて、武元はおにぎりを食べた。

川瀬「けど、こんな遅刻珍しいな、うるか。」

うるか「いやー、昨日練習キツくて爆睡しちゃってさー、朝なんてホントバツバタで……。」

その時、武元はある違和感に気づいた。

うるか（この感触……、そしてこの爽やかな解放感……。ブラつけ忘れたー!!）
そしてそのまま、球技大会が始まったのである。

海原「うるか、なんで上ジャージなの？」

うるか「う、うんちよつと……。」

うるか（バタバタしてたとはいえアホすぎる……。こんなのもし純にバレちゃったら死んじゃうよう……。）

すると野球グラウンドから、

男子生徒A「たのむぜー、純ー！」

うるか「！」

男子生徒B「次も打ってくれよー！」

男子生徒C「俺らの内申かかかってるからなー！」

純「任せろよー！」

カキーン!!

大森「うおっ!! またホームラン!! さすが安達!!」

純「まあ、こんなもんか。続けよこば!」

小林「うん。ホームランは分からないけど。」

純「後、成も。」

成幸「ああ、惜しいトコがあつたからな。」

大森「いや全くねーから!!」

川瀬「流石安達ね・・・。」

海原「あつ、次小林君打つんだ! 安達君と並ぶイケメンだよねー!」

うるか（はう・・・。やつぱり野球をしてる純・・・、カッコイイよう・・・。／／／／）

うるか（つて見とれてる場合じゃないっしょ! 今日一日なるべく男子に近づかないよ

うにしないきや・・・。特に純には!）

しかし、バスケの試合で、

うるか（ウソでしょーっ!?!）

先生「では両チーム・・・礼!」

白黒「お願いしまーす!」

うるか（なんでよりによって男女混合!?!）

うるか（ま、まあちよつと見たくらいじゃあバレないよね?）

古橋「うるかちゃん!!」

パシッ

男子生徒D「武元にボールが・・・、そしてそれに当たるのは、安達。水泳部と野球部のエースのION1だー!!」

外野は盛り上がりつつあるが武元本人は、

うるか（め・・・つ、めつちや見られてるうう・・・。みんなが胸見てるような気がして・・・、動けないようう・・・!!）

視線を気にしすぎるあまり、動けないでいた。

純（何やってんだコイツ? スキだらけじゃねーか。）

そう思った純はあっさりボールを奪い、黒チームの選手をクロスオーバーしつつ進みシュートを決めた。

男子生徒E「まず最初のエース対決は、安達に軍配が上がったー!!」

男子生徒F「つーかあの動き、バスケット顔負けの動きじゃねーか!!」

成幸「あれ? つーか武元って、あんなにあっさり取られる筈ねーと思うんだけど・・・。うるか（わーんしまったー!! 今は胸のこと忘れなきや・・・!!）

うるか（集中、集中！）

大森「うお!？」

成幸「やっぱ速・・・ッ。」

うるか（とにかく速攻で決める！）

純（決められてたまるか!!）

コスツ

うるか「ひゃうっ!？」

ストツ

純「?」

ピッ

先生「トラベリング!!白ボール!」

そして前半が終わって、16―2と純がいる白チームがリードしていたのであった。

古橋「どうしたの?うるかちゃん。」

緒方「元気がないようですが・・・。」

緒方「うどん食べますか?」

うるか「別になんでも．．．。」

古橋「後半大丈夫そう？」

うるか「大丈夫大丈夫．．．。多分．．．、なんとか．．．。」

すると、

純「おーい武元！」

うるか「わっ、ちょ何純!?今敵同士でしょ!？」

純「いや．．．、ちよつと心配になつて．．．。」

うるか「え．．．?」

純「お前さー、スポーツやつてるのが一番生き生きしてるのに、なんか元気ねーか

ら、もしかして体調わりーのかなつて．．．。」

うるか「そ、そういうわけじゃ、ないけど．．．。」

純「そつか、なら良かった。じゃ。」

武元の記憶改ざん中．．．

純『スポーツやつてるのが、一番生き生きしてるぜ．．．。期待してるぜ．．．。輝
いてるぜ．．．。好きだぜ．．．。』

改ざん終了

うるか「文乃つち・・・、リズりん・・・、後半戦全力で勝つよーッ!!!」
古橋「え!?!あれ!?!おーっ!」

緒方「・・・。」

そして後半戦・・・

パシユ

男子生徒G「武元までもスリーポイント!一気に同点だー!!!」

純(てか、前半はなんだったの!?)

純「決められてたまるか!!」

男子生徒H「おおー!!最後のエース対決だー!!!」

チツ、ガコンツ

純うるか「うおおっ!!!」

ふよんっ

うるか（恥ずかしくなんか・・・、恥ずかしくなんかーッ!!）
ガッ

うるか（取った!!）

うるか「つて、」

純「え・・・？」

うるか「ひゃああっ!!」

ドシャーン

純が武元に覆い被さるような形になった。

うるか（な・・・、なな・・・!?!）

ピピーッ

先生「試合終了ー!!!」

うるか（バレた？バレたよね!?!いやでも純、意外とこういうのニブいし・・・。）

うるか（気づいてないと言つてーッ!!）

純「武元・・・、次からはちゃんと遅刻せずにしような。」

うるか「うぎゃーッ!!ダメだったー!!てかなんのフォローにもなつてないし、純のバ
カーッ!!」

その後、

うるか「ていうか、下に水着着れば良かったんじゃない!!あたしが一番バカだーッ!!」

海原「どしたん、うるか？」

川瀬「さあ？」

12話

球技大会から数日後、純達一ノ瀬学園の生徒らは、某県の山にある林間学校に来てい
る。

うるか「山だー！やっばい、テンションあがる！」

古橋「空気が美味しいねー！」

緒方「空気の味が分かるのですか。凄い味覚ですね、文乃。」

古橋「そう言う意味じゃなくて……。」

緒方「？」

一方、

成幸「大丈夫か？大森。」

大森「帰ってエ……。」

純「成。どうせコイツ、ろくな事考えてねーぞ。」

小林「今年も始まったねー。一ノ瀬学園名物2泊3日学習強化合宿。」

純「それな。勉強に力を入れるだけあるわ。」

大森「何が悲しゅうて山にまで来て……、朝から晩まで勉強しなきゃなんねーんだ！せめてフロが混浴であつたなら……。」

小林「んなわけないじゃん。」

純「確かに。大森、夢を見るのは諦めろ。」

大森「バカヤロウ。このくらい夢見なきゃやつてられつか！なあ唯我!!」
すると成幸は、

成幸「うおお！山ウドだ！これ天ぶらにすると美味いんだよ。」

純「成……、お前は……。」

小林「成ちゃんは通常運転だね。」

成幸「コレは是非持つて帰……。」

先生「こら男子ども、何たむろつてるー。」
ガシッ

先生「ほれ、ちゃんと列になって歩く！」

成幸「ああつ、ちよつと待って、あれは妹たちの好物でツ!!」

先生「何を言つとるんだお前は。」

成幸「山ウドオ……。」

純「成、諦めろ。」

すると、緒方が成幸の事を凝視していることに気づいた古橋は、

古橋「りっちゃんどうかした？さっきから唯我君のこと凄く見てるけど……。」

緒方「え……、誰がですか？」

古橋「だからりっちゃんだってば！」

そして教室、成幸は古橋と緒方の間に座り、純は武元の左隣に座っていた。

緒方（まったく文乃も妙なことを……。何故私が唯我さんを必要以上に注視しなければならぬのですか。）

そう思っていないながら、緒方は成幸を見る。

緒方（い……いや違います。今のは見たのではなく、たまたま視界に。）

成幸「あ、やべ間違えた。」

すると、成幸は間違えた箇所を消しゴムで消そうとしたが、かなり小さい消しゴムだったため、消しづらそうであった。それを見た緒方は予備の消しゴムを渡そうとしたが、

緒方（これを渡したら……、また『見ていた』などという事実無根も甚だしい疑いをかけられてしまうのでは……!?私は一体どうすれば……。）

すると、

古橋「もー唯我君つてば……。これあげる。私予備で2つ持つてるから。」

成幸「い……。いや、悪いよ古橋。」

古橋「これくらい気にしないでよ。いつも助けてもらってるんだから。」
すると緒方、頬を膨らませたのであった。

成幸「それじゃあ、お言葉に甘えて……。」

成幸「わっ。」

古橋「あらら。」

消しゴムを落としてしまった成幸。

成幸「ああ、すまん。」

そう言つて消しゴムを拾うが、

うるか「ほい、成幸。」

成幸「ありがとう、武元。」

武元が拾つてくれたので、無事成幸の手に戻ったのだが、それを見ていた緒方は、ますます頬を膨らませたのであった。

緒方（これはきつとカルシウム不足です。でなければ、この原因不明のイライラに説明が付きません。）

緒方「も・・・、も・・・ちよい。ふくく・・・っ。」
すると、

ガシャン

成幸「よう緒方。勉強は進んでるか？わかんないトコあればいつでも聞い・・・」

しかし、緒方は顔をそらしてしまい、成幸が顔を見ようとしてもそらし続けたのであった。

緒方「ゆつ唯我さんには関係ないでしょ!?放っておいてくださいっ!!」

成幸（えええええ、俺確か・・・、君の教育係だよね!?）

緒方「さささ、さようならっ!!」

成幸「えっ、どこ行くの!?!外出禁止だけど・・・。」

緒方「少し外の空気吸ってくるだけです!美味しいらしいので!」

そう言つて、緒方は外に出てしまったのであった。

成幸（え・・・何?急な反抗期・・・?）

純「どつたの、成?」

成幸「ああ、純か。なんか緒方の様子がおかしくて。」

純「そうなの？まあ、色々あんじやね？」

成幸「そうなのかな？」

そして夕方、

うるか「夜枕投げしよーぜ！」

古橋「いえーい！」

純「はは。ここに来てても相変わらずだな、武元。」

うるか「へへ、まあね。」

純「しつかし、山の天気って、変わりやすいなあ。スゲえ雨だぞ。」

うるか「ホントだねー。」

古橋「そうだね。」

純「ああ、こりやウチの野球部、自主練は隣の体育館かな。」

うるか「えっ、自主練すんの!？」

純「ああ。少しだけな。ボールとかは当然持ってきてねーから、ちよつと体を動かし
たりな。」

古橋「そうなんだ。」

うるか「へえ。そういうや野球部って、練習時間が終わっても、居残りで練習する人多いね。」

純「まあな。それがウチのスタイルだから。」

うるか「なるほどねー。」

そういつたやりとりをしていた3人であった。

その後、

廊下に出て、自販機で飲み物を買っていた武元は、体育館に灯りが付いていることに気づいた。

うるか「誰かいるのかな？」

そう思った武元は、体育館に行くと、中には、シャドーピッチングをしていた純がいた。

うるか（純!? まだ練習してたんだ! しかもあんなに汗かいて。ヤバイ、カツコイイ…

／／／

そう思った武元だが、

うるか（そうだ。純のスポドリ買っておこ。）

そう思つて、近くの自販機でスポドリを買つたのであつた。

純「ハア、ハア、ふう。」

すると、

うるか「お疲れ。」

純「ん？おお、武元か。」

うるか「うん。はい、これスポドリ。」

純「おお、サンキュー！マジ助かるわ！」

そう言つて、純はスポドリを口にした。

純「ところで、武元はなんでココに？」

うるか「うん。自販機で飲み物を買に行つてたら、体育館に灯りが付いてたから誰かいるのかなーって思つて、見に来たら純が練習してるのを見たの。」

純「そっか・・・。」

うるか「ところで、それなんの練習？そのタオルを使つてたけど。」

純「ああ。シャドーピッチング。打球フォームを固めたり、怪我しにくいフォームを作つたり、コントロールを安定させたり、投げるための筋肉を動かしたり、球速をアップさせるための練習。」

うるか「へえ。」

純「まあ、俺みたいなピッチャーにとっては大切な練習だよ。」

うるか「そうなんだ。」

純「武元も、遅くまで練習してんじやん。」

うるか「うえっ、見てたの？」

純「まあな。スゲーと思うぞ。それに、何か水泳してるときのお前って、ホントカッコイイな。」

うるか「えへへ、あんがと。(キヤーツ、純に褒められたー／＼／＼)」
そして、

純「さて、戻るか。途中まで一緒に行こ。」

うるか「うん。行こ!!」

純「後、これありがと。」

うるか「うん。どういたしまして。」

そう言つて、2人は別れるまで廊下で喋っていたのであった。

ちなみに成幸は、外に出て迷子になった緒方を見つけ、事故でキスをしてしまったのは内緒である。

13話

翌日の教室

純「おい成。お前昨日どこに行ってたんだよ？」

成幸「ああ、ちよつとな・・・。」

純「ふーん。まあ、武元も古橋も心配してたからな。後で何か言いなよ。」
成幸「ああ、そうするよ。」

そして、昨日と同じ席順で合宿授業を始めたのであった。

この日の授業内容は、純の得意な日本史。

うるか「ねえ、純。」

純「ん？どした、武元。」

うるか「これって、どういう意味？」

純「ああ、これ。これはね、こういう意味だよ。」

うるか「おお、なるほど！あんがとね。」

純「どうも。」

純とうるかがそう話していた。

純（成と緒方、何か変だなー。そういや、緒方も昨日見かけなかったな。何かあったのか・・・。）

そう思っていた純であった。

そして、本日の全ての授業が終わり、

小林「ねえ、純ちゃん。成ちゃん知らない？」

純「いや、見てねーな。」

小林「純ちゃんも。どこに行っただらう？」

純「あいつ、昨日もいなかったな。」

小林「そうだよね。」

純「大森が知ってるんじゃない？」

小林「いや、大森にも聞いたけど、知らないって。」

純「そっか・・・。そういや、あいつ緒方と古橋の間に座ってんじゃない。何か、今日緒方とどこか気まずそーな感じだったなー。」

小林「そうなの？」

純「ああ、成曰く、昨日から緒方、様子が変だったらしい。」

小林「へえ。」

純「まあ、そんな時はあんまし気にしなかったけど。」

小林「そつか……。」

純「それよか、風呂入ろーぜ。成、先に入ってたりにして。」

小林「そうだね。大森も呼んどくよ。」

純「ああ。」

そう言つて、純と小林と大森は風呂に入ったのであった。

その頃、成幸と緒方は、昨日の無断外出の罰で女子風呂の掃除をしていたのだが、緒方の普通だったらあり得ないミスで覗きのレッテルを貼られ、その後の人生が終わりかけたのであった。

その後、寝る前の予習で、

小林「成ちゃん、昨日今日どこに行つてたのさー。」

純「そーだよ。お前風呂にもいなかっただじゃねーか。」

成幸「いや、それはその……。」

大森「なーなー、女子風呂覗きに行かぬ？」

成幸「カンベンしてください。」

大森「なんでだよ、唯我!？」

大森「あつ、安達と小林、お前らは行くよな？安達、小林？」

純「いや、マジでお前、それやめろ。」

小林「そうだよ。純ちゃんの言うとおりだよ。」

大森「なんでだよ!？」

とまあ、そんなこんなで、無事に学習強化合宿も終えたのであった。

その帰り道、

うるか「ねえ、純。」

純「ん？何、武元。」

うるか「合宿だけど、どーだった？」

純「どうって言われても……。まあ、野球してた方がマシって言うか。ウチの合宿もメツチャキツイけど。」

うるか「ああ、それね。分かる！あたし、メツチャ泳ぎたかったし！」

純「はは。お前らしいな。俺は早く野球がやりてーよ。今度合宿だし」
うるか「あつ、そーだね。」

純「夏予選前の合宿。あれは冬の合宿に匹敵するほどハードだからなー。」
うるか「そーなんだ。」

純「まあな。まつ、頑張りますわ。」

うるか「うん!!頑張って!!」

純「おう!そんじゃ、またな!!」

うるか「うん、また!!」

そう言つて、2人は別れたのであつた。武元は、母親に純についてからかわれたのは内緒であるが。

14話

学習強化合宿から暫くが経ち、

成幸「もうすぐ6月か。」

古橋「そろそろ衣替えだねっ。」

成幸「そういやそうだな。」

純「俺はもうすぐ夏予選前の強化合宿だよ。」

成幸「そういやお前んとこの野球部、もうすぐ合宿の時期か。」

純「ああ、そうだよ。合宿最終日は練習試合だし。」

成幸「そうか。頑張れよ。」

純「おう！」

うるか「夏も近いしみんなで海とか泳ぎに行こーよ!!遠泳してー!!」

そう言った武元は、緒方にくっついた。

成幸「受験生にそんなヒマあるか!!」

その時、

ピンポンパンポン

桐須『3—B唯我成幸君。至急生徒指導室桐須のところまで来なさい。』

純「成、桐須先生に呼ばれてんぞ。何やったの？」

成幸「いや、俺は知らんけど。」

純「ふーん。」

成幸「ところで、古橋と緒方は、桐須先生の事知ってる？」

古橋「う、うん。私とりっちゃんの初代『教育係』だったの。」

成幸「初代『教育係』？」

純「へえ、そうだったんだ。」

緒方「はい。その桐須先生から呼び出しなんて……、恐らく私達に関することだと
思います。」

成幸「ど……、どんな人なんだ？」

すると、古橋と緒方は顔を合わせ、

古橋「とても……、冷たい人です。」

と、古橋はそう答えた。

成幸「そ、そうか。」

純「あれじゃね。古橋と緒方、それと武元の現状の成績の確認で呼んだんじゃね？」

成幸「ああ。そうかもな。」

純「ん？じゃあ何で、俺は呼ばれてねーんだ？一応『サポート役』なのに？」

成幸「それは分かんねー。じゃあ俺、生徒指導室に行ってくるよ。」

純「おう。」

そう言つて、成幸は生徒指導室に行つた。

純「しかし、桐須先生か・・・。」

うるか「ん？どした純？」

純「いや、古橋と緒方は、桐須先生の事、冷たい人間だつて言つたら。」

うるか「うん、そうだね。あたしは全く関わりないけど。」

純「まあ俺もなんだけど。しかし、ウチの監督、あの人に毎度アタックしてんだよな。」

うるか「え、そーなの！」

古橋「そうだったんだ！」

緒方「知らなかったです！」

3人は、純の発言に驚いていた。

純「ああ。つつても、そのたびに撃沈してるがな。」

うるか「そーなんだ。」

純「まあ、俺もちつと気になるし、生徒指導室前に行こうかな。」

すると、

うるか「あ、あたしも行く！」

古橋「私も気になるし、唯我君が心配だし。」

緒方「私も気になります。」

3人がそう言ったので、純達は生徒指導室に行ったのであった。

生徒指導室前

純「何言つてつか、全然聞こえねー。」

古橋「でも今、『教育係』の資格がどうつて聞こえたよ。」

純「マジで!？」

うるか「ちよつと純!あたしにも聞かせてよ!」

純「あつ、ああ。てか、普通に考えたら聞いちゃいけねー気がすんだけど。」

そう言つて、純はドアから離れた。その時、

ばんっ

純「おい、古橋！」

古橋が生徒指導室の扉を開けたのであった。

古橋「おつ、お久しぶりです、桐須先生……。」

成幸「古橋!？」

桐須「面談中よ。用があるなら手短に済ませて。」

古橋「唯我君は私達にいつも真剣に向き合ってくれます……!わ……つ、私は、唯我君に『教育係』続けて欲しいです……!」

成幸（ふ、古橋……!）
しかし、

古橋「そそそ、それに図書室での件は……、私がおなか触ってって頼んだからあんなことになっただけで!不純異性交遊だなんて誤解ですつ!!」

成幸「かつはあ!」

純（古橋、それ逆に成の立場を危うくするだけだぞ……。）

古橋「そつ、それとも、看病中に下着姿見られちゃった件ですか!?あれも悪いのは私
で……つ」

成幸「ふふ古橋、ストップストップ!!」

桐須「古橋さん、もう結構です。退室を。」

パタン

純「古橋。お前最初は成をフォローしたのに、途中で成の立場を危うくしたぞ？」

古橋「はわわわ・・・。」

すると、今度は緒方が、

ガチャ

緒方「失礼します。」

成幸「どわあ!?!今度は緒方!?!」

緒方「桐須先生・・・、確かに私の成績は万全とは言えませんが、それは自身の努力の問題です!唯我さんにはなんの落ち度もありません!尋問のようなマネはすぐやめて下さい!」

成幸（お、緒方・・・!）

すると、

桐須「ならば、先日の不純異性交遊、どう説明するの?」

すると緒方、

緒方「はっ、女子風呂に唯我さんが潜んでいた件でしたら誤解です!!悪いのは私です
ので!」

成幸「ぶぶファ!」

純（緒方、それももう不純異性交遊してると言ってるもんだぞ……。）

桐須「退室を。」

パタン

純「緒方。古橋同様、最初は成をフォローしてたのに……。」

緒方「フンス！」

純「つたく、しゃーねーなあ。」

うるか「純？」

ガチャ

純「失礼します。」

成幸「純!？」

純「すいません桐須先生。成、いや唯我君の件ですが、俺も詳しいことは分かりません。けど、彼の『サポート役』として言わせていただく、彼はいつも、あいつら3人にそれぞれ真剣に勉強に付き合ってくれています。先生からしたら、気になる点が多々あるかもしれないんですけど、緒方と古橋と俺に免じて大目に見てやって下さい。そんなけつす。では失礼します。」

パタン

純「ふーっ。」

うるか「純！突然生徒指導室に入ったからビックリしたよ!!」
純「はは、わりいわりい。」

うるか「けど、カッコ良かったよ・・・／＼／＼」

純「え。いや、別に俺は・・・。でも、ありがと。」

うるか（あ、照れた。可愛い／＼／＼）

すると、

ガチャ

純・う・古・緒「」「」「あつ。」「」

成幸「なにしてんのお前ら・・・?」

古橋「わーっ、ごめんね唯我君！改めて考えるとすごい変なこと口走っちゃった気が・・・。」

緒方「大丈夫でしたか、唯我さん。」

成幸「ああ、まあ何とか。純、さつきはありがとな。」

純「気にすんなって。俺とお前の仲だろ。」

成幸「そうか・・・。うっし！今日も気合入れて勉強勉強！」

うるか「うへえーっ。」

純「武元、気持ちは分かるが、これ乗り切れば部活なんだから。」

そういうやり取りをしながら、生徒指導室を後にしたのであった。その様子を見ていた桐須先生が、先程成幸との会話を思い出し、頬が緩んでしまったのは内緒である。

15話

純「ぬおおおお。武元あと何分だ!?」

うるか「あ、あと40分!!大丈夫、純!?!」

純「おうつ、全然ユウ!ゼツテー追いついてやるからな!」

うるか(何故こんな事態になっているかというところ、話は数日前に遡る……)

数日前

古橋「あれつ、唯我君……。お昼ご飯それだけ?」

うるか「夏服リズりんー♡」

緒方「あつくるしい。」

成幸「ん?ああ。今日から4日間、妹の水希が部活で遠征しててさ。弁当無しなんだよ。」

古橋「わあ……、大変だね……。それと安達君……。凄いお昼の量だね……。」
純「ん?ああ、俺ら野球部はこれくらいフツーだよ。つか、今合宿中だから、もつ

と食わねーといけねーんだよ。」

古橋「そ、そうなんだ・・・。」

古橋は、純の昼の量に驚いていた。

純「つーか成。マジそれだけって、腹持つの？」

成幸「パンの耳、美味いぞ。」

純「いや、そう言う意味で言ったわけじゃねーから・・・。」

古橋「うん。それだけってのはちよつと・・・。」

成幸「てか純なんかさあ、授業中なんかたまに腹鳴るよな。」

純「お前、聞いてたのかよ！あれは単純に腹減っただけだつっの！」

成幸「昼休みあんだけ食ってるのか!？」

その時武元は、純の会話を聞いて何を思ったのか、ちよつと考え事をしていた。

緒方「あの・・・、武元さん。いいかげん離してください。武元さん？」

緒方を無視して・・・。

翌日・・・

ピピピピ

ペしっ

うるか「・・・う、うー・・・。ううううう。うおつりやーっ!!気合いだ気合いー!!」
そう言つて起きた武元は、キッチンに向かつて弁当を作つた。

その様子を見た母親は、

うるか母「ちよつとうるか。あんたが早起きして自分で弁当作るなんて・・・、一体
どういふ風の吹き回し?いつもギリギリまで寝てるくせに・・・。」

うるか「えっ!?あはは。なんか今朝はすっごい目冴えちやつて!!」

その様子を見ていたうるかの母親は、

うるか母「・・・純君、喜んでくれるといいわね。」

それを聞いた武元は動揺して、

うるか「なっ、なんの話してんのさ、ママっ!!」

うるか母「なんの話だと思つたの?」

うるか「もーっ、気が散るからあっち行つてて!!」

そして学校

うるか（・・・喜んで・・・、くれるかな、純・・・。）

妄想中

純『こんな美味しい弁当を俺のために!?!うるか!これからも一生弁当を作ってくれないか!』

うるか『もーっ、しょうがないなあっ!』

妄想終了

ぼわぼわ

うるか「一生・・・♡」

すると、教室に入ろうとする純を見つけた武元は、

うるか（あつ、純いた!）

うるか「おーい・・・」

しかし、

うるか（はッ!!ちよつと待って、武元うるか!!）

うるか（も．．．もしも『手作り弁当重い』とか思われたら．．．、あたしもう生きていけないツ!!!どどどどどうすれば．．．。）

その時教室の中から、

純「おおーっ!!お前らマジか！食っていいの!？」

成幸「い．．．い．．．い、いいのかよ。おまえらこんな．．．。」

小林「困った時はお互い様っしょ！純ちゃんなんか、特に食べる量多いし。」

大森「次のテストのヤマ、頼んだからな!!」

小林と大森が純と成幸に昼飯を分けて貰っていたのであった。

うるか「げふっ！」

くら．．．っ

うるか（あ．．．、明日こそ．．．ツ!!）

また翌日．．．

うるか（今日の昼、成幸は自習してるから純も一緒にいるはず！友達からの差し入れはないはずだね！）

バンツ

うるか「たのもー!」

しかし、

純「マジか!これ食っていいの!？」

成幸「い・い・い・い・い・い、いいのかよ。お前らこんなっ!!でもなんでここに!？」

緒方「いえ・・・。私達もちょうど今日はここで自習しようと・・・。おかわりもありません。」

純「おっ!じゃあそこに置いて!それも食うから!」

古橋「おなかすいてると思つて、お菓子一杯持つてきたよお!一緒に食べよ!!」

純「俺はアスリートだからお菓子はちよつと・・・、成、食いなよ。」

成幸「おうっ!ありがとな!!」

今日は古橋と緒方が、純と成幸に差し入れを貰っていたのであった。

うるか「ごっつばあ!」

3—D教室

純の分の弁当も食べていた武元は、

川瀬「うるか・・・。なんで2日連続でお弁当2つ食べてるわけ・・・?」

うるか「いいの、ほつといて！体作ってんの!!」

海原「まあ、いいけど・・・。」

うるか（野球部の合宿最終日は明後日。その日は練習試合。つまり、明日がラストチャンス!）

はたまた翌日挑戦最終日・・・

武元は購買部にいた。

うるか（今日、純は数量限定の一回り大きいイクラのおにぎり買うために・・・、誰よりも早くこの購買に来るはず!そのタイミンクに偶然を装いつつすかさずお弁当を渡せば万事オツケー!）

すると、

純「あれっ、武元じゃん。何してんだ、こんな所で。」

うるか「わあああ、純!ぐぐぐぐうぜーん!!」

その時、武元は咄嗟に後ろのトレイにカバンを置いてしまったのである。

純「ああ、お前も何か買いに来たの?じゃあ俺、一回りでけーイクラのおにぎり買ってくるから・・・」

うるか「わーっ、待って待って!!」

純「なんだよ、早く行かないきゃ売り切れちゃうじゃん。」

うるか「だ、だから、えつとえつと……」

配送員A「うーす。」

うるか「ほ、ほら、もつといいものがそこに……っ。」

すると武元は、自身のカバンが入ってるトレイが配送員に回収されているのを見たのであつた。

配送員B「これで全部っすねー。」

配送員A「早く帰ってー。」

そして、そのままトラックに積まれたまま発車してしまったのである。

うるか「ギャーッ!! あたしのカバンッ!!」

純「えええ!? あ……、あの配送トラックなら毎日来るはずだから、連絡すりや明日には届けてくれると思うけど……」

うるか「……そっか。たはは、明日じゃもう、なんの意味もないんだけどなア……。まつ、しよーがないか……。あたらしいつちやらしいオチだよな。はは。」

その様子を見ていた純はある決意を固めた。するとそこへ、

小林「純ちゃん。あのイクラのおにぎり買つといたよー。最後のーコだったよ。後

成ちゃんのパンの耳も。」

小林がいいタイミングで来て、チャリ通だったのを思い出した純は、

純「こぼ！お前確かチャリ通だったよな！」

小林「え!?!う、うん・・・？」

そして、現在に至る・・・

うるか「うえええ!?!ちよつと純、授業は!？」

純「昼休みは50分ある!!昼休み中にはゼツテー戻る!あのトラックは、一度配送センターを経由したあと、高速乗って他県に出ちまう。そうなたらお手上げだ。ショートカットして、配送センターに先回るしかない!」

うるか「な、なななんで!?!なんで純がそこまで・・・。」

純「なんか知らねーけど・・・、大事なもん入ってるんだろ、あのカバン!それに・・・」

うるか「それに?」

純「なんでもねーよ!しっかりつかまってるよ!」

うるか「えーっ!!気になるんだけどー!!」

そして、

うるか「大丈夫？キツかったら代わるよ？」

純「大丈夫！俺の体力、知ってるだろ！」

その時、純の背中が汗だくになっていることに気付いた武元。

純「あ……、悪い。汗だくで気持ち悪いよな……。あんまくつつかねー方が……。すると、

うるか「ばか。今手離したら、危ないっしょ。」

そう言つて、純にくつついた武元。

うるか（心臓の音……凄い。純とあたし、同じくらい……。ヤバイつて、こんなにくつついてたらバレちゃう……。もう……。それでもいいかも……。）

すると、

純「見えたぞ！」

うるか「！」

純「あの配送センターだ！」

しかし、

配送員C「えっ、そのトラックならちようど今さつき出てったトコだよ。今頃もう高
速乗ってるんじゃないかなあ。」

純・う（間に合わなかつたー!!）

ずどーん……

純「わ……悪い武元……。間に合わなかつたわ……。」

うるか「ううん。もういいんだ。ありがとね、純。」

うるか（あの背中の汗だけでもう充分。）

純「もういいって、お前……。」

すると、

配送員D「まだ積み込むのありますか。」

配送員E「あ、あつちの全部頼む。」

配送員D「さつきのトラックが置いてった荷物つスね。あれ？なんだこのカバン。」

配送員達のやり取りに振り向いた純と武元は、探していた鞆を見つけ、

純・う「あああああああ、あつたーッ!!」

配送員D「うわっ、なになに君達!？」

何とか解決したのであつた。

純「ホント良かったな、見つかつて。他の車に積み替えるギリギリだったってさ。危なかつたよなー。」

すると、

グー

純「あー、腹減った。そういや今日、メチャクチャ腹減ってたから、1時間目終わった後の休み時間に食っちゃまったんだった。だからイクラのおにぎり買おうとしてたんだった。こぼが買えたって聞いたからそれ食お・・・」

うるか「やだ。」

純「へっ!？」

武元が、純に弁当を渡した。

うるか「おにぎりならさ、また今度にしてよ。ホラこつち・・・、そんなにもたないし、ダメ・・・?」

純「お前まさかこれ・・・。」

うるか「ちちち違うからっ!! たまたま!! テキトーに作ったらたまたま多くなっちゃっただけってゆーか・・・。ム・・・ムリに食べてくれなくてもぜんぜんいいってゆーか・・・!」

それを見た純は、

純「サンキュー、武元。」

そして、

純「うわっ！マジこれうっめえ！」

うるか「ほっほんどっ!?あのねあのねっ、そのドライカレーは、午後の練習でも集中力出せるようにカルダモンたっぷりで……。こつちのオクラと鶏肉の酢醤油炒めは、消化を助けて、疲労回復が出来るの！それからそれから……」

聞いていた周りの人達は、

おじいさん（青春じやのう……。）

子供「ママー、カップル！」

母親（全然テキトーじゃないわね……。）

主婦「いーなあ。」

それぞれ色んな思いで聞いていたのであった。

その後、

16話

学園長室

学園長「最近調子が良さそうじゃないか。唯我君。安達君。先日の小テストでも、人とも半分近くまで点を伸ばしている。目覚ましい進歩じゃないか。次も是非この調子で頼むよ。安達君も引き続き唯我君のサポート役頼んだよ。」

成幸「はい！任せて下さい。」

純「出来る限りサポートします。」

3 | B

先程の学園長のお話を聞いた成幸は、ニヤついていた。

大森「なにニヤついてんだよ、唯我。気持ちワリイぞ。」

成幸「へへっ、まあちよつとな。」

純「まあ、コイツに実際、良いことがあったからな。」

成幸「まあな！」

成幸「やつとあいつらの努力が結果を出し始めたんだ。ニヤつきもするさ。明日の小テストも楽しみだぜ！」

大森「そういうや安達。先日の練習試合の相手、今年の選抜優勝校だったんだって。」

純「ああ。合宿最終日の練習試合ね。よく知ってんな。」

大森「だって、お前去年も一昨年も、合宿が終わった後、試合があつたつて言ってるじゃん。それにほら、これ。」

そう言つた大森は、純達にスマホを見せた。

純「これは、ネットニュースか。」

小林「純ちゃん、投げなかつたんだね。」

純「まあな。でも、バッターとして出たけどな。」

成幸「ええつと、『エース安達純を温存しながら、選抜王者を撃破。特に先発、2年生の河合の好投は一ノ瀬学園投手陣の充実を物語っており、相手の揺さぶりやピンチに動じぬそのマウンド捌きには、次期エースに相応しかった。高校No.1投手である安達を中心とした4人の投手陣と、主将である吉田を軸とした強力打線。昨年後一步で逃した夢

の全国制覇に向けて恐らく死角はないであろう。』か。べた褒めじゃん。」

大森「俺も見に行けば良かったぜ。」

純「はは。まあしかし、そう言う評価を下されても、俺ら次第だよ。優勝するかどうかは。」

大森「でも頑張れよ！」

純「おう！ありがと！」
すると、

小林「あ、話変わるけど、成ちゃんと純ちゃんつてさ、あの3人の誰かと付き合ってるの？」

成幸「ごぶっ！」

純「おい成！危ねーな！」

小林の質問に、成幸は食べていた物を吐き出し、危うく純に当たりかけたのであった。成幸「ななな、何言ってるの小林!?!付き合ってるよー！」

純「突然だなあ、何で？」

小林「あーだつてホラ、しょっちゅう一緒にいるしさー。そろそろそういうカンケーになつてもおかしくないかなつて。」

大森「はっはっはっ。情けねえなー唯我。俺がその立場なら、今頃キスの一つや二

つ・・・」

すると、その言葉を聞いた成幸は、合宿の時を思い出し、顔が赤くなってしまうたのであった。

大森「ゆ、唯我・・・。お、お前・・・、お前まさか・・・。」

成幸「ち、違う!! あれは事故っつか、あくまでノーカンで・・・はッ!!」
すると大森は、

大森「安達! お前は!?! お前はどーなんだ!?!」

純にそんな質問をした。

純「俺はまだ経験ねーよ。」

大森「なら、好きな人は!?!」

すると純は、

純「まあ、気になる人はいるかな・・・。」

そう言った。それを聞いた大森は、

大森「ピイイイイッ!!」

泣きながら教室を出ていったのであった。

廊下

うるか 『e m b a r r a s s』 恥ずかしがらせる。『n o d』 うなずく……。」

記憶補正中……

純 『よく覚えたな。偉いぞ、うるか。』

補正終了

うるか (えへへ。良い点取ったら、また褒めてくれるかなっ。)
するとそこへ、

大森「ピイイイイヤーツ!!」

うるか「ん?」

大森が走っていたので、

うるか「あつ。やつほー、大森っち・・・」

挨拶をしたが、

大森「もうイヤー!!唯我の裏切り者ー!!俺だつて女子とキスしてえよー!!あと安達!!俺も好きな人が欲しいよー!!」

そう言つて、走り去つていったのであつた。それを聞いた武元は、

うるか「え?」

暫く突つ立つたままであつた。

放課後・・・

純「おう、武元。部活途中まで一緒に行かぬ?」

うるか「あつ。今日は部活休みなんだ。だから、帰つて小テスト対策するんだ。」

純「あつ、そうなんだ。それじゃあ、また明日な。」
すると武元は、

うるか「あつ、ちよつと待つて！聞きたいことがあるんだけど。」
そう言つて、純を引き留めた。

純「ん？何？」

うるか「あ、あのさ・・・、純つて、誰か好きな人いんの？」
そう言われた純は、一瞬固まった。

純「・・・えっ!?武元・・・、お前どこでそれを・・・。」
それを聞いた武元は、

うるか「『No』とは、言わないんだね。」

すると武元は、純に近づき、

うるか「やるじゃん！がんばんなよ、純。」
そう言つと、

うるか「そ、それじゃ・・・つ、あたし、先に部活行くね！」
そう言つて、その場を後にしたのであつた。

純「お、おい武元！お前今日は部活休みじゃ・・・。」

その時純は、

純（『頑張る』って……。俺が気になる人は、お前なのに……。何で言えなかったんだ、俺……。！）

そう思っていたのであった。

一方武元は、

うるか（彼女……。いたんだ、純。何泣いてんの、もーっ！中学からうだうだしてた自分が悪いんじゃない！）

そう思い涙を拭いていると、

古橋「あれっ？うるかちゃん。どうしたのこんな所で。今日は帰って小テスト対策してたんじゃない。」

古橋が話しかけてきたので、相談しようと思ったのであった。

古橋「えつとつまり……。うるかちゃんの『友達』にはずつと気になってる男子がいて……。その男子には、どうやら別に恋人っぽい存在がいるらしい……。ってコトかなあ？」

うるか「う……うん。あくまで『友達』の話だかんねっ!」

古橋「あはは。わかつてるよ。その男子ってどんな人なのかな?」

古橋はそう質問した。すると、

うるか「そ……その友達とは、同じ中学からの仲でね、いつもノート見せてくれて、水泳応援してくれて、野球が凄く上手くて、尚且つ一生懸命で、その姿がかっこいい人……♡」

それを聞いた古橋は、

古橋（完全にうるかちゃんと安達君の話だコレー!!）

そう思っていた。すると、

うるか「去年後一步で全国優勝を逃して悔し涙を流したけど、その結果を受け止めて、再び優勝を目指す姿がまたステキで……。」

そう続けたので、

古橋（OKストップうるかちゃん!!……というか、え!?うるかちゃんって安達君のこと……。しかも安達君に彼女!?確かに安達君ってイケメンだけど、どこから驚けばいいのかなあ、わたし!!）

と思っていた古橋。すると古橋は、

古橋「うるかちゃん……のお友達はさ、その男子の『気になる人がいる』って聞い

ただけであつて、『今恋人がいる』つて聞いたわけじゃないんだよね？ だったらさ、好きでいるのを諦める必要なんてないんじゃないかな。そのお友達に伝えておいて！ わたしがめいっばい応援してるからつて！」

そう武元に言った。すると武元は、

うるか「ふ・・・文乃つちー!!! 愛してるーっ!!!」

そう言つて、古橋に抱きついたのであつた。

古橋「わあ!?! ちよちよちよっ・・・!!」

うるか「文乃つちー! ヤッパ持つべき友は文乃つちだよ!! 好きー!!」
すると、

緒方「何をしているのですかあなた達は・・・。」

古橋「あつ、りっちゃん。」

うるか「じゃ、あたし帰るね。文乃つち、話聞いてくれてありがとう!」
すると、

女子A「ねーねー聞いた? 唯我と安達の話。」

男子A「ああ、さつき大森が走りながら叫んでたな。」

女子A「唯我は誰かとキスをして、安達は誰か好きな人がいるんだっけ?」

男子B「いやいや、唯我はもう5年くらい付き合ってる彼女がいるんだろ? 安達も同

じく5年間思い続けてる人がいるって。」

女子B「わたしは唯我は同棲してると聞いてたよ。」

男子C「安達の場合、5年前に引越して別れた人を思い続けてるって。」

男子D「唯我に至っては、子供もいるって聞いたぞ。」

成幸と純のウワサを話していた生徒であったが、話が大きくなっていくのであった。

古橋（ウワサの尾ビレ背ビレが・・・、すごいことになってるーっ!!!）

武元が気になった古橋は、

古橋「はっ。う・・・うるかちゃん・・・。へ、変な噂する人いるよね、ホント・・・。」

そう武元に言った。

うるか「え？何が？」

そう言つて古橋に振り向いたが、

うるか「ゼーンゼンキイテナカツタヤサツカエツテベンキョーベンキョー」

明らかに動揺していたのであった。

古橋（うるかちゃん!!）

うるか「ベンキョーベンキョーベンキョー」

古橋（だ・・・、大丈夫かなあ・・・。）

その時、

バサバサバサツ

古橋「りっちゃん？」

緒方が教材やノートを落としたのである。

古橋「大丈夫!?!どうかした!?!」

すると緒方は、

緒方「・・・いえ。何も問題ありません。」

古橋「そ、そう・・・。珍しいね、りっちゃんが・・・」

しかし、

男子E「唯我の彼女ってどんなコかなー。」

男子F「あいつと一緒で、ガリ勉強じゃね？」

それを聞いた緒方は、

バサバサツ

また落としたのである。その様子を見た古橋は、

古橋（まさか・・・ね・・・。）

そう思っていたのであった。

しかし翌日・・・

古橋と武元の小テスト結果を見た成幸と純は、

成幸「よく頑張ったな古橋・・・。着実に点伸びてるじゃないか・・・。」

古橋「ありがとう・・・。」

成幸「・・・で、武元はなんで点数が前に逆戻りしてんの!?昨日まで調子よかったのにどうしたんだ!?!」

純「まるでジェットコースターみてーな落ち方してんな・・・。」

うるか「わーんごめーん!!今まで覚えてた英単語すっかり抜けちゃって・・・!!」

成幸「なんでだよ!?!」

古橋（あー・・・、こうなっちゃったかあ・・・。昨日の噂で相当動揺しちゃったんだろうなあ・・・、うるかちゃん。）

すると、

緒方「お疲れ様です。」

緒方がやって来て、小テストの結果を見せたが、2点になっていた。

成幸「緒方アア!!お前まで一体どうなってんだあ!!?!」

純「緒方もかよ……。」

緒方「違います！『何故か』集中できなかっただけで……、集中さえすれば解けました!!」

成幸「何その言い訳!!?」

純「最早言い訳のレベルじゃねーよ……。」

その様子を見た古橋は、1つの答えに辿り着いた。

古橋（なんてこった……。なんてこつただよ……。まさかりつちやんつて、唯我君のこと……。わたし、どうしたらいいのーっ!?)

するとそこへ、

ポム

学園長が成幸の肩を叩いて、

学園長「まあ、学園長室で話を聞こうか、唯我君……。安達君のはともかく、君の噂についても色々聞きたいところだからね……。」

成幸「ヒイイ学園長!!え!?噂ってなんの事スか!?!」

そう言われて、成幸は学園長に連れ去られたのであった。

純「なあ。何だよ、俺と成の噂って?」

古橋「それは……。ちよつと……。」

このやり取りで胃が痛くなった古橋であった・・・。

17話

古橋「りつちちゃんとうるかちちゃんの成績が落ちた理由？なんでそれをわたしに……？」
成幸「いやだつて……、古橋つてホラ、心の機微とか聡そうだしさ……。なんか最近ギクシヤクしてる気がして……、俺なんかしちまったのかなあ……。」

その問いに古橋は、

古橋（困ったなあ……。『りつちちゃんは唯我君のことが、うるかちちゃんは安達君のことが好きだからだよ』なんて言えないし。でもどっちも応援したいし……。）

そう思っていたのだが、すぐに顔を上げ、

古橋「唯我君。これはねきつと……、『女心』という教科の練習問題なんだよ！」

成幸「練習問題!?!」

古橋「だから自分で解かないと！」

成幸「ふ……、古橋師匠!!」

そんな話をしていたのであった。

女子水泳部部室

うるか「結局純・・・、好きな人いるんだかないんだか・・・。」

海原「あーなんか最近ウワサになってたねー。それで部活にも身が入ってなかったんだー。」

川瀬「聞けばいいだろ、本人に。」

うるか「ムリだよ、ムリムリ！キスのこと聞くだけでも死にそーだったんだからっ!!」

海原「まーまーうるか。安達君に好きな人がいようといまいと・・・。」

川瀬「力ずくでアンタに夢中にさせればいいだけのことー!」

うるか「えっ!?!」

海・川「私達にまかせな、うるか!」

うるか（あ、あれエ!?!なんかデジャヴ・・・!?!）

放課後

女子A「じゃーねー!」

女子B「明日ねー!」

女子C「後で連絡するねー!」

女子A・B 「はいはい！」

純（今日、夏の予選の組み合わせが決まった……。それまでに、今やれることを精一杯やっつけていこう……。）

その時、

うるか 「じ、純！」

純 「ん？」

うるか 「今日、練習休み？なら、い……つ、一緒……、帰らない……？」

武元が純に話しかけたのである。胸元第2ボタンを開け、スカート3センチ詰めの状態……。

うるか（つて、言われた通りにはしてみたけど、こんなん恥ずかしすぎるよーッ!!）

純 「おう、良いぜ！帰ろ！」

うるか（でも……、どうしても純にドキドキしてもらいたいもん……。絶対、距離縮めてやるかんね……!）

そして、2人は一緒に帰ることになった。

帰りの道中、

純「なあ、武元。」

うるか「えっ！な、何！」

純「いや、最近調子はどう？」

うるか「う、うん。ボチボチかな。」

純「そっか・・・。」

うるか「そういう純は？」

純「ああ、俺の方は、まあまあかな。最近新たな取り組みしてるし。」

うるか「えっ、何の？」

純「球速アップの取り組み。」

うるか「へえ。あつ、じゃあ、この前の学習強化合宿でやってたのって・・・。」

純「ああ、そうだよ。そのためのフォーム固め。」

うるか「へえ。具体的にどんなの？」

純「えつと・・・、例えば、普通のピッチャーだったら、プレート使う時って、プレートの横に足を置いてるんだよ。こんな風に。」

そう言っつて、純は手でそれを見せた。

うるか「うん。」

純「でも俺は、このプレートをこういう風に引っかけたんだよ。そうすれば、プレートを強く蹴れるから、前に力がスムーズに行つて球速がアップすんだよ。」

うるか「そういうや純つて、入学当初は135キロでその頃から速かつたけど、去年の夏頃、148キロまで一気に上がったよね。それつて・・・。」

純「ああ。それを実践したからだよ。そこから投げやすくなつたよ。」

うるか「そうだつたんだ！」

純「それはもう去年からやつてるからいいんだけど、メインは、今までの俺は、投げ終わつた後、この前足が三塁の方向にステップバックしてただけど、これをそうせずに、出来るだけ安定させたいんだ。これが出来れば、コントロールも良くなるし、それと同時に利き腕の遠心力が掛かりやすくなるから、球速がアップしやすくなるんだよ。」

うるか「(やつぱり純は、野球のことになると饒舌だな・・・)。へえ！もしそれがも
のになつたら、日本一に近くなるね！頑張つて！」

純「ああ！」

そうして、2人は野球や水泳だけでなく、それ以外の面白かつたことを喋つたりしたのであつた。すると、

純「そーいや、この近くに学業成就の御利益の高い神社があるんだよ。寄つてかね？」

うるか「うん、いいよ。行こう！」
そうして、2人はその神社に寄ったのである。

楓月神社

純「着いた。此処だよ。」

うるか「へえ。」

その時武元は、ある言葉に注目していた。

うるか（恋愛成就!!これはますますお参りしないと!!）

ガランガラン

パンパン

純（成のVIP推薦とれますように!!あいつら全員志望大学に合格出来ますように!!
甲子園出場して、日本一に・・・ってこれ学業じゃねーや。じゃあ、好きな人と一緒に
いれますように!!）

すると、

うるか「むーっ、むーっ、むーっ、むーっ。」

隣で武元が真剣にお参りしていたので、

純（ずいぶん熱心だな・・・。）

と黙っていた。その時、

ザーツ

うるか「きゅ・・・、急に何コレーっ!？」

純「うわっ!?!マジかよ!？」

突然雨が降ったのである。

純「こりや・・・、しばらく止まねーな・・・。」

うるか「最近雨多いよね。」

純「しゃーねーよ。6月だから。」

うるか「6月めー。ふわぁ。」

純「そういうや必死にお参りしてたけど、志望大学合格でも祈ってたのか?」

うるか「あー・・・。そっち忘れてた・・・。恋愛成就。好きな人にドキドキしても
らえますようにって、それしか考えてなかったや・・・。」

そう言つて、武元は横になったのであった。

純「え・・・、寝たのか・・・?」

純（つーか、無防備すぎだろ!てゆうかこいつ・・・、今なんつった!?!好きな人って・・・、

そのままの意味だよな。誰だ!?)

一方、

うるか（海っち、川っち……。こ……。これでもいいんだよね!）

寝たふりをしている武元は、海原と川瀬で決めた作戦を実行していたのであった。

回想

海原「おう！名付けて……。『二人つきりになったら無防備寝たふり大作戦』!!」

川瀬「これで落ちない男子はいないって！」

回想終了

うるか（ううう。恥ずかしくて目え開けられないよう……。ででも頑張る……。!）
すると、

うるか（あ……。つ、頭……。気持ちいい。時々純に頭撫でもらってるから、も
しかして……。）

そう思っていたのだが、

ペロ……。ッ

うるか（……つてええええええ!!いい、今ペロツつて!ちよ……、ちよつと純つてば……
い……ツいくらなんでも大胆すぎない!!）

うるか「ダ、ダメエエエ!!これ以上は心の準備が……ツ。」

しかし、

猫「なごご。」

これまでのことは全て猫がやっていたのであった。

帰り

うるか（……はあ。自信なくなっちゃうな。あたしつて魅力ないんかなあ。）

しかし純は、武元のある一点を気にしていたのであった。

うるか「ん?どしたん純?」

すると、純は目を逸らし、

純「いや、どうしたつーかお前、胸元が……。」

そう言った。その様子を見た武元は、純に近づき、

ドクンドクンドクン

うるか「純……、ドキドキしてる。」

純「し……、しゃーねーだろ！そんなつ、無防備なカツコで近づかれたりしたらそりや……。……わりい。つか……。だからさ……。お前もそういうカツコ……。好きな奴の前以外ではやめろよ。危ねーだろ。」

うるか（好きな奴の前以外では。）

うるか「……。うん。そうするね。」

そう言つて、武元は純に綺麗な笑顔を浮かべたのであつた。

後日……

海・川「おおっ!!」

海原「手応えアリ!？」

川瀬「じゃあもう3センチスカート詰めるか。」

うるか「もうヤダつてば!!」

一方、

純「よう、成。古橋。」

成幸「ああ、純か。」

古橋「安達君。」

純「武元の今度の小テスト、どうだったの？」

成幸「これなんだけど・・・。」

純「どれ・・・って、いきなり上がったな！」

成幸「そうなんだよ。どうなってるんだマジで・・・。」

純「この前あいつと一緒に帰ってたからだな。」

成幸「先日武元と一緒に帰ってたんだ。」

純「ああ。一緒に神社にお参りに行ったりな。」

古橋「そーなんだー。」

古橋（・・・うるかちゃん、カワイイなあ・・・。）

と何かを察した古橋なのであった。

18話

図書室

バーンツ

うるか「おおお。」

古橋「唯我君、スマホ買ったんだ。」

純「やつとお前もスマホデビューか。」

成幸「本体は母さんが福引で当ててきてな。家族共用で持つことになったんだよ。」

純「へえ。おばさんスゲーじゃん。」

成幸「憧れの辞書アプリとか、時間管理アプリ入れて・・・、これで効率的に勉強出来るぞ。」

そうやって、成幸はスマホの取説を読んだのだが、

成幸「何コレムリムリ、全然使える気しないんですけど。」

そうやって頭を抱え込んでしまったのであった。

うるか（あれ・・・。成幸つてもしかして・・・。）

古橋（デジタルガジェット系全然ダメな人!?!）

純「そーいやお前、こういう系の昔からてんでダメだったな・・・。」

成幸「ううううう。」

純「つたく、ちよい貸せ。よく見ろよ、成。検索を置いてーんだつたら、ここをタップする。で、検索したい言葉をここに入力する。例えば、『効率的』『勉強法』と。ホレ。」

成幸「スゲエな純。」

純「いや、コレ基本だからな。」

うるか「うん。純の言う通りだよ。」

そして、純はスクロールしていると、

純「へーっ、そうなんだ！お前ら、コレ見て。」

そうやって、純はスマホをみんなに見せた。

純「風呂での勉強は・・・、副交感神経が刺激されて、効率アップだよ！」

そう言われて、それぞれ風呂で勉強する姿を想像した。

純「つて、さすがに風呂はねーか！」

うるか「そ、そーだよ！あははは！」

古橋「そ、そうだよね！さすがに・・・。」

成幸「やっぱないよな。フロでなんてさすがに！」

その夜、

安達家風呂

純「まさかあいつら、本当に風呂で勉強してんじゃねーだろーな。一応聞いてみつか。」

そうやって純は、防水ケースに入れてあるスマホをいじったのであった。

純「まずは、成にかけてみつか。」

プツプツプツ、プルルル

成幸『お、おお！純か！』

純「おう成。お前、風呂で勉強してる？」

成幸『あ．．．ああ。昼間お前が調べてくれたやつ、実践してるトコ。』

純「へえ。で、どーなの？」

成幸『これ……、メツチャいいぞ！』

純「そんなに？」

成幸『ああ。葉月と和樹に邪魔されることなく集中できる完全なプライベート空間……。しかも、男心をくすぐる秘密基地感がマジ半端ない！』

純「はは。それは良かったな。そんなじゃ、俺切るわ。ああ後、他のみんなにも確認してみたらどうだ？ 案外実践してみたりして。俺、武元にかけてみるよ。」

成幸『確かに気になる。まあ、気が向いたらな。じゃあな。』

純「おう！ あつ、後スマホを風呂で使う際、防水ケースに入れねーと壊れつからな。もしそれが無かったらジップロックでもいいし。もしそのままやって、湯船に落つことすと感電すつから気をつけなよ。」

成幸『ああ、サンキュー。じゃあな。』

そうやって、電話を切ったのであった。

純「さて、早速武元にかけてみるか。」

そして、純は武元に電話してみた。

プツプツプツ、プルルル

うるか『もっしもーし！ あれー純。どしたんー？』

純「おう武元。聞きてーことあんだけど……。」

うるか『えーっ、なにになに？よく聞こえない！』
パシヤチャポ

純「武元・・・、お前もまさか風呂で勉強中・・・なのか？」

うるか『えーっ、そんなわけないじゃん！フツーにおフロで体洗ってるトコだけど!?!』

純「そっか・・・。」

うるか『あーっ。もしかして今ドキっとしたー?』

純「いや、別にしてねーけど。」

純（実はちよつとだけ・・・。）

純「じゃあ切るわ。」

すると、

うるか『あ、もしかして、純も今おフロ・・・?』

純「ああ。俺もお前と一緒に、フツーに体洗ってたんだけど、昼間調べたのを実践してんのかなーって、気になって電話しただけ。」

うるか『ふーん・・・。』

純「今んとこ成がやってたみたいなんだけど・・・って、武元?」

その時武元は、

うるか（純もおフロ・・・、あたしもおフロ・・・、どうしよう・・・。これっても

はや・・・、純に体洗われてると言っても過言じゃないかも!! うーっ、目いっぱい平気なフリしてたけど・・・、純から電話きただけで内心飛び上がるレベルだったのに!! これが初めてではないとは言え、こんなの心臓飛び出しちゃうってばーっ!! だ・・・だめだ。手ふるえてスマホ持ってらんない・・・。とりあえずスピーカーフォンにして・・・。)

そう思った武元は、スピーカーフォンを押したつもりでスマホを置いたのだが、

ザワツ

純「!」

純(んだ急に!?)

そう思った純はスマホの画面を見ると、

うるか『あ・・・あはは。それにしても成幸、純が調べたことをホントに実践するなんて思わなかったなーっ。』

純「お、おい武元! スマホ!」

うるか『え? あはは、大丈夫だよ。あたしのスマホ、防水機能ついてるからちよつとくらい濡れても。』

純「そういう問題じゃねーよ! お前、ビデオ通話になってんぞ!」

うるか『え? よく聞こえない。ビデオ通話が何だって・・・。』

そう言つて、武元はスマホ画面を見た。すると、純の裸姿が画面に映っており、自身

の様子を見た武元は、

うるか『キヤーツ、ウソ!?ビデオ通話のボタンと間違えてたーっ!!』

純「だからそう言ってるだろーが!!」

うるか『てか何見せてんの。純のばかーっ!!』

純「わ、わりい!!と、とにかく、切るな!!じゃあな!!」

そう言っつて、純はスマホを切ったのであった。

純（ヤベえ。俺、今日寝れるかな・・・。）

翌日

机に突っ伏してる純と顔を覆っている武元を見た成幸らは、

緒方「安達さん、どうしたのですか。」

成幸「なんか昨日の夜、訳あって寝れなかつたらしい。」

古橋「そうなんだ。じゃあ、うるかちゃんは?」

成幸「さあ・・・。」

うるか（き、昨日のが・・・、目に焼き付いて、離れないよう・・・。）
とまあ、色々なことがあったのであった。

19話

室内プール

うるか「ええつ。タイム落ちてる・・・?」

滝沢「まあ・・・、気にする程でもないが、夏の大会も近づいてるし、調整していかんとな。最近勉強も頑張っているようだし、仕方のない部分もあると思うが、あくまで無理のない範囲で・・・」

うるか「気合いでソツコー取り戻しますッ!!」

滝沢「聞いてるか、武元!!」

放課後図書室

うるか「ほいつ、できた! どうか、成幸!!」

そう言つて、武元は成幸にノートを見せた。すると、

成幸「おお、前間違えたトコ、しっかり復習できてるな。」

うるか「よっしやあ!」

純「じゃあ、途中まで一緒に行こーぜ。」

うるか「うん! 行こう!」

成幸「そつか。2人とも、夏の大会までもうちよつとだもんな。優勝目指して頑張れ

よ! 応援してるからな!」

純「おう!」

うるか「任せといて!」

純「じゃ行くか。」

うるか「うん!!」

そう言つて、2人は途中まで一緒に部活に行つたのであつた。

道中、

純「武元、最近頑張ってるな。」

うるか「うん、大会近いからね。」

純「そつか。まあ、俺もだけど。今年はマジで日本一狙ってるし。」

うるか「うん！お互い、頑張ろうね！」

純「おう！じゃあ、またな！」

そう言つて、純は武元の肩を叩いたのであった。それに対し武元は、うるか「う、うん!!また!!」いつもの満面の笑みで返したのであった。

室内プール

うるか「どりやあ！どりやあ！どりやあ！どりやあ！どりやあ！どりやあ！」

後輩A「た・・・武元先輩、スゴイ気合い・・・。」

しかし、

川瀬「フム。」

その様子を見ていた川瀬は、少し思案顔をしていたのであった。

シャワー室

川瀬「なあ、うるか。」

うるか「ん？なにー。」

川瀬「タイム戻したいからって、気合い入ってるのは分かるけど、あんま飛ばしすぎんなよ。」

海原「そうそう。ペース管理苦手なのが、あんたの唯一の欠点なんだから。」

うるか「ん、分かってる！でもあたし・・・今すっごい燃えてるんだ！『勉強頑張ったからタイム落ちました』なんて悔しいじゃん。それに・・・、そんなの純が知ったらきつと・・・、心配・・・、しちやうし・・・。」

それを聞いた海原と川瀬は、ニヤニヤしながら武元を見つめた。
うるか「はっ。」

川瀬「乙女めー！」

海原「ういやつめー♡」

うるか「ひゃあつ、へ．．．変なトコ触らないでようっ!!」

武元家

ばふっ

うるか「うはー。寝れる．．．もうこのまま何年でも寝れるわー．．．」

回想

純『今年はマジで日本一狙ってるし。』

回想終了

うるか「おっしやー！もうひとふんばり！」

それから5日後、

滝沢「・・・恐れ入ったな・・・。遅れを取り戻すどころか、これ・・・、自己ベス
ト狙えるんじゃないか・・・？」

後輩「！！おっ！武元先輩スゴイですー！！！！」

うるか「ふっふっふ。うるかちゃんの本気出せばこんなものだよ！」
そしてその夜、遅くまで勉強をしたのであった。

その翌日、

うるか（ううー。昨日はあのまま寝た方が良かったかな・・・。）

純「武元、途中まで部活・・・」

その時、武元が廊下でうずくまってしまい、

純「お、おい!! 武元!!!」

それに気付いた純は、慌てて保健室に運んだのであった。

保健室

純（くそ……、保健の先生……、早く戻ってきてくれよ……。）

純「すまんな武元。俺がもつと早く気付いていれば。勉強も部活も倒れるまでやるか普通……? スゲー奴だよ、お前は。メツチャしんどかった筈なのに、いつも元気に笑ってくれて、そういうの全然見せねーもんな。」

回想

うるか『恋愛成就。好きな人にドキドキしてもらえますように……。』

回想終了

純「お前に好かれてる奴は、幸せ者だな。」

すると、

うるか「うう・・・。」

武元がうなったので、

純「だ、大丈夫か武元!! すぐ保健の先生来るから・・・。」

すると、

ぎゅ・・・

武元が純に抱き付いたのである。

純「お・・・おい、武元離せ・・・。」

すると、

うるか「じゅん。」

自分の名前を呼ばれたことに驚き、一瞬固まってしまったのである。

純「・・・。」

しかし、純はすぐに我に返り、武元から離れたのである。

純（武元……）

その時、

バタバタ、ガラッ

海原「うるかつ!!」

川瀬「廊下で倒れたって聞いたけど、大丈夫!?!」

海原と川瀬ら水泳部員が、武元が倒れたと聞いて駆けつけたのである。

川瀬「安達!?!」

海原「安達君!?!」

純がいることに驚いたのであったが、純は、

純「しーっ。」

人差し指を口に当てて、

純「今寝てるとこだから。」

そう言ったのである。

純「恐らく疲れが溜まっちゃったんだと思う。暫く休めばどうにかなるよ。」

川瀬「そう……。」

海原「ごめんね、安達君。」

純「気にすんなって。事前に気付かなかった俺も悪いし。」

そう言つて、武元を心配そうな顔で見つめていた。

海原「安達君……。」

すると、純はカバンを抱えて、

純「さて、海原。川瀬。後は任せていいか。俺、部活行くから。」

川瀬「ええ。」

海原「分かった。」

純「ああ。」

すると、純は武元の方へ振り返り、

純「心配かけんじゃねーよ……。」

そう言つて、頭と頬を優しく撫でたのである。その様子を見ていた海原と川瀬は、

海・川「……。」

声を掛けることが出来なかつたのである。

純「それじゃ。」

そう言つて、純は保健室を後にしたのであつた。

一方、保健室

海原「思つたより顔色良さそうで良かったよ。」

川瀬「もう、言わんこつちやない・・・。」

海原「まあまあ、好きな人に心配かけまいとくなんて、カワイイ乙女心じゃん！」
すると、

後輩A「ええつ、武元センパイ好きな人が!？」

池田「あー私知ってますよ。てかバレバレですし。先程の野球部のエース、安達先輩ですよね！」

後輩A「キヤーツ、やつぱりイ♡」

しかし、先程の純の態度を見た海原と川瀬は、

川瀬「けど・・・、まさか・・・。」

海原「うん・・・、両思いだったなんてね・・・。」

そんなことを言っていたのであつた。

20話

古橋「うるかちゃんが倒れたって聞いて心配したけど……、すぐに元気になってよかったですね！」

成幸「そうだな。」

緒方「快復祝いにはうどんですね。」
すると、

うるか「おっはよーっす!!」

武元がやって来た。

古橋「うるかちゃんおはよー!!」

うるか「一昨日はゴメンねー。迷惑掛けちゃって!」

古橋「体調はもういいの?」

緒方「うどんです。」

うるか「昨日がつつり休んで、すこぶる元気!」

成幸「そうか。良かったな。」

うるか「つてあり?純は?」

成幸「純なら、今日は朝練があるからって、もうとっくに行つたぞ。」

うるか「そーなんだ……。一昨日のお礼を言おうって思つただけど。」

成幸「そうだな。学校着いたら言いなよ。」

うるか「そーだね！良し！行こう！！」

古橋「おー！！」

そして、学校に到着し、

うるか「純、おっはよー！！」

純「おう、武元。おはよう。成も古橋も緒方も、おはよう。」

成幸「ああ、おはよう。」

古橋「おはよう。」

緒方「おはようございます。」

うるか「朝練お疲れ様！！」

純「ああ。ありがとう。体調は大丈夫？」

うるか「うん、大丈夫！後、一昨日はありがとうね。助けてくれて。」

純「いや、大したことしてねーよ。」

うるか「ううん。嬉しかった。」

純「そっか……。でも、次からは休む時はしっかり休めよ。」

うるか「うん。気をつけるね。」

純「そんじゃ、教室まで一緒に行こうぜ。」

うるか「うん!!」

成幸「ああ。」

古橋「そうだね。」

緒方「はい。」

そうして、それぞれ教室で別れるまで一緒に行ったのであった。

放課後図書室

うるか「ねーねー成幸。『be conscious of』ってさ、『意識する』でいいんだっけ？」

成幸「おつ、そうそう。良く覚えたな武元。」

うるか「よっしゃー!!」

純「スゲーじゃん、武元。」

うるか「へへ、あんがと。」

純「つと、俺部活行くわ。」

成幸「えっ！もう行くのか!？」

純「ああ、夏の予選も近いしな。つつても、軽めの練習だけど。」

成幸「そつか。頑張れよ。」

純「おう！武元も、頑張れよ。」

うるか「うん！頑張ろうね！」

すると、

古橋「あつ。安達君、ちよつと待って。」

古橋が純を呼んだのであつた。

純「何、古橋？」

すると、古橋が小声で、

古橋「今日の練習って、何時に終わる？」

純「ああ、今日の内容だと、多分6時半くらいには終わると思う。」

古橋「そうなんだ。それで今日の帰りなんだけどね・・・」

帰り道

うるか「ご、ごめんね。送ってもらっちゃって・・・。」

純「いいのいいの、気にすんな。」

回想

古橋『安達君。今日の帰り、うるかちゃん病み上がりだし・・・、家まで送っていつてあげて欲しいの!』

回想終了

純（まあ確かに何かあったら心配だしな・・・。）

うるか「この時間でもあつついねー。ずっとプールで生活できたらいいのになー。」

純「はは。もう7月だしな。期末も近いし、頑張んねーと。その後には大会がある

し。」

うるか「そーだねー。」

すると武元が、

うるか「あのさ、朝も言ったけど、廊下でうずくまっちゃった時、助けてくれてありがと。」

純「いや・・・、本当に大したことしてねーよ。保健室連れてっただけだし。」

うるか「ううん。本当に嬉しかったから・・・。だから・・・さ、お礼・・・、させてくれない？」

純「？」

うめえん

うるか「ホラホラ、食べて食べて！ここはうるかちゃんのおごりだから♪」

純「つたく、何だと思ったら、お前とたまによく行ってるラーメン屋じゃねーか。」

うるか「へへえ。」

純「まあ、いつか。ここの塩トンコツ、マジうめーからな。」

うるか「ホントだよねー。海っち川っちとも来るんだよー。」

純「へえ。成にも教えよっかなあ。」

うるか「うん!!それが良いよ!!」

純「はは。そんじゃ、食うか!」

うるか「うん!」

そうして、2人はラーメンを食べたのであった。

帰り道

うるか「あーっ、おなかばんばん!もー食べらんないよー!」

純「そりゃ替え玉4つも頼むからだ。」

うるか「そういう純だって、あたしより多い5つも頼んだじゃん。」

純「あつ、そうだったな。はは。」

うるか「へへ。」

すると、何かに気付いた武元は、

うるか「なんかこのへん・・・、カップル多いね・・・。」

そう純に言ったのであった。

純「ああ、そうだな。」

その時、

うるか「純はさ……、『そういう』相手……いないの？」

武元は純にそう聞くが、

純「いねーよ。日本一になるまで、そんな余裕ねーよ。」

純（本当はお前とそういう関係になりてーんだけど、何か言えねーし。）

その時、はっとした純は後ろを振り返って武元を見つめた。すると、少しはにかんだような顔をしながら武元は、

うるか「……ふーん。そ、そっか。うん。そっか。そっか。」

そう言ったのであった。その様子を見た純は、

純「武元。お前の好きな人、お前だけに夢中になつてくれればいいな。」

そう、武元に言ったのであった。すると、

うるか「うん、そうだね。さっ、帰ろ。純！」

純「ああ。」

そう言ったのであった。その時純は、

純（なんでそういう相手がいねーって、嘘ついちやっただ俺！いや、本当は分かっている。コイツの足は引つ張りたくねーし、何より、もしダメだったら、今の関係にはきつ

ともう二度と戻れねー。だから、このままで良いんだ。このままで……。
そう思っていたのであった。

武元家風呂

うるか（あーあ……。どうしてあの時、『好きな人は純だよ』って、言わなかったんだらう……。ばかだな、あたし……。）

回想

純『日本一になるまで、そんな余裕ねーよ。』

回想終了

うるか（純の足だけはひっぱりたくないもんね．．．。去年の夏の甲子園決勝戦、1
—0で負けて、あんなに泣いた純は初めて見たし。この悔しさを純は知ってるから、尚
更日本一を狙ってるんだし。ううん。それよりも、あたしは結局壊れてしまうのが怖い
んだ。もし『ダメだった』時、今までの関係にはきつともう、二度と戻れない。．．：だ
から、これでいいんだよ。このままで．．．。）
そんな事を思っていた武元であつた。

21話

一ノ瀬学園野球部グラウンド

数日前、夏の予選の開会式があり、現在1回戦が行われている。一ノ瀬学園は第1シードのため、2回戦からのスタートであり、現在その為の調整をしているところである。

マネージャーA「最近差し入れの数がスゴイですね。今日も3ケースいただきました。」

マネージャーB「毎年このくらいの量は届けられるのよ。」

マネージャーC「ウチのOBは、甲子園で戦った人もいるから。」

マネージャーD「でも今年は、去年より多い気がする。」

マネージャーB「そうね……。」

マネージャーB（去年の夏の甲子園で準優勝したから、今年こそはの期待。その分、選手のプレッシャーも相当だと思うわね……。）

その時、マネージャーはそう思いながら練習を見ていた。

練習後のミーティング

彼らの初戦の相手が決まったので、そのミーティングが行われている。

西辺「向こうは先に1勝をあげ、勢いがついてるはずだ。油断だけは絶対に出来ん。どんな相手だろうと全力で挑め。そうすれば、自ずと勝利はついてくる!!」

部員「二はいっ!!」

西辺「初戦の先発だが・・・、小暮、お前に任せる。」

小暮「はい!」

初戦の先発は、純と同学年の小暮に決まった。

西辺「そして安達、お前はセンターだ。初戦と3回戦はお前を温存する予定だ。しかし、いつでも行ける心構えだけはしておけ。」

純「はい!」

そして、翌日の試合に備えたのであった。

翌日、野球場

先攻は一ノ瀬学園。1番がセンター前で塁に出て、2番の送りバントで一死二塁と
なつて、

ウグイス『3番センター安達君。センター安達君』

純の名前が呼ばれた。純は右打席に入って、バットを構えた。

その威圧感に相手ピッチャーは萎縮し、初球の球が甘く入ってしまった。それを逃す
純ではなく、

純「もーらつた。」

そう言つて、バットを振つた。そのまま打球は高々と上がり、バックスクリーンやや
右に叩き込む、先制2ランを打ち、純は一塁を回つて人差し指を掲げたのであつた。

吉田「ナイスバツティング。」

純「ああ、続けよ。」

吉田「ああ。」

そうやって、吉田も右打席に立ち、後もう少しでホームランという打球を放ち、二塁打を放った。

一ノ瀬学園は、初回だけで8点も取り、そのまま勢いに乗って、最終的に21―0の5回コールドで快勝したのであった。

続く3回戦も純は投げず、先発は2年の佐藤。

この日も打線は好調で、17―0の快勝であった。

その数日後、

一ノ瀬学園野球部グラウンド

カキーン、カキーン、カキーン

次の日の4回戦に備えて、ナインは練習をしていた。

記者A「おおー、凄い……。」

記者B 「見てて気持ちがいいですね……。」

記者C 「やはり2試合連続で大量得点しただけのことはある。」

記者D 「相手にとっても脅威でしょうな。」

記者A 「まっ……、今日のお目当ては、安達君だからな。ブルペンに行くか。」

その言葉に、他の記者も続いてブルペンに向かったのであった。

ブルペン

純 「野口、座って。」

野口 「おう！」

その時、ブルペンにいた記者達がカメラを構えた。すると、セットポジションで上から投げ下ろすフォームから、伸びのある真っ直ぐが投げられた。

記者A 「……良いボールだ。」

記者B 「相変わらず惚れ惚れする綺麗な縦回転の真っ直ぐだな。」

記者C 「野手として試合に出ているが、まだ投手としてマウンドに上がっていない。」

しかし、調子は良いようだ。」

記者D「夏場上がるタイプだからなあ……。」

それぞれ色々な事を言っていたのであった。

練習後、

西辺「明日の先発は、河合。お前に任せる。安達は変わらずセンターでスタメンだが、明日は調整のため、1イニング投げて貰うぞ。」

純「はい!!」

西辺「明日も30度を超えるようだから、自主練は程々に。睡眠もしっかり取るように。解散!」

部員「二したあ!!」

翌日、

その日は土曜日で尚且つ夏休みであったため、多くの野球ファンが集まっていた。その中に、

うるか「いやあ、暑いねー。」

古橋「そうだねー。」

成幸「今日も30度超えらしいしな。マジ水分補給はしっかりしないとな。」

うるか「そうだねー。」

緒方「ところで、安達さんはどこでしょうか。」

成幸「ほら、あそこにいるぞ。」

そう言つて、成幸は純のいるところに指を指した。

古橋「ホントだー。」

緒方「半袖姿のユニフォーム、初めて見ました。」

成幸「あの時見たのは春だったからな。」

古橋「今日も安達君、投げないのかな。」

成幸「さあ、どうだろう。あいつから何も聞いてないし。でも、バッターとしては出

てるから。」

うるか「どこかで投げるよ、きつと。」

成幸「そうだな。」

緒方「あつ、試合が始まります。」

審判「これより、試合を始めます。礼!!」

「しゃーっす!!」

そして、試合が始まった。この日の一ノ瀬学園は後攻めであり、初回の表の守備は危なげなく相手を3者凡退に抑えた。

そしてその裏の攻撃、1番と2番の連続ヒットで、無死一、二塁となり、ウグイス「3番センター安達君、センター安達君」

安達が打席に入った。その時スタンドでは、

うるか「純だー!!」

成幸「武元落ち着け!!」

緒方「そうですねよ武元さん、唯我さんの言う通りです。」

古橋（うるかちゃん、カワイイな・・・。）

そんなことがあった。そして、その3球目、

カキーン

快音が響き、フェンス直撃の2点タイムリー二塁打を放った。

うるか「惜っしー!!」

古橋「後ちよつとでホームランだったねー。」

緒方「そうですね。」

成幸「まあ、純は気にしてないと思うぞ。先制点を取れて満足してると思うし。」

その後、一ノ瀬は確実に点を取り、6回までに9―1とリードしていた。

うるか「今日も純、投げないのかなー。」

成幸「そうかもしないな。」

古橋「けど、今日はヒット3本も打ったし大活躍だよ、うるかちゃん!!」

うるか「そーだけど・・・。」

緒方「それより、本当に暑いですね。」

ウグイス「一ノ瀬学園、選手の交代をお知らせします。9番河合君がベンチに下がり、センターの安達君がマウンドに、3番ピッチャー安達君。センターには、背番号8番杉田君」

その瞬間、球場がどつと湧き上がった。

古橋「こ、この感じ、久しぶりだね。」

緒方「はい、そうですね。」

成幸「はは。あの時2人は、周りを見渡していたからな。」

そんなことを話していると、純の投球練習が終わった。

そして1球目、純はストレートを投げ込んだ。

審判「ストライクツ!!」

そのバッターと次のバッターをストレートで三振に打ち取り、後1人、カウントは0ボール2ストライク。

純は、最後にストレートを投げ込んだ。

審判「ストライクツ!!バッターアウト!!ゲームセット!!」

その時、成幸達の近くにいた他校の偵察隊は、スピードガンを見て、

他校生徒A「おい、151キロだぞ!!」

他校生徒B「マジで!!自己最速じゃん!!」

そんなことを言っていた。それを聞いた成幸達は、

成・古・緒「二・・・。」

唯々絶句していたのであった。

うるか(純、カッコイイ・・・／／)

・・・若干1名を除いて。

球場外

うるか「純、カッコ良かったねー!!」

古橋「そうだねー。」

緒方「やはり、相変わらず雰囲気違います。」
すると、

成幸「あつ、純だ。」

うるか「えっ!どこ!」

成幸に言われて見ると、純が記者に囲まれてインタビューを受けていた。

記者E「初回の先制タイムリー二塁打ですが、打った瞬間の手応えはどうでしたか?」

純「はい。良い感じでした。」

記者E「ここまで打率6割、本塁打1本と好調ですね。」

純「そうですね。今のところバットも振れますし、良い状態だと思います。」

記者F「今日が今大会初登板でしたね。」

純「はい。監督からも、昨日のミーティングで『投げるぞ』と言われていたのです。」
記者F「今日の真っ直ぐですが、自己最速の151キロが出たらしいですよ。」

純「そうでしたか。個人的には嬉しいですけど、球速よりも勝つ事を第一に考えているので、あまり気にしなかったです。」

記者F「次は5回戦です。」

純「そうですね。目の前の試合を1戦1戦大事に戦って、勝っていきたいです。」

記者F「次の試合も、頑張ってください。」

純「はい。ありがとうございます。」

成幸達は、

古橋「す、すごい。安達君。」

緒方「インタビュー慣れていますね。」

成幸「まあ、あいつは去年からあんな感じだったし。」

うるか(はう・・・、カッコ良すぎるよう・・・／／／)

それぞれ色々な思いで純のインタビュ―姿を見ていたのであった。

22話

ミーティング

5回戦も、7―1と快勝した一ノ瀬学園。次の準々決勝に備えて、ミーティングをしていた。

西辺「明後日の準々決勝、先発は安達で行く。頼むぞ。」

純「はい！」

西辺「解散！」

部員「二したあ!!」

その日の帰り、

うるか「あつ、純！練習お疲れ！」

純「おう。お前もな。」

うるか「一緒に帰ろう。」

純「おう。良いぜ。」

そして、2人は一緒に帰ったのであった。

うるか「5回戦、また活躍したんだって！」

純「ああ、バッターとしてな。」

うるか「そーなんだ。」

純「あつ、でも明後日の準々決勝、俺先発任されたわ。」

うるか「えっ！ホント！」

純「ああ。」

うるか「頑張つて！明後日ゼツタイ見に行くよ。」

純「おう。ありがとう。そういうや成と一緒に予備校に行ってるんだって。」

うるか「うん。文乃っちとリズりんて話し合つて、成幸に頼りつばなしじゃなく、自分たちだけでも何かしないとなつて思つて。」

純「へえ。それで、どうなの？」

うるか「それがさ、授業スピードが速くて最初はついていけなかつたんだよ。」

純「そうなの？」

うるか「うん。でも、ウチの学校の先輩OBの小美浪先輩っていう人がとても親切にしてくれてるから。」

純「そうなんだ。頑張れよ。」

うるか「うん!!」

しかし、それからの話が全く続かず、少し気まずい雰囲気のまま、別れたのであった。

翌日、うめえん

うるか「だからねっ、言えなかったの！その男子の負担になりたくなくて……いや……、ホントはあた……その友達がヘタレたのが一番悪いんだけど……。あつ！あくまで友達の話だかね、友達のこと！」

古橋「う、うん……。」

その日武元から相談があると聞いて、うめえんで一緒に食べていた古橋であったが、

古橋（も……わたし今、ダイエット中なんだけどなあ……。）

そう思っていた。すると、

うるか「でもだんだんじ．．．その男子は、あた．．．友達のこと嫌いになっちゃったかな．．．とか色々考えちゃって．．．。前みたいにな．．．、普通に話せなくなっちゃったってゆーか．．．。」

そんなことを武元は話していたのであった。

古橋（勉強に響いちちゃっても良くないし、今回は一肌脱だごうかな。）

そう思った古橋は、

古橋「うるかちゃん。明日ってその男子は試合なんだよね？」

うるか「う、うん。そうだよ。」

古橋「じゃあ、明後日部活終わったらさ．．．」

武元にある提案をしたのであった。

翌日、

その日も、30度を超える猛暑であった。それでも、球場は満員になった。この日は

純達の一ノ瀬学園が出てくるからである。

スタンド

成幸「今日は純が先発か・・・。」

うるか「うん。今日は凄いピッチング見れるよ!!」

成幸「はは、そうだな。」

緒方「ところで唯我さん。」

成幸「ん?どうした緒方?」

緒方「今日の相手はどういったチームなのですか?」

成幸「ああ。1試合平均10.4得点、チーム打率4割5分5厘の強力打線らしい。」

緒方「!」

古橋「そうなの!」

成幸「ああ。昨日調べたらそんなことがネットに書かれてあった。」

古橋「安達君、大丈夫かな・・・。」

成幸「まあ、何も対策してないわけじゃないと思うし、大丈夫だと思うぞ。」

うるか「あつ、選手が出てきた。始まるよ。」

審判「これより、試合を始めます。礼!!」

「しゃーっす!!」

この日は、一ノ瀬学園の先攻で始まった。1番のヒットと2番の送りバントで一死二塁となって、

ウグイス「3番ピッチャー安達君、ピッチャー安達君。」

安達が打席に立った。

うるか「純ー! 頑張れー!」

成幸「相手は強力打線だ。ここで先制点取れば・・・。」

その初球、

カキーン

快音が響き、センターオーバーのタイムリー二塁打を放った。

うるか「純ー!!」

成幸「おおーっ!! ナイスバッティング!!」

古橋「凄いね、安達君!!」

緒方「はい!!」

そして、4番の吉田のヒットで純が還り、2点目が入り、初回は2点を先制した。そしてその裏、純がマウンドに上がった。

うるか「純ー!! 頑張れー!!」

成幸「武元、この前見た試合より興奮してる。」

古橋「そうだねー。」

そして、その初球、純はストレートを投げ、相手バッターは空振りしたとは言え、フルスイングしたのであった。

緒方「す、凄いスイングです!!」

成幸「ああ。強力打線なものも納得だ。」

古橋「大丈夫かな・・・。」

すると、

うるか「大丈夫。純なら抑えられるよ。」

武元はそう言ったのであった。すると、純は先頭打者をスローカーブで三振に打ち取り、後の2人も、危なげなく内野ゴロに打ち取り、3者凡退に抑えたのであった。

うるか「ねっ、大丈夫だったっしょ!!」

成幸「お、おお、そうだな・・・。」

うるか「けど、ちよつと純、飛ばしてる気が・・・。」

古橋「そうなの、うるかちゃん。」

うるか「うん。純は初回から全力で投げるタイプじゃないから。普段は7割程度の力で投げて、ここぞという場面か、終盤当たりからギアを上げていくから。」

緒方「そうなのですね。」

古橋「うるかちゃん、心配？」

すると、

うるか「ううん。純なら大丈夫って、信じてるから。」

そう武元は言ったのであった。

古橋（うるかちゃん……。凄いなあ……。）

その後も、武元の言った通り、純はその後も危なげなく重量打線を抑えていき、7回まで被安打3、三振を11個奪い、三塁を踏ませない好投をしたのであった。

打線も、確実に点を重ね、8回の攻撃終了まで、10点も取ったのであった。そして、8回のマウンドに純が上がったのであった。

成幸「この回抑えれば勝ちだな……。」

緒方「そうですね。しかし、安達さんは相変わらず凄いですね。」

古橋「そうだね。相手の攻撃を簡単に封じ込めるんだもん。」

成幸「確かな。普通だったら打ち込まれてるはずなのにな……。」

うるか「だから言ったでしょ。純は大丈夫だつて!!」

古橋「そ、そうだね。」

その時古橋は、

古橋（やつぱりうるかちゃん、カワイイな……。本当に安達君の事が大好きなんだね……。）

そんなことを思っていたのであった。

そして、最後のバッターをHスライダーで空振り三振に打ち取り、一ノ瀬学園は、10—0の8回コールドで勝利を収め、準決勝進出を決めたのであった。

その翌日、池有公園

武元と純は公園で2人つきりであったのである。一昨日武元が古橋に相談したときのアドバイスを行いながら。しかし、

うるか「……。」

純「部活お疲れ。夏休みなのに大変だな。」

うるか「う、うん……。大会、近いからね。純も、昨日の試合、お疲れ様。」

純「ああ、ありがとう。つつても、相手の打線の迫力がヤバかったから、前半からフ

ルスロットルだったよ。」

うるか「やっぱそうだったんだ。見てて、何か飛ばしてる気がしたから。でも、勝て良かったね。」

純「ああ。」

しかし、

うるか「……。」

純「……。」

会話が止まってしまったのであった。

純（き、気まずい……。）

うるか（うひーっ!!文乃っちが言うから思い切って誘ってみたけど、ヤツパダメダメダメーっ!!）

そんなことを思っていたのであった。しかし、

うるか（そういや、文乃っち一昨日……）

回想

古橋『困ったらいつでもスマホでメッセージ送ってくれていいからね!』

回想終了

うるか（つて言ってたよね・・・。）

そう思い出した武元は、

うるか『文乃っち！HELP！友達があの男子といるんだって！どうしよう』

と古橋にメッセージを送ったのであった。その古橋はと言うと、

古橋（心配だから見に来てみれば・・・。けど、ちよつと近すぎたかな・・・。まあ、これだけ変装してれば大丈夫よね・・・。）

と、前髪を全下ろしし、伊達メガネをかけ、パッド6枚重ねをした状態で純達の後ろにいたのであった。

そして、

古橋『共通の知り合いの話題なんてどう？共感も生まれて、きつと話が膨らみやすい

よ!』

と、武元に返信したのであった。

うるか（共通の知り合い……。）

すると、

うるか「あつ、この前話した小美浪先輩だけどき、お医者さんの娘だったんだよねー。」

純「へえ、そーなんだ。」

うるか「うん。もし純が怪我したとき、通つてみれば。」

純「はは。そうしようかな。」

うるか「うん。あつ、そう言えば、この前の雨で小美浪センパイの家に行つただけ

ど、成幸に服が透けてたの見られて気まずかったなー。」

純「マジで。なんかアイツ、そういうの出てくわすな。」

その時、

古橋「はあああつ!？」

古橋がつい大声を出してしまったのである。それに気付いた2人は後ろを振り返つ

て、

純「なんか今、古橋みてーな声が……。」

うるか「言われて見れば……。」

古橋（し……しまった。バレちゃった……!?!）

と古橋は思ったのであった。しかし、純と武元はとある一点を見て、うるか「なんだ、全然別人じゃん！」

純「そうだな、うん。」

そう言ったのである。しかし古橋は、

古橋（バレなくて良かったけど・・・、こいつら後でつねる。）

そんなことを思っていたのである。しかし、

古橋（・・・ってまた会話止まってるし！）

と感じ、それと同時に、

うるか『文乃っちー！また会話止まっちゃったよー！友達が!!』

と武元からメッセージが届いたのであった。

古橋（だんだん雑になってきてるなあ、友達設定・・・。）

メッセージを見て、古橋はそう思ったのだが、

古橋（よかろうだようるかちゃん。こうなったらこつちも本気で・・・ッ。）

そう思い、武元にメッセージを送ったのであった。

古橋『やつぱりココは、部活関係の話題だよ！普段使ってる物の話なんてどうかな!？』

すると、

うるか「そーいや、純にあげたアンダーシャツ、どう？」

純「ああ、あの半袖のアンシャツ、結構いいな。今ちようど練習で使ってるんだけど、着心地も抜群だよ！」

うるか「ほっ、ほんと!? 嬉しい! 最初間違つて渡しちやつた時は……」

その時、2人はあの時の事を思い出し、

うるか「どうしよう……かと……」

純「……」

また気まずくなり、会話が終了してしまったのである。

古橋（あれええ!?)

古橋『この近所に、かなりぐ利益があるつて噂の学業成就の神社があるみたいだから、

2人で行つてきたらどうかなあ!』

うるか「あのさ、この前一緒に帰つた時に寄つた神社、行つてみない?」

純「ああ、あの神社ね。そういやお前、そんな時したカツコ……、結局……、好

きな奴には見せたのか?」

うるか「え……。う……。うん。」

純「そっか……」

またまた気まずい空気になり、会話が終了してしまったのである。

古橋（なんでえええ!?! ああああ、何故かやることなすこと全てが裏目に……。どん

どん空気が重くなつていくよーっ!!)
すると、

うるか『あたし・・・、会話・・・、ワカラナイ・・・。』

といったメッセージが古橋に届いたが、

古橋（ああ、もううるかちゃん、テンパリすぎてまともな文章になつてないし・・・。）

そう感じた古橋であつた。そこで古橋は、

古橋『ねえうるかちゃん。』

古橋『お友達は、その男子にどう思つてもらいたいと思つてるのかな？』

古橋『好きになつてほしい？』

といったメッセージを、武元に送つたのであつた。すると、

うるか『ほしいよ。』

うるか『当たり前じゃん。』

うるか『中学からずっとずっと』

うるか『もう意味わかんないくらい好きなんだから。』

うるか『でもだめ。』

うるか『ただでさえいつも沢山の人から期待されてて、それらをいっぱい抱え込ん

じゃう人なんだもん。』

うるか『野球が終わるまで、』

うるか『心の重荷になっちやうくらいなら、別に好きな人がいるって思われてるほうがいい。』

うるか『だからもしも、』

うるか『もしも叶うなら、ね』

うるか『元の関係に戻って・・・、本当に・・・、本当にたまにでいいから、』

うるか『女の子として可愛いつて思ってもらえたら、』

うるか『今はそれが一番』

うるか『幸せかなあ。』

と送られてきたのであった。

うるか『・・・って！友達が言ってたよ。友達が!!』

といった内容も加えて。そのメッセージを読んだ古橋は、

古橋（うるかちゃんってもう・・・、健気乙女可愛すぎるでしょー!!こつちが照れちゃう!!）

そう心の中で悶えていたのであった。

古橋（でもうるかちゃん・・・。やっぱり好きな人が別にいるって誤解は解いておいた方が絶対いいよ！その上で改めて友達になって正直な気持ちを伝えればいいと思う

よ！)

といった内容を送ろうと思つたその時、純から、

純「武元。ずっと前から思つてたけど、お前のその髪型、似合うっつーか、可愛いよな。」

そういった事を言つたのであつた。すると、

うるか「もう一回言つて。」

純「え。でもよ、んなこと俺に言われても嬉しく・・・」

うるか「う、うっさいなー！いーから早く！」

純「・・・か、可愛いよ。」

うるか「もう一回！」

純「可愛い・・・。」

うるか「もう一回！」

純「可愛いって。」

うるか「えへへっ。もう一回！」

純「お、おい！もういいだろ！恥ずいし・・・！」

うるか「えーっ。いいじゃん！もう一回！」

純「可愛い。はい、これでおしまいな。」

そう言つて、純は優しい顔で、武元の頭を撫でたのであつた。しかし、うるか「やだー！もう一回だつてばー！えへへっ。」

まだ武元は、催促していたのであつた。その様子を後ろから見た古橋は、

古橋（良かった。安達君が褒めたから・・・。けど、まさか安達君も、うるかちゃん
の事が好きだつたなんて・・・。）

という気持ちで聞いていたのであつた。

23話

準決勝は、エースの純をスタメンでも使うことなくベンチで温存したが、6―0と危なげなく勝ち、決勝に進出した。

その翌日、一ノ瀬学園野球部ブルペン

明日の決勝に備え、調整をしている純。

純「野口、真っ直ぐ。」

野口「おう！」

そう言つて、純は真っ直ぐを投げた。すると、綺麗な縦回転で糸を引くようなボールが、野口のミットに収まった。

野口「ナイスボール！」

その後も、変化球を交えながら、投球を続けたのであった。

その夜のミーティング

西辺「・・・スタメンは以上だ。」

部員「二はいっ!!」

西辺「先発は安達。お前に任せるぞ。」

純「はい!!」

西辺「解散!!」

部員「二はい!!」

野口「安達。」

純「何?」

野口「明日だけど、今日同様暑くなるから、替えのアンシャツ余分に用意しとけよ。」

純「ああ。半袖とノースリーブのアンシャツ、余分を持ってくよ。」

野口「そうか。お前って、夏近くなると試合でもいつも半袖だよな。」

純「身軽な感じになるしな。その分滑らねーように気を付けてるけど。後肩も冷やさねーようにな。」

野口「そうか。」

純「じゃ、明日。」

野口「ああ。」

翌日、野球場スタンド

うるか「いやあ、暑いねー。」

成幸「今日も30度超えらしいからな。」

古橋「そうだねー。」

緒方「しかし準決勝、安達さん試合に出なかったのは、このためなんですよね。」
うるか「そうだよ。疲労を取るためにね。」

その時、

川瀬「あれ、やつぱりうるかも来たんだ。」

海原「そりやそうだよ。」

川瀬と海原が成幸達に気付いて来たのであつた。

うるか「海っち！川っち！来たんだ。」

川瀬「まあね。全校応援でもあるし、甲子園出場も掛かっているし。」

うるか「うん。そして、日本一になるための試合でもあるしね。」
海原「そうだね。」

うるか「でも、あたしは純が勝つと信じるよ。」

海原「よし。私らも声がかかるまで応援しますか、川瀬隊員。」

川瀬「そうですな。海原隊員。」

その後、

小林「あれ、成ちゃん。」

大森「本当だ。唯我ー！」

小林と大森もやって来た。

成幸「小林と大森も来たんだ。」

小林「全校応援だしね。」

大森「ああ。俺らも純を全力で応援しようと思つてな。」

成幸「そうか。そうだな。」

その時、

観客A「あつ、来たぞー!!一ノ瀬サインだ!!」

観客B「一ノ瀬ー!!」

観客C「吉田ー!!」

観客D 「純ー!!」

観客E 「一ノ瀬最強!!」

観客F 「安達イ!!」

観客が、一ノ瀬ナインが現れた途端、もの凄い喚声成幸達を囲んだのであった。

古橋 「な、何かしら!?!」

緒方 「もの凄い喚声です!!」

緒方と古橋に至っては、驚いて周りを見ていたのであった。

成幸 「お前達2人は見慣れてなかったか。甲子園がかかっている決勝は、こんな雰囲気だぞ。」

緒方 「こんな雰囲気の中で、安達さんは投げているんですね。」

古橋 「う、うん。改めて凄いね・・・。」

すると、

うるか 「ゼーンゼン!!夏の甲子園と比べたらこんなの可愛いよ!!甲子園はもつと凄いですから!!」

古橋 「そうなんだね。」

川瀬 「いつになく興奮してるな、うるか。」

海原 「しょうがないよ。大事な試合で安達君が投げるんだし。」

川瀬「そうだね。」

緒方「あつ、円陣が組まりました。」

古橋「何を始めるんだろう？」

成幸「ああ、あれか。」

うるか「あれをやるんだね!!」

古橋「唯我君とうるかちゃんは知ってるの？」

成幸「ああ。時々よくやってるよ。甲子園でもやってたし。」

うるか「かけ声が凄いかッコイイんだよ!!」

古橋「へえ。」

すると、

ナイン「ALL IS WELL!!」

ナイン「おお!!」

そう言つて、ナイン達は人差し指を天に向けたのであつた。

古橋「す、凄いね・・・。」

緒方「どういう意味ですか？」

成幸「『ALL IS WELL』。きっと上手くいくっていう意味だよ。」

古橋「何かカッコいいね。」

うるか「でしょ!!」

川瀬「うるか、あんたちよつと落ち着きなよ。」

海原「そうだよー。」

実況『全国高等学校野球選手権大会〇〇県地区予選決勝。夏本番を思わせるこの青空の下、選手が出て参りました!』

吉田「いくぞお!!」

ナイン「おお!!」

審判「これより、試合を始めます。礼!!」

「しゃーっす!!」

実況「1回表、守備につくのは一ノ瀬学園。そのマウンドにはこの人、今大会、いまだ失点0。一ノ瀬学園不動のエースでもあり、高校No.1ピッチャー安達純。今日はどのようなピッチングを見せるのか!!」

審判「プレイ!」

そして、純は初球に真っ直ぐを投げた。

審判「ストライク!」

スタンド

成幸「今日の純、調子は良いみたいだな。」

小林「そうだね。純ちゃん、この時期に調子悪いって、聞いたことがないしね。」

大森「確かに・・・。」

古橋「相変わらず凄いボールだね、りっちゃん。」

緒方「はい。これでまだ7割程度というのが不思議です。」

うるか「それにこの時期、後半からもっと凄くなるから!!」

川瀬「いつになくハイテンションだなあ・・・。」

海原「ホントだね・・・。」

1回表、安達は危なげなく3者凡退で抑えたのであった。

その裏、一ノ瀬も3者凡退に抑えられ、両者3回まで0行進が続いたのであった。

実況『ここまで、両チーム合わせてまだヒット2本。それもいずれシングルヒット。』

先取点を取るのどちらか!』

4回表、純はその回を3者三振に抑え、雄叫びを上げた。

純「シャー!!」

その姿に、球場のボルテージは一気に上がった。

スタンド

成幸「純の雄叫び、相変わらずスゲーな・・・。」

小林「ホントだね。普段とのギャップを感じるよ。」

大森「まあ、俺も最初見たときはマジでビックリしたがな・・・。」

古橋「凄いね、安達君。」

緒方「はい。見てるこつちも緊張します。」

うるか（純・・・／／／）

海・川（乙女だなあ・・・。）

それぞれがそう思っていると、その裏、一ノ瀬の攻撃、

キン

先頭の2番打者がヒットで出塁し、

ウグイス「3番ピッチャー安達君。ピッチャー安達君。」

純が打席に入った。

スタンド

うるか「純ー!!頑張れー!!」

川瀬「ココで打てば、ウチにチャンスが広がるか・・・。」

海原「うん、そうだね。」

成幸「ココで打てるか!!」

小・大「それとも相手が抑えるか!!」

緒・古「・・・。」

緒方と古橋は、緊張のあまり、声が出せない。

カウント1ー1になって、3球目、

カキーン

純の打球はライト前に弾き、一塁ランナーは一気に三塁まで行った。

スタンド

うるか「純ー!!」

川瀬「三塁まで行けたのは大きい。」

海原「うん。点を取りやすくなるからね。」

成幸「次の吉田が打てるかだな。」

小林「そうだね。」

大森「頼むー!!」

その2球目、

カキーン

吉田が振り抜いた打球は、レフトスタンドの中段まで叩き込んだ。

観客「「うおおおッ!!」」

実況『ココで、4番の吉田の先制3ラン!!一ノ瀬学園、理想の形で先制点を挙げました!!』

純「ナイスバッティング!!」

吉田「おう!ありがとう!」

純「狙ってたの?」

吉田「いや、ボール球には手を出さず、打てる球を確実に捉えようという気持ちで打席に入ってたから。甘い球が来たから、それに反応できた。」

純「流石キャプテン！頼りになるー！」

吉田「おだてるな。」

そう言つて、ベンチに戻つたのであつた。

スタンド

うるか「キャー！！3点取つたよー！！」

川瀬「そうだな！！」

海原「やつたね！！」

成幸「うおー！！ココで3ランか！！」

小林「純ちゃんによると、ここぞつて時の吉田のバツティングはヤバいつて聞いた。けど、これは大きいね。」

大森「スゲー！！」

そして、この3ランを皮切りに一ノ瀬学園はそれ以降も着実に点を重ね、8回が終

わって13―0とし、純も時折雄叫びを上げながら相手を抑えていった。

実況『さあいよいよ9回に入りました。この回を抑えれば、一ノ瀬学園の2年連続と3季連続の甲子園出場となります。そして安達は、8回までで、毎回の14奪三振、被安打3で、三塁を踏ませないピッチング!』

スタンド

うるか「純ー!!頑張れー!!この回抑えたら甲子園だよー!!」

川瀬「もう、うるかったら・・・」

海原「安達君の事になると、いつもこうだね。もう慣れたけど・・・」

古橋「けど、点差があるとは言え、緊張するね。」

緒方「はい。いつも増して緊張します。」

成幸「はは。点差があるとは言え、この回を抑えたら甲子園だからな。」

小林「でも、純ちゃん達が一番緊張してるんじゃない。」

大森「ああ。そうだな。」

それぞれがそう言ったのであった。

スタンド

うるか「やったああああああーッ!!!!!! 純ー!! 甲子園だー!!」

川瀬「良かったな、うるか!!」

海原「良かったね、うるか!!」

うるか「うん!! よつしやあああああーッ!!!!!!」

成幸「やったー!!」

小林「やったね、成ちゃん。」

成幸「ああ!!」

大森「うおー!! 甲子園だー!!」

古橋「やったね、りっちゃん!!」

緒方「はい!! 文乃!!」

緒方と古橋は手を取り合っていた。

審判「13―0で一ノ瀬学園!! 礼っ!!」

「「ありがとうございます!!」

こうして、純達一ノ瀬学園は、その圧倒的な力で2年連続、3季連続の甲子園出場を

果たした。狙いは勿論、去年後一步で涙を呑んだ、全国制覇だ!!

24話

夏祭り

葉月「わーい！わーい！」

和樹「お祭りだあ！」

この日純と成幸は、夏祭りに出かけていた。

花枝「悪いわね成幸。勉強あるのに付き合つて貰つちやつて。純君も忙しいのにごめんなさいね。」

成幸「いいよ母さん。気分転換も必要だしさ。」

純「大丈夫ですよお婆さん。俺も成同様、気分転換したかったので。母さんもいいよね？」

純母「ええ。大丈夫よ。花枝さんも気にしないで。」

花枝「そう、ありがとう。後純君、甲子園出場おめでとう。頑張つてね。」

純「はい、ありがとうございます。」

成幸「ま、軽く一回りするくらいならそんなに遅くもならないだろ。帰ったら気合い

で取り戻そう・・・。

純（成も大変だなあ・・・。）

すると、

古橋「あれえ？やっぱり唯我君と安達君だあ！」

うるか「うえっ!?!純!?!」

古橋と武元が浴衣姿で現れたのであった。

成幸「古橋！武元！」

純「お前らも来てたんだ！」

すると、

純母「あら。うるかちゃん、久しぶり。可愛くなつたわね。」

うるか「あつ、お久しぶりです。か、可愛いだなんて・・・!」

純母「あらあら、照れちゃって。」

うるか「はう・・・／＼／＼」

純の母と武元がそんなやり取りをしたのであった。

成幸「純、お前の母さんって、武元の事知ってるの？」

純「ああ。あいつ、中学の時に何回か俺んちに来たことがあってな。」

成幸「へえ。」

純「古橋は、息抜きに来たの？」

古橋「うん、ちよつと気分転換にね。後安達君、甲子園出場おめでとう。頑張つてね。」

純「おう、ありがとう。」

古橋「それとこの子つて、唯我君の弟さんと妹さん？」

成幸「ああ。」

和樹「和樹でーす！」

葉月「葉月でーす！」

花枝「花枝でーす！」

成幸「つて、母さん！」

純「ははは！」

成幸「純！」

すると、後ろでもじもじしてる武元を見た古橋は、

うるか「うわっ!？」

武元の背中を押して、

古橋「ねーねー、どうかなあ安達君？ゆ・か・た！似合ってる？」

純に尋ねたのであった。

うるか「わわっ、ちよつと文乃つち・・・！」

すると、

純「うん、スゲー似合ってるよ。可愛いな。」

そう言ったのであった。それを聞いた武元は、

うるか（似合ってるって言うってくれた。純が似合ってるって！後可愛いも言うてくれた！着付け大変だったけど、頑張ってるって着てきて良かった！純が似合ってるって！可愛いって！嬉しい！）

嬉しさのあまり、乙女オーラが出ていたのであった。

古橋（わっ、乙女オーラダダもれだよるかちゃん……。）
すると、

成幸「古橋も、なんか板についてるといいうか、大和撫子って感じでよく似合ってるな。」
成幸が、古橋の浴衣姿を褒めたのであった。

古橋「え……、あ、ありがとう。」

それを聞いた古橋は、悪い気はしなかったが、少し照れたのであった。すると、
和樹「板についてる？」

葉月「確か浴衣の似合う体型って……。」

和樹と葉月がそう言ったので、

古橋（フフフ。こらこら少年少女達。それ以上は許さん！）

禍々しいオーラを出しながら、古橋は心の声を述べたのであった。すると、

純母「純、せっかくだからうるかちちゃんと一緒に回ってきなさい。」

純「え、母さんは？」

純母「私は花枝さんと和樹君と葉月ちゃんと一緒に回るわ。」

それを聞いた花枝さんは、

花枝「そうね。成幸、そっちと一緒に回りなさい。」

サムズアツプしながらそう言ったのであった。

成幸「え、何だよそれ！」

その空気を察した古橋は、

古橋「あつ！唯我君！一緒にたこ焼き食べに行こう！」

成幸「え!？」

古橋「ささっ、早く行こう、唯我君！」

成幸「おっ、おい古橋！」

成幸の手を取り、その場を後にしたのであった。

純「まったく、そんじゃあ、行こつか。」

うるか「う、うん!!」

そう言って、純と武元も一緒に縁道を回ったのであった。

道中

純「まったく古橋、急に何だよ・・・？」

うるか「ねー。買い物くらい付き合うのになー。」

純「マジそれな。なあ武元、そのかき氷ひとくち頂戴。」

うるか「うん、いーよ！って、ねーねー純、見て見て！ 舌・・・真っピンク！」

純「はは！本当だ！」

うるか「つと、ほい純。」

純「おう、ありがとう。うめー!!」

うるか「だねー！あ、改めて、甲子園出場おめでとう！」

純「ああ、ありがとう。」

うるか「試合、見てたよ。」

純「マジで!？」

うるか「うん、カッコ良かったよ!!」

純「はは、最後までみくちやになっちったけどな！」

うるか「へへ。応援に行けないけど、頑張つてね!!」

純「おう!! ありがとう!! お前も大会、頑張れよ!!」

うるか「うん!! 頑張るね!!」

そう言つて、お互いグータッチをしたのであつた。

純「ハラ減つてきたなあ。何か食わね?」

うるか「うん、いーよ。」

純「そんじゃあ、まずは焼きそば食おうぜ!!」

うるか「おー!!」

そう言つて、2人は屋台で色々食べたり、金魚すくいや風船釣りなどをしながら一緒に夏祭りを楽しんだのであつた。

ちなみに成幸は、緒方の出店を手伝い、桐須先生や小美浪先輩に出会い、その後古橋と一緒に終電を乗り損ねてしまい、旅館に泊まつて一夜を過ごしたのは内緒である。

25話

赤堀水泳競技場

この日純は、武元の大会を見に、水泳競技場へ足を運んでいた。

審判「take your marks・・・。」

ピッ

観客「「武元！武元！武元！」」

そして、

実況「やりました！一ノ瀬学園武元、自由形200優勝です！」

純「ほお・・・！」

観客A「調子良いじゃん、一ノ瀬学園。」

観客B「こりゃ、リレーも取っちゃうかもな。」

選手控え室

海原「うるか！個人200m自由形優勝おめでとー！！」

うるか「えへへっ、あんがと！」

川瀬「いやー、マジですげーわ、あんた・・・。」

うるか「でも、次のメドレーリレーこそ、うちの部が今まで頑張ってきた集大成だもんね！みんなで力合わせていくよー！」

そう言っつて、円陣を組んだ。

海原「うるか個人は、まだ国体やらなんやらあるけど・・・。」

川瀬「私達3年はこれで引退。部活としてみんな泳げるのはこれで最後だ。2年代表として3番手頼むぞ、池田。」

池田「はい！絶対うまく武元先輩に繋いでみせます！」

うるか「今まで練習してきた全部を、いっつも余さず出しきるかんねー！一ノ瀬・・・。」

う・海・川・池「「ファイツ！！」」

そして、

うるか「池田っち、そろそろだよ！」

池田「は、はい！」

しかし、

うるか「あ・・・ッ!!」

大会後

観客C「惜しかったなーノ瀬学園。」

観客D「引き継ぎミスで失格か・・・。」

観客C「壁にタツチするより早く2年の子が飛び込んだと。」

そして、純は武元に声を掛けようと思ひ、観客席を後にした。

池田「ふぐつ、くつ・・・。」

川瀬「もう泣くな、池田。」

海原「そーそー、しよーがないって。」

池田「ごめんなさい先輩達、最後の大会だったのに……。私のつせいで……。っ！」
すると、

うるか「ねえ、池田っち。」

武元が、池田に声を掛けた。

うるか「気にすんなどは言わない。死ぬほど泣いて、死ぬほど悔しがるといーよ。」

池田「えっ、はっはい……。」

うるか「そしたらさ、次はもう失敗しないっしょ。水泳部、頼んだかんね。」

そう言つて、池田にハンカチを渡した。

池田「せんばい……。」

その様子を見ていた純は、

純（やつぱ……。声なんて掛けらんねーよな、どう考えても……。けど、池田つていうあの2年の子の気持ちも分かる。俺も去年、最終回にサヨナラタイムリー打たれて、日本一逃しちやったから、責任感じるよな……。）

と言つた気持ちで聞いていたのであつた。そしてこのまま帰ろうと思つたその時、

純「！」

川瀬と海原が純の傍にいたのであつた。

海原「なにになー、安達君！来てるならそう言つてくれればいいのにーっ♪」

川瀬「そーかそーか、そこまでうるかを心配して・・・。」

純「まあ、ちよつとな・・・。」

すると、

うるか「純・・・？」

武元が純に気づき、顔を赤くしたのであった。

純「おう、武元。」

うるか「おうじゃないっしょ!!来んなって言ったのになんでいんの!?!もーっ!!」

純「別にいいだろ。お前だつて俺の試合見てんじゃねーか。」

すると、川瀬と海原達がいなことに武元は気付いたのであった。

うるか「あ、あれーっ!?!みんなどうしたんかなー?」

うるか（海つち、川つち、ちよつとあからさますぎるっしょーっ!?!」

純「それよか、帰ろうぜ。」

うるか「あ、う、うん!!」

帰り

純「武元。」

うるか「うん？何？」

純「上手く言えねーけど、悔しかったよな？でも、俺もあの2年の子の気持ち分かるから、何とも言えねーんだけど。」

すると、

うるか「・・・たしかにね。勝ちたかつたなあ、みんなで。でもいつか、池田つちが今日のことをバネにして次につなげてくれるなら、決してムダにはならないはずだよね？」

純「・・・そうだな。」

うるか「・・・それにさ、あたしよりずっと泣きたい人が他にいるから。だからあたしも、泣くなら、やれること全部やりきってから思いっきり泣くの。そんなときや胸かしてよねー♪なんつって！」

その時、今日の武元はまぶしくて綺麗だと感じた純であった。

うるか「でもさんきう純！励まそうとしてくれたんっしょ？」

純「まあな・・・。」

すると、

うるか「・・・もしまだ、励ましてくれぬ気があんならさ・・・、今夜・・・、ちよつと付き合つて欲しいんだけど。」
そう言ったのであつた。

番外編

これは、純や成幸、そして武元が、まだ中学生の時のお話である……。

七緒市立七緒南中学校

うるか「英語、地理、歴史、数学……？中学ってこんな教科増えるのー？算数と数学って何が違うんだろう。入学早々ついていけない気がしないよう……。」

その時、ある用紙を見て、

うるか「げ……。」

そう言ったのであった。

うるか（入部希望用紙……。これもいい加減決めなきやなあ……。）

その時、その横で、

純「そんじゃ成、午後練あつから、俺行くわ。」

成幸「ああ。気を付けてな。」

そして、純は野球ボールをいじりながら教室を後にした。その2人の男子、特に純を見た武元は、

うるか（あの男子、たしか安達だったよね。今日も野球ボールをいじってたな。よっぽど野球好きなんだなア。）

そう思っていた。

とある体育の授業、

教師A「次、武元ー！」

呼ばれた武元は、他よりも速い泳ぎを見せたのであった。

クラスメイトA「わーっ、武元さんはやーい！」

クラスメイトB「水泳部入ればいいのにー!!」

うるか「えへへっ、あんがと！」

しかし武元は、

うるか（ま・・・、水泳は3歳からやってるし多少は・・・ね。）
その時、

教師A「よーし、今日の授業はここまで!!」

生徒「はーい。」

教師A「安達、後片付け頼むな。」

純「はーい。」

その様子を見た武元は、純に近づき、

うるか「ねえ。」

純「ん?」

うるか「手伝おっか?」

純「マジ!?サンキュー!!」

そう言つて、2人で一緒に後片付けをしたのであつた。

そして、着替え終わつて、教室に行く道中、

純「マジ助かったわ。サンキューな、武元。」

うるか「えへへっ、どーいたしまして。」

すると、純は野球ボールを取り出していじったのであった。

うるか（あつ、またボールいじってる。）

そう思った武元は、純に聞いてみたのであった。

うるか「そーいえばさ、いつもボールいじってるけど、野球部入ってるの？」

純「いや、入ってねーぞ。」

うるか「えええっ!? そーなの!? でも、いつもボールいじってるけど。」

純「俺、シニアに入ってるんだよ。クラスはちげーけど、俺と同じチームに入ってる奴

もいるし。」

うるか「そーなんだ。」

すると、

純「武元こそ、何で水泳部入んねーんだ? そんなにはえーのに。」

すると、

うるか「・・・小学校最後の大会であたし、一度セーダイに負けちゃってさー。あんなに悔しい思いするくらいなら、もう水泳は、遊びでやるくらいで丁度いいかなーって。」

そう言い、その当時大人達に言われた言葉を思い出していた。

大人A 『なんだ一度負けたくらいで情けない・・・。』

大人B 『そんな根気のないことでどうする!』
すると、

純 「俺もその気持ち分かるから言うけど、そこまで悔しがれるのは、スゲー価値のある才能だと思うぜ。悔しいって気持ちがあるほど、そこまで本気になれたんだろ。それって、スゲー幸せなことだもんな。」

そう言ったのであった。

うるか 「・・・初めてそんなこと言われたかも。」

純 「そう?」

うるか 「本気、か・・・。」

それから暫くが経ち、

海・川 「うるかー、部活行く部活!」

うるか 「つしやー!泳ぐぜーつ!」

純 「水泳部頑張ってたんだな、武元・・・。」

小林「大会ことごとく総ナメだつてさ。」

純「へえ……。」

成幸「スゲ……。」

小林「純ちゃんも、今年シニアの全国大会いったじゃん。」

純「まあ、つつてもベスト4だったけどな。」

成幸「それでもスゲーよ……。」

純「あつ、俺今日午後練あつから、行くわ。」

成幸「ああ。頑張れよ。」

純「おう。」

その時、純に気付いた武元は、

うるか「ねー安達！」

純「ん？何？」

うるか「途中まで一緒に行こうよ！」

純「途中つて、下駄箱までじゃねーか。」

うるか「いいからいいから！」

純「……つたく。」

うるか（やがて、あたしがこの野球少年に思いつきり恋に落ちるのは・・・、もう少し先のお話である。）

26話

七緒市立七緒南中学校

うるか「うわつ、懐かしーっ！やっぱ3年くらいじゃそんな変わらないねー！」

純「ったく、ちよつと付き合つて欲しいって聞いて何処かと思つたら、俺らに通つた中学じゃねーか。何でこんなところに……」

すると、

うるか「ねーねー、覚えてる？あだし達、何度か隣の席になったよね！」

そう言つたのであつた。

純「ああ、3年間席替えするたんびに、何故かお前と隣同士になつてたな。」

うるか「あはは、そう言えばそーだったね。けど、初めて見た時はまさか……、こんな野球少年のこと、こんなに……」

純「こんなに？」

うるか「はっ！こんなにっ！話すようになるだなんて思わなかつたなーって!!」

純「そっか……」

階段

うるか「そういや、『おのちー事件』とかあったよねー。」

純「ああ、朝礼で小野先生のカツラが取れちゃったアレか、あったあった。アレは伝説級だよ。」

うるか「それねー！あつ、知ってる？野球部のナベつち、高校デビューしてビジュアル系バンドでプロ目指してるって。」

純「マジで!?ナベが!?想像できねー・・・。」

その時、武元はとある一角に差し掛かったとき、あの日のことを思い出し、止まったのであった。

純「ん？どうかした、武元？」

うるか「んーん、なんでも。」

うるか（あの日から・・・、気づけば視界のどこかに、この人を探していた。）

うるか中学『じ、純君っ。いや・・・、ちがうな。お、おつす、純！』

うるか（下の名前で自然に呼べるように、家で猛練習してみたり。）

回想

川瀬中学『一ノ瀬学園?』

海原中学『前、二ツ葉高受けるって言ってなかった?』

うるか中学『う・・・、うん。まあその・・・、ちよつちシンキョーの変化つていうか・・・、そんなカンジで・・・。』

そう言つて、武元は純をチラ見した。その様子を見た川瀬と海原はニヤけながら、

川瀬中学『私はいいいよー、一ノ瀬でも。あそこ水泳超強いし。後野球部もここ最近台頭してるし。』

海原中学『やれやれ。ま、ちよつと遠いけどしやーないかー。』

そう言つたのであつた。

うるか中学『うええっ!?海つち川つちも!?!』

回想終了

純「お前さつきから何赤面したり笑ったりしてんだよ。」

その時、誰かが来る足音がしたので、2人は咄嗟に近くにあるロッカーに隠れたのであつた。

後藤先生「・・・物音がしたような・・・、気のせいか・・・。はあ・・・、まったくやつてられんな、宿直なんて。早く帰って嫁の飯食いたい・・・。」

そう言つて、後藤先生はその場を後にしたのであつた。

うるか「マツスルゴトー、ちよつと太つたねー。結婚して幸せ太りかな。」

純「じゃね。つーかそれより、このまま会つても平気なんじゃねーの？」

うるか「だつて、マツスルゴトー怒ると超コワイじゃん・・・。」

純「そりやお前、俺と一緒によく怒られたからなあ。大抵お前が俺を巻き込んでる気がすんぞ。」

うるか「そうだったね・・・。」

そして、2人はプールに移動した。

うるか「ひゃーっ、きもちーっ。いやー、プールの鍵の隠し場所、変わってなくてよかつたねー。」

純「つーか、あんな分かりやすいとこ隠してて、なんでバレねーんだよ。」

うるか「あはは、言われてみればそうだねー。」

すると純は、

純「・・・で？なんでわざわざここに？」

武元にそう尋ねた。すると、

うるか「ちよつと初心に帰りたくてさ、来たくなっちゃったんだ。この場所に、純と一緒に。」

純「俺と？なんで？」

うるか「水泳辞めようと思ってた中1のはじめ頃、純が続けるきつかけ、くれたんだよ。」

そう言ったが、

純「？」

うるか「あは、覚えてないかー。フツの世間話だったし。あたしがこうして水泳できてるのは、純のおかげでもあるから、そのお礼・・・、ずつと言いたかつたんだ。あんがとね。」

そう言われた純であったが、

純「バーカ、それはこっちの台詞だ。」

うるか「え？」

純「・・・誰にも言うんじゃねーぞ。つっても、成とこばは知ってるがな・・・。」

そう言つて、純は自身の過去を話した。

純「・・・ちようど武元に出会つた頃、中学の入学式の数日前だったかな、親父が事故で死んだんだ。」

その瞬間、武元は目を見開き、絶句した。

純「・・・その頃は、マジで先が真つ暗になつちやつてさあ。・・・でも、俺一人っ子だし、母さんを楽させるために、早くプロになんなきやつて野球を続けたんだけど、いつも俺のプレーを褒めてくれる親父がいなくなつて、なんか心がポツカリ穴が空いた感じになつて、野球をする情熱をなくしてたんだ。けどそんな気持ちとは逆に、自分でも分かるくらい上達していつて、でも褒めてくれる親父はいねーし。辛くなつちやつて、正直もう投げ出していつて思つた時、よく頑張つてる武元のニュースを目にしてさ、俺ももうちよつとだけ頑張つてみようつて思つたんだ。だからお礼を言いつてるのはこつちの・・・！」

その時、武元は突然純の手を取つたのであつた。

純「え!?え!?!」

うるか「あつ、あたし．．．、あたし純に、そんな辛いこと思い出させちゃうなんて思わなくて．．．。嫌な気持ちにさせちゃうたよね．．．、ごめんなさい．．．。」

そう言つて、武元は純の手を優しく握つて、謝罪の言葉を述べたのであつた。

そんな武元を見た純は、

うるか「あ．．．。」

純「気にすんな。むしろ、俺が暗い話をしちゃつたんだから、お前は何も悪くねーよ。」

そう言つて、優しい顔で武元に握られた手から、武元の頬を指でなぞつたのであつた。

その時、純は武元に握られた手を強く握り、

うるか「純?」

武元を真つ直ぐ見て、こう言つた。

純「俺、お前の分まで甲子園で活躍して、ゼツター日本一になつてやるから。だから、

お前も勉強、頑張れよ。」

うるか「うん．．．。」

そう言われて、武元も純の手を強く握り返し、そして自分の頬に当てたのであつた。

うるか「ねえ、純。」

純「?どうした?」

うるか「あたしのこと、下の名前で呼んで。」

純「え、何で？」

うるか「お願い……。」

そう言われ、

純「分かった。……うるか。」

純は、下の名前で呼んだのであった。すると、

うるか「もう一回言つて。」

純「うるか。」

うるか「もう一回！」

純「うるか。」

うるか「えへへっ。もう一回！」

純「うるか。はい、これでおしまい。」

そう言つて、純は武元の頬を撫でたのであった。しかし、

うるか「やだー！もう一回だつてばー！えへへっ。」

武元は、まだ催促していたのであった。

一方その様子を密かに見ていた後藤先生は、
後藤先生（まさか、あの2人がなあ……。見なかったことにしてやるか。）
ドキドキしながら、その様子を見ていたのであった。

27話

一ノ瀬学園硬式野球部宿舎

純「いやー、着いた着いた。」

吉田「ああ。いいホテルだな。」

野口「それな。」

純達一ノ瀬学園の野球部は、現在西宮のホテルに着いた。

純「明日だよな、抽選会って。」

吉田「ああ。そうだよ。」

純「そっか……。」

すると、

マネージャーB「買い出しに行くので、何人か付き合ってください。」

マネージャーがそう声を掛けたのであった。

部員A「OK。」

純「あ、俺も行く。」

マネージャーB「安達君はダメよ。」

純「なんでだよ？」

すると、吉田が純を窓に向けた。すると、

ギャルA「キヤーツ！純くーん！」

ギャルB「純ー！」

ギャルC「安達くーん！」

ホテルの外では、ギャル達が黄色い喚声を挙げていたのであった。

純「あはは・・・。」

吉田「去年もこうだったしな。」

野口「つたく、お前の顔に整形したら変わるかな・・・。」

純「お前ら・・・。」

吉田「まあともかく、俺らにとって、これが最後の夏だ。楽しもうぜ。」

純「そうだな。」

野口「ああ。」

とそんな事を言ったのであった。その時、

純「あつ。俺ちよつと電話するわ。」

と純が言い、スマホを持って立ち上がって、部屋を後にしたのであった。その際、
吉田「誰だろうな。」

野口「さあ。案外彼女だったりして。」

吉田「ああ、あり得るかも。あいつ、確か水泳部の武元とスゲー仲良いから。」

野口「ああ、確かに。まあ、安達と武元は同中だつて言うし。」

吉田「いいなあ。」

と言ったやりとりをしていたのであった。その頃西辺監督は、

西辺「ああ、去年もそうだったが、暫く桐須先生に会えない・・・。」

なんていう事を言っていたのであった。

一方成幸達は、みんなで集まって勉強をしていたのであった。

成幸「そういや、純はもう着いたかな・・・。」

古橋「そうだね。そう言えば明日って、トーナメントを決める抽選会だっけ？」

成幸「ああ、そうだよ。」

緒方「でも、暫くは会えないんですよね。」

成幸「まあ、勝ち進めばな。」

小美浪「しかし、後輩がああ安達と幼馴染なのが驚いたな。」

成幸「あはは。」

古橋「でも、ちよこつと寂しいね。そう思うよね、うるかちゃん……」

そう古橋が武元に声を掛けたが、

うるか「えー、そつかなー？全然ヨユーっしょ、こんくらい！」

と言っていたが、魂が抜けていたのであった。

古橋「なんか出てるウ!!!」

成幸「去年もこうだったじゃねーか!!戻れー!!武元ー!!」

うるか「じよ、冗談冗談……。この位で寂しがうるかちゃんじゃないってば！」

そう言ったのだが、数分後、

うるか「えへへっ。ねっ、純♡『ソウダナ』『ウルカハイイコダナ』」

危ない状態になっており、純の似顔絵を描いていたのであった。

成幸「辞めろー!!武元ー!!」

古橋「そうだよ、うるかちゃん!!若干踏み込んだじゃいけない領域に達しているよ!!あと地味に絵上手いね！」

うるか「ううう、寂しいよう……。死んじやうよう……。」

小美浪「おいおい、大丈夫かよ……」

すると、武元のスマホに着信が入り、純からであった。それを見た武元は、すぐにスマホを取ったのであった。

うるか「純!!」

純『おう、うるか。元気か?』

うるか「純!純!」

すると、武元は突然泣き出してしまったのであった。

純『ど、どうした!?何があったの!?!』

すると、スマホを取った古橋はスマホを中央に置いて、

古橋「安達君、うるかちゃん、安達君に会えないから寂しがつてるんだよ。」

純『そうなのか。でも去年もそうだったぞ。まあ、何でかは察しがつくが……。大

方、暫く会えねーからそうなっちゃったとか。』

古橋「そ、そう!鋭いね安達君!」

古橋(安達君って、野球以外の事は興味無さそうに見えるけど、うるかちゃん絡みだと鋭いな。)

すると、

成幸「純。組み合わせって、いつなの?」

純『おう、やっぱ成もいたか！組み合わせ抽選会は明日だぞ。』

成幸「そっか。頑張れよ。行けないけど、応援してるからな！」

純『ああ、ありがとう。』

すると、

純『成、ビデオ通話に切り替えても大丈夫か？うるかのスマホだけど。』

成幸「あ、ああ。武元もいいよな？」

うるか「う、うん！いいよ！」

そう言われたので、純はビデオ通話に切り替えた。そして、それぞれにこう言ったのであった。

純『まず成。この時期は受験生にとっては、一番大事な時期だ。キツイかもしれないけど、頑張れよ。だけど、時には誰かを頼る事も忘れんなよ。』

成幸「ああ、分かった。」

純『緒方と古橋も、成を信じて、自分を信じて、この夏を乗り切れよ。』

古橋「うん、ありがとうね。」

緒方「任せて下さい。」

すると、

成幸「純。お前に紹介したい人がいるんだが、いいか？」

純『ああ。いいよ。』

そう言われて、成幸は小美浪先輩にスマホ画面を見せた。

成幸「この人、小美浪先輩なんだけど、医学部志望で、ウチの学園OBなんだ。」

純『ああ。うるかから聞いた。どうも、小美浪先輩。知ってるかもしれないませんが、安達純です。』

小美浪『おう。知ってるぜ。去年大活躍だったからな。』

純『・・・あはは。そう言えば、医学部志望なんですよね。成はどんな人でも真つ直ぐに真剣に向き合ってくれる奴なので、あいつを信じて下さい。』

小美浪「ああ。分かってるよ。頼り甲斐のある後輩だからな。」

純『あはは。成、うるかに。』

成幸「おう。」

そう言つて、武元にスマホ画面を見せた。

純『うるか。お前の気持ち、よく分かる。けど、約束したよな。勉強、頑張るつて。だから、頑張れよ。それでも辛かったら、電話しな。いつでも聞いてやるから。だから、そんなにしよげるなよ。お前は笑つてるのが一番似合ってるからさ。だから、笑つて。』

と、武元にそう言ったのであった。すると、

うるか「えへへっ。うん、ありがとう、純。」

武元は、はにかんだのであった。

純『うん、よし!!? そんじや、またな。』

うるか「うん、甲子園、頑張つてね!!?」

純『ああ!!?』

そう言つて、純は電話を切つたのであった。その時武元は、

うるか「えへへっ。」

先程とは打つて変わつて、幸せオーラ全開であつた。

成幸「良かったな、武元。」

うるか「うん!!? えへへっ!!?」

その時、古橋はある疑問を武元に言つた。

古橋「そう言えば、安達君、うるかちゃんの事、『うるか』つて呼んでたね。前は『武

元』だったのに。」

成幸「言われてみればそうだな。」

緒方「何かあつたのですか?」

そう言い、武元を見たのであった。

うるか「えっ!!? う、うん。えーつと、この前の大会、純見に来てくれて、負けちゃつ

たあたしを励ましてくれて、そのついでにあたしが呼んでつて言つたんだ。」

成幸「へえ。」

古橋「そうだったんだ。」

古橋（うるかちゃん、積極的!!?）

緒方「そんな事があったのですね。」

小美浪「へえ。でも、甲子園で見た時の雰囲気と全然違うな。」

成幸「それ、昔からですよ。あいつ、野球になると、スイッチが入っちゃうので。」

小美浪「へえ。まあ、見た感じ優しそうだったしな。いい幼馴染持ったじゃん、後輩。」

成幸「いえ。」

小美浪「しかし、武元も案外積極的なんだなあ。」

うるか「ええ!!? いや、まあ。えへへっ。」

と言った話をしていたのであった。

そして、甲子園での抽選の結果、純達一ノ瀬学園は、大会5日目で、2回戦からの登場となったのであった。

28話

甲子園が始まった。純達一ノ瀬学園は、5日目の試合で2回戦からのスタートなので、それまでに調整をしていた。

その間甲子園では数々のドラマがあつたが、開幕してから3日目で、誰もが予想しなかつた事が起きたのであつた。

一ノ瀬学園硬式野球部宿舎

純「マジか……。選抜優勝校が、負けた……。？」

野口「ああ。スコアは13―10。結構派手な打ち合いだったな。」

純「ああ。てか相手校、選抜優勝校の投手陣をボコボコにしたな。」

吉田「ああ。中でも特に大暴れしたのが、この奥居紀明。5打数3安打2ホームー1盗塁5打点の活躍。」

野口「しかもヒット全てがライトに、センターに、レフトに持って行きやがって。絵に描いたような広角打法だな。」

吉田「それだけじゃねえ。50メートル5秒9の俊足と、遠投120メートルの強肩を生かした守備。典型的な5ツールプレイヤーだな。」

純「確かに。これで勝ち進んだら、彼は主役になるな。」

吉田「そうだな。しかし、前向きに捉えようと、選抜優勝校がこけたことは、俺達にとって都合が良くなったと言うことだ。まず俺達は初戦をとって行くぞ。」

純「ああ。」

野口「そうだな。」

それ以降も、順当勝ちもあり、番狂わせもありなど色んなドラマを呼び、そして、純達一ノ瀬学園の初戦を迎えたのであった。

実況『大会5日目、この第3試合から2回戦です！内外野スタンドは超満員！集めたのはこの人！昨年後一步で逃した全国制覇を狙う一ノ瀬学園のエースであり、高校No.1投手でもある、安達純！ここまで3回ですが、相手打線を圧倒しています！』

ズバン！！

実況『今日最速148キロ高めのストレートで今日4つ目の三振!』

解説『バッターから見ると相当伸び上がっているように感じるでしょうね。』

実況『それに加えて、変化球のキレも抜群!!まさに鬼に金棒ですね!!』

3回裏

実況『さあ一ノ瀬学園、二死ながらランナー1、3塁と一打先制のチャンス!打席には、』

ウグイス『3番ピッチャー安達君、ピッチャー安達君。』

実況『安達が打席に立ちます。』

解説『一ノ瀬の打線は、1度繋がると思まらない打線ですからね。ここで止めないと
中盤、終盤キツくなってきますよ。』

その3球目、

実況『打ったー!安達、センターに弾き返して、一ノ瀬学園1点先制!』

一方、成幸家

うるか「純ー!! ナイスバッティング!!」

成幸「はは。武元、興奮しすぎだよ。けど、確かにナイスバッティングだ。」

古橋「そうだねー。これで勢いに乗ったらしいね!」

古橋（うるかちゃん、相変わらず可愛い・・・。）

小美浪「これは大きいな。」

すると、

実況『4番の吉田も続いたー!! 一ノ瀬学園、この回2点目!!』

緒方「また点が入りました!」

成幸「ああ、これは嬉しい追加点だな。」

そしてその回は2点先制したのであった。

それ以降も、

ズバァン!!

実況『150キロで見逃し三振!! そして吼えた!! マンモス甲子園がどよめいています

!!』

成幸「スゲえ・・・。」

緒方「はい……。」

古橋「何か、凄味増したね、安達君。」

小美浪「去年も凄かったが、今年は更にレベルアップしてんな。」

うるか（純……／＼／＼）

その後も、

実況『吉田、またチャンスで打ったー！これで一ノ瀬学園、7回終わって6―0とリードを広げました!!』

そして、

実況『さあ、勝利まで後1人！安達、投げました!』

ズバン!!

純「シャー!!!」

実況『8―0！最後は自己最速タイの151キロで空振り三振!!最後の真っ直ぐが一番速かった!!この男はまだ余力充分です!!2回戦登場となった一ノ瀬学園、全国制覇への第一歩は、2安打完封、毎回の15奪三振!!しかも、15個中12個が真っ直ぐで三振を取るといふ圧巻のピッチング!!エース安達純、健在!!』

成幸「凄かったなあ……。」

古橋「うん。まだまだ余力を残してそうだったね……。」

緒方「それに、7回から雰囲気が変わって、また更に凄味が増しました・・・。」

小美浪「あれでまだ余力があるなんて・・・。スゲえな・・・。」

うるか（純・・・、カッコ良すぎ・・・／／／）

成幸「よし!!俺達も負けてられねーな!!気合い入れて勉強しようぜ!!」

古橋「そうだね!!負けてられないね!!」

緒方「はい!!安達さんに続いて、私達も頑張りましょう!!」

うるか「おっしやー!!気合い入れてくぞー!!」

小美浪「へっ!!安達が頑張ってるんだから、あたしが頑張んねー訳にはいかねーな!!」
そして、それぞれ皆が初戦の安達の活躍に刺激を受け、勉強を頑張ったのであった。

29話

一ノ瀬学園野球部宿舎

純「奥居の学校、2回戦も勝ったんだって。」

野口「ああ。8―2で勝ったよ。」

純「そつか……。えーっと、今日は2本ヒット打ったんだよな。」

野口「ああ。4打数2安打1二塁打1打点だよ。」

吉田「初戦に続いてよく打つな。」

野口「まあ、この打線は奥居だけじゃねーしな。他のメンツもよく打ってる。」

純「そのようだな。初戦でも13点取った打線だからな。しかし、初戦は10点取られたから、投手陣弱えーイメージあつたけど、2回戦は2点に抑えてるな。」

吉田「そのようだな。よく分からんな。」

野口「だな。」

そして、その話から数日後、一ノ瀬学園の3回戦が始まった。

実況『試合終了！一ノ瀬学園、打線爆発！17―1で圧勝しました！エース安達は今日はセンターでスタメンで、一度も投げていないながら今日先発の小暮、2年の佐藤のリレーで1点に抑え、ベスト8進出を果たしました！』

そして、主将の吉田が抽選をした結果、準々決勝の第2試合になった。それ以降も、ベスト8が決まり、そして、

純「おいおい、マジかよ……。」

野口「ああ、これは……。」

吉田「意外と早く当たったな。」

一ノ瀬学園の準々決勝の相手は、奥居のいる学校に決まったのであった。

その夜、一ノ瀬学園野球部宿舍

純「ふー、明日か……。ん？」

すると、純のスマホから着信が入り、相手は武元からであった。

純「うるかか。どったの？」

うるか『あ、純。今大丈夫？』

純「ああ、大丈夫だよ。」

うるか『そっか。ねえ、純。明日って、投げるんだよね？』

純「ああ、そうだよ。」

うるか『相手の奥居って選手、凄いね。』

純「ああ、2本もホームラン打ってるし、打率も残せて足も速い。キーマンとして見てるよ。」

うるか『そっか、頑張ってるね！』

純「ああ。お前も、最近勉強どうなの？」

うるか『うん、まあまあかな。成幸も丁寧に教えてくれるし。』

純「そっか・・・。」

うるか『あつ、この前さ、みんなと一緒に勉強してたんだけどさ、文乃っち、成幸のこと、「成幸君」って呼んでたんだよね。』

純「マジ!? あいつらそういう関係にまで発展したんだ。」

うるか『ううん。実はそうじゃなくて、姉弟ごっこをやってるらしいよ!』

純「姉弟ごっこ!?何じゃそりゃ!」

うるか『へへ。それで、あたしもリズりん、名前と呼んでって言ったなら、名前と呼んでくれたよー!』

純「へえ。良かったじゃん。」

純(てか、何で姉弟ごっこをするに至ったんだ・・・?)

純「ま、まあ、とにかく、元気でやってるようだな。」

うるか『うん!!純も、試合頑張ってるね!!』

純「ああ!!」

うるか『じゃ、おやすみ!!』

純「おやすみ。」

そう言って、電話を切ったのであった。

純(うるか、頑張ってたんだ・・・)

純「うっし!俺も・・・!」

そう言って、明日に向けて気合いを入れたのであった。

翌日、

実況『さあ、始まりました！準々決勝第2試合！安達と奥居の注目の対決！どちらに軍配が上がるか！』

そして、試合が始まった。一ノ瀬が先攻であり、初回は3者凡退に抑えられた。その裏、

実況『さあ、一ノ瀬学園のマウンドには、夏の予選含めて未だに失点が0！難攻不落の絶対的エース安達純がいます！先頭バッターを三振に抑え、2番をセカンドゴロに打ち取りました！そして・・・』

ウグイス『3番センター奥居君、センター奥居君。』

実況『さあ、注目の対決です！！最初の対決はどちらに軍配が上がるか！！注目の初球！！ズバアン！！』

実況『空振り！！まず初球は147キロの真っ直ぐからでした！！』

解説『安達君、いつも以上に気持ちが入ってますね！！』

実況『さあ、2球目！！』

ズバアン！！

実況『これも空振り！！また147キロの真っ直ぐです！！奥居、バットに当たりません

!!
』

解説『奥居君、まだタイミングが合ってませんね。』

実況『さあ、3球目!!』

チツ、ブワツ!!

実況『148キロ空振り三振!!最初の対決は、安達が真っ直ぐ3つで三振に打ち取り

ました!!』

奥居「くそー!!」

しかし、

純「風・・・?」

純は、正面から強風が来たように感じた。一方の野口も、

野口（なんつー鋭いスイングだ・・・。しかも、安達の真っ直ぐを初見で掠らせるな

んて・・・。）

奥居の実力に驚いていたのであった。

一方、成幸家

成幸「おおー!! ナイスボールだな!!」

古橋「うん!! 注目の奥居っていう選手をまずは打ち取ったし、最高の立ち上がりだね!!」

緒方「はい!! 相変わらず安達さんは凄いです!!」

しかし、

うるか「……」

武元は冷静に見ていた。

小美浪「どうした、武元?」

うるか「あ、はい。さっきの対決ですが、確かに三振でしたけど、なんか掠った気がするんですね。」

成幸「そうだったか?」

うるか「うん。だから、もしかしたら、この奥居って選手、想像以上に凄い選手かも……」

そう言って、武元はテレビを観ていたのであった。

純「おい野口！さっき奥居の打席で、俺の球掠った気したんだけど？」

野口「……何言つてんだよ！初見でお前の球を当てられる奴なんて、そーそーいねーよ！」

純「……そうか。」

野口「お前の球は最高なんだから、大丈夫だ!!」

そう言つて、野口はこの回打席が回るため、準備をしたのであった。その後、両者ノーヒットのまま、4回に入った。

一ノ瀬は、1番がヒットを打ち、2番が送り、一死二塁のチャンスとなり、ウグイス『3番ピッチャー安達君、ピッチャー安達君。』

安達が打席に入った。その3球目、カキーン!!

実況『右中間を破ったー!!セカンドランナーホームに還る!!打った安達は、送球が乱れる間に三塁に到達しました!!』

成幸家

成幸「おぉー!!流石純だ!!」

古橋「そうだねー!!」

緒方「フンス!!」

うるか「ナイスバッティング!!」

小美浪「スゲーな、安達・・・。」

そして、吉田の犠牲フライで純が還り、一ノ瀬学園は2点を先制したのであった。

その裏、

実況『さあ安達、1番2番を危なげなく打ち取り、迎えるのは』

ウグイス『3番センター奥居君、センター奥居君。』

実況『安達と奥居、2度目の対決です。最初の対決は空振り三振で安達に軍配が上が

りましたが、2打席目は!!その初球!!』

キーン!!

純「!」

審判「ファール!」

野口「何・・・!?!」

吉田「安達の真つ直ぐを・・・!?!」

成幸家

成幸「あ、当てた!!」

古橋「何で・・・!!」

緒方「凄いです・・・!!」

小美浪「当てただけだけど、当たったなー!」

うるか「いや、タイミングは遅れたけど、今のは確実に『打った』に入るよ。」

古橋「そうなの!?!」

うるか「うん。凄いよ、この選手・・・。」

2球目、

キーン!!

審判「ファール!」

野口（マジか!?!何で・・・!?!）

純「コイツ・・・!!」

その時、純を見た野口は、

野口（なるほど、そういうことか・・・。）

どうしてか理解したのであった。

成幸家

成幸「何で純の球が？」

うるか「純、呼吸がちよつと乱れてるんだよ。」

成幸「え？」

うるか「さつき走ったからね。」

成幸「あつ。」

うるか「1、2番は打ち取れても、彼は別つて事だね。」

野口（そーゆーことなら・・・）

2球外したり、守備の指示をしたりなどで、純のリズムを戻したのであった。

野口（甘えな!! お前が考えてるより、コイツは・・・バケモノなんだよ!!）

しかし、

キーン!!

審判「ファール!」

5球目の真つ直ぐも奥居は当てることが出来たのであった。

野口（オイオイ・・・、マジかよ・・・。こりやスゲーな。予定にはなかったが、しよーがねー。）

そう思った野口はあるボールのサインを出したのであった。

純「!」

野口（予定としてはなかったが、コイツは本物だ。コレで打ち取るぞ!!）

それを察した純は、野口のサインに頷き、

純（奥居・・・。このボール、打てるもんなら打ってみな!!）

投げたのであった。

奥居（んっ・・・!?真つ直ぐだ!）

奥居「・・・よし・・・!」

しかし、

ストーン

奥居（スプリット!?）

実況『三振!!奥居、2打席連続三振!!2打席目はスプリットで三振に打ち取りました

!!』

純「シャー!!」

実況『そして気迫の雄叫び!!』

成幸家

成幸「おおー!!ナイスボール!!」

古橋「最後の球、落ちたね!!」

緒方「はい、落ちました!!」

小美浪「奥居、完全に真っ直ぐ狙ってたな。」

うるか「けど、純にスプリットを投げさすなんて・・・。」

成幸「そう言えば、純がこのボールを使う回数って少なかったな。」

うるか「あのボールは肘に負担がかかるから、普段は全く投げないボールなんだけど、

投げるときは2、3球、多くても4、5球しか投げないんだ。それに投げるタイミングはいつも後半。こんなに早く投げさすなんて……。奥居って選手は本物だね。」

と、武元は冷静に試合を観ていたのであった。

その後も、一ノ瀬学園は追加点を入れ、純も相手を1安打に抑え、7回の表が終わって、3―0でリードしていたのであった。

ウグイス『3番センター奥居君、センター奥居君。』

実況『さあ、ここまで両者の対決は安達に軍配が上がっています!!3度目の対決は!!その初球!!』

ズバン!!

実況『今日最速の150キロの真っ直ぐで空振りを取りました!!』

その後も、変化球を織り交ぜたりして、カウントは2ボール2ストライク。

実況『5球目!!』

野口(よし、右バッターの外低めの真っ直ぐ!!このコースは今まで打たれたことねーんだ!!ましてや7回、安達の調子が上がってきた頃の真っ直ぐは打てねーぜ!!)

しかし、

カキーン!!

純「えっ!?!」

野口（はっ・・・!?）

吉田「何!？」

打球は右中間方向にグングン伸びていき、

実況『は、入ったー!!何と奥居紀明、安達からホームランを放ちました!!これで今大会3本目!!なんとということでしょう!!予選を含め、まだ1点も取られていない安達が、ホームランで初失点を喫しました!!これで3―1!!』

奥居「よっし!!」

成幸家

成幸「嘘、だろ・・・!?」

古橋「安達君が、ホームラン打たれた・・・?」

緒方「安達さんがホームランを打たれるなんて・・・!」

小美浪「マジかよ・・・!?」

うるか「あたしも驚いた!?まさか、調子が上がってる回にホームラン打たれるなんて・・・。しかも、今まで打たれたことがないコースを打たれるなんて・・・。」

古橋「そうなの!？」

うるか「うん。あのコースは、今まで1度もホームランはおろか、ヒットも打たれたことがないって、純が言ってた。」

古・緒「!?!」

成幸「それを初めて打たれたんだ……。純、大丈夫かな……。？」
成幸達がそれぞれの思いで、テレビ越しの純を観ていたのであった。

野口「タイムお願いします!!」

野口（マジかよ!?!球威、コース共に完璧だったのに……。!?ましてや調子が上がってきた回に……。大丈夫か……。?)

そして、内野陣が一齐にマウンドに集まった。

吉田（なんて声かけりやいいんだ……。!!）

その時、

純「やっべえな、あいつ。」

純がそう言ったのであった。

野口「安達……。？」

純「あいつマジヤベえな。あのコース、俺打たれた事ねーのに。あいつはあっさり対

応しやがった。それもホームランで……。上には上がいるんだな……。」「
そう言うと、

純「これで決心がついた!!俺、プロ行ったら、ピッチャー一本で行くわ!!」

純はそう言ったのであった。

野口「何だ、大丈夫そうじゃん。」

純「んだよ、落ち込んでんのかと思っただのかよ。確かにショックだけど、まだ負けて
ねーんだよ。後続、しっかり抑えようぜ。」

野口「ああ、そうだな!!」

吉田「よし!!抑えるぞ!!」

内野陣「!!おおっ!!」

そう言つて、それぞれの守備位置についた。

成幸家

古橋「大丈夫そうだね。」

成幸「ああ。切り替えたのかもな。」

うるか「頑張れ、純!!」

緒方「頑張つて下さい、安達さん!!」

小美浪「こっからだぜ!!」

そして、その後も純は後続を打ち取った。そして、3—1で迎えた最終回、

実況『さあ、残すところも9回の裏、打順は9番からですが、1人出塁すれば、奥居に打席が回ります!!』

しかし純は、9番、1番を三振に打ち取り、あと1人としたのであった。

実況『一ノ瀬学園、勝利まで後1人!安達、投げました!!』

打った打球は、三塁に行った。これでゲームセット、しかし、

実況『ああと!!一ノ瀬学園、サードの子がファンブルをしまいました!!』
ここで迎えるは、

ウグイス『3番センター奥居君、センター奥居君。』

観客「ニわーっ!!!」

実況『さあ!!4度目の対決!!安達が抑えるか!!それとも奥居がまた打つのか!!』

成幸家

成幸「ここで奥居か・・・!!」

古橋「もしここでホームランを打たれたら・・・。」

緒方「同点・・・!!」

成幸「同点とは言え、流れが一気に向こうに傾く！」

小美浪「最悪、歩かせるといふ手もあるんだがな・・・。」

しかし、

うるか「ううん。純はゼツタイ勝負するよ。そして、純が勝つ!!あたしは、純を信じる!!」

武元は、真っ直ぐな目でテレビ越しの純を見ており、成幸達もそれに見惚れてしまったのであった。

野口「ここは勝負しかねーよな。」

純「ああ。勝つぞ!!」

野口「おう!!」

そして、野口は元の位置に戻った。

その初球、

ズバァン!!

実況『151キロ空振り!!勝負です!!一ノ瀬バッテリー真つ向勝負を選択しました!!』

2球目、

実況『外真つ直ぐボール!!これも151キロ!!甲子園がどよめいています!!』

その後も、ファールなどが続き、カウント2ボール2ストライクとなつて、9球目、

実況『何と、これもファール!!この勝負、エースとスラッガーの意地とプライドのぶつかり合い!!18・44メートルの間には、見えない火花が散っております!!』

10球目、

実況『な、何と、またファール!!まだです!!まだ勝負はつきません!!』

11球目、

実況『ボール!!これでフルカウント!!まだ終わりません!!』

12球目、

実況『これもファール!!まだです!!まだ勝負はつきません!!この勝負、一体どのような

な決着を迎えるのか!!』

13球目、

実況『これもファールです!!』

すると、

奥居「へへ。」

純「ふつ。」

両者には笑みがこぼれていたのだった。

成幸家

成幸「今、純、笑った？」

古橋「うん。私も見えた。」

緒方「私もです。」

小美浪「奥居の方も笑ってるな。」

うるか「うん。純、楽しそう。今まで、純とまともに渡り合えたバッターは、ここ最近いなかったから。本当に楽しそう。」

成幸「そうだな・・・。」
うるか（純、頑張れ・・・!!!）

そして、14球目、

ズバァン!!

純「シャー!!!」

実況『三振!!最後は気迫のこもった自己最速、152キロの真っ直ぐで奥居を空振り三振に打ち取りました!!一ノ瀬学園、ベスト4進出!!』

審判「3―1で一ノ瀬学園!礼!」

「したーっ!!」

すると、

パチパチパチ

実況『観衆が立ち上がった!!観衆が立ち上がった甲子園!!両者の健闘を称える拍手を送っています!!』

その時、

奥居「ナイスボール!!」

奥居が、スツキリした顔で純に言ったのだ。

純「サンキュー!! ホームランはマジでびびったぞ!!」

奥居「へへ!! ゼッター優勝しろよ!!」

純「ああ!!」

そして、一ノ瀬学園が準決勝進出を決めたのであった。

一方成幸達は、

うるか「やったああああつ!!!!」

古橋「やったね、うるかちゃん!!」

うるか「うん!!」

緒方「やりましたね、成幸さん!!」

成幸「ああ!!」

小美浪「スゲー!! マジスゲー!!」

それぞれが興奮した口調で語っていたのであった。

30話

一ノ瀬学園野球部宿舎

野口「じゃ、今日はゆっくり休みな。」

純「ああ。そうさせて貰うわ。準決は投げねーけどな。」

野口「多分な。」

純「そんじゃ、お休み。」

吉田「おう。」

純の部屋

純「ふーっ。今日は久し振りに気合い入ったわ。・・・ん？」

すると、純のスマホから着信が入り、武元からであった。

純「うるか。」

うるか『あ、純。今日はお疲れ様。』

純「ああ、ありがとう。」

うるか『あの・・・、奥居って選手、凄かったね・・・。』

純「あ、観てたんだ、試合。」

うるか『うん、最後まで。』

純「そっか：。かっこわりートコ見せちまったな。ホームラン打たれちゃって・・・。」

うるか『う、ううん!! 寧ろ最後の雄叫び、カッコ良かったよ!!』

純「あ、ありがとう・・・。」

うるか『へへ。後、今日何個三振奪ったか、覚えてる?』

純「ああ、俺もインタビュー聞いて知ったんだけど、14個だったらしい。」

うるか『そうだよ。あたし、数えてたんだから。けど、それだけ集中してたんだね。』

純「そっか・・・。そうだな・・・。」

すると、

うるか『ねえ、純・・・。』

純「ん? どうした?」

うるか『今日の試合、純、楽しそうだったね。』
と武元は、純にそう言った。

純「ああ、まあ、俺とまともにやり合えたバッターなんていなかったから。ちよつと燃えちやつたよ。」

うるか『うん……。そんな姿も、カッコ良かったよ……。』

純「……。ありがと。」

うるか『次の準決、投げんの？』

純「いや、多分投げねーと思う。まだ分かんねーけど、試合も出ねーと思う。」

うるか『そつか……。でも、頑張つてね！』

純「ああ！ありがと！」

うるか『じゃ、またね。』

純「ああ、じゃな。」

そう言つて、電話を切つた。

純（うるか……。）

武元家

うるか（純・・・。ホントーにカッコ良かったな・・・。／／／）

武元は、ベッドで横になって、そう思っていた。

うるか（あたしもガンバロ!!）

武元は、改めてそう決意したのであった。

翌日

うるか父「おはよう、うるか。」

うるか母「おはよう、うるか。」

うるか「おはよう、パパ、ママ。」

そう言つて、武元は自分の席に座つて、朝食を食べた。そして、テレビをチラツと見ると、ちょうど朝のニュースでスポーツの話をやつていて、昨日の純の試合の話をしており、武元はその話を見入つて聞いていた。すると、

うるか母「うるか、昨日の純君、凄かったわね。」

うるか「えっ!？」

うるか母「ホームランで初失点だったけど、最後はそのバッターを三振に打ち取って、本当に凄かったわ。」

うるか「ソ、ソウダネ・・・。」
すると、

うるか父「俺の職場でも、昨日の試合、テレビ付けて観てたよ。純君も、遠い存在になっちゃったね・・・。」

そう言っていた。すると、

うるか母「何言ってるんのパパ、いつか婿としてウチに来るわよ。」

うるか「ブツ!!」

母親の爆弾発言に、つい牛乳を吹いてしまった。

うるか「ななな、何言ってるのママ!!」

うるか母「あら、まだそんな関係にもなっていないの？私はいつでも大歓迎よ♡」

うるか父「お、おいお前、確かに純君は良い子だが、それとコレとは話が別だ!!」

うるか母「あら、パパは純君の事嫌いななの？」

うるか父「い、いや、嫌いではないが・・・。」

うるか「も、もう、2人ともうつさい!!」

うるか母「あらあら、照れちゃってー。」

うるか「照れてない!!」

とまあ、朝からこんな話をしていたのであった。

一ノ瀬学園野球部宿舎

純「はよーっす。」

野口「おう！よく寝れたか？」

純「ああ、ぼっちしな。」

野口「そつか・・・。」

純「吉田、お前何読んでんだ？」

吉田「ああ、これ。」

そう言つて、一面を見せた。すると、昨日の試合の事が書かれていた。

吉田「最後のボール、自己最速だつてな。」

野口「言われてみれば、メツチャ速かつたわ。」

吉田「それな。」

しかし、

純「そうだったんだ……。全然気付かんかつたわ。」

当の本人は、そう言ったのであつた。

野口「確かに、お前は後ろの球速表示、見ねーもんな。」

純「余計な力入っちゃうから。」

吉田「まあとにかく、昨日は勝つたんだ。明日の準決勝は勝つて、最後の決勝も勝つ

て、笑つて終わらせるぞ。」

純「ああ。」

野口「当然。」

そう言つて、朝食を食べ、その後の調整練習をしたのであつた。

そして翌日、準決勝が始まつた。

実況『試合終了！一ノ瀬学園、7―0の快勝で昨年の準優勝に続いて決勝進出を果た

しました！エース安達は、最後までベンチでしたが、3人の投手リレーで相手を無失点に抑えました！』

成幸「ここまで来たら、ちゃんと最後まで見届けようぜ。」

古橋「そうだね。」

緒方「はい。」

うるか「うん。純、頑張れ・・・。」

小美浪「あたしも、そうするか。」

それぞれ、色んな思いで、準決勝を観ていたのであった。

31話

ミーティング

西辺「先発に安達。」

純「はい！」

西辺「スタメンは以上だ！明日も30度を超える。いつものことだが、当日は各自水分補給をしつかりするように。」

部員「「はいっ!!」」
すると、

西辺「最後に・・・、一つだけいいか。」

西辺監督がそう言った。

西辺「相手もここまで勝ち上がってきた相手だ。楽に勝たせてくれる相手じゃない。」
そう言うと、彼は自身の右の拳を胸に当てて、

西辺「だが、相手を必要以上に大きくしてしまったり、いつもと違うことをしよう」と

考えなくていい。敵は己の中にあり!!」

そう言った。

西辺「本来の力を出し切ることが、勝利の近道と知れ。去年の甲子園準優勝以来、一人でも脱落した者がいたか? いないだろ? 練習量だつて、去年引退した三年生に負けちやいない。どんな状況でも、最後まで諦めるな。自分達が流してきた汗に誇りを持って。お前達なら出来る。明日はベストを尽くそう!」

そう言い、選手一人一人にエールを送った。

純・吉・野（俺達にも、負けられない理由がある。この人を日本一の監督に……!!）
西辺「以上、解散!」

部員「二したあ!!」

そして、それぞれ部屋に向かったのであった。

純の部屋

純「ん?」

武元から着信が入り、スマホを取ったのであった。

純「うるか。」

うるか『あ、純。いよいよ明日だね。』

純「ああ、明日だ。」

うるか『うん。』

純「でも、ここまで来れたのは、マジでみんなのおかげだわ。」

うるか『うん、そうだね。』

純「だから、明日はメツチャ頑張るわ!!」

うるか『うん!!』

純「うるか!」

うるか『ん、何?』

すると、

純「ゼツテー獲るから、テツペン!」

そう、うるかに言ったのだ。

うるか『うん!!頑張れ!!』

純「ああ!!そんじゃ、またな。」

うるか『うん、お休み。』

そう言って、電話を切ったのであった。

純（しゃっ!! やってやる!!）

武元家

うるか（純・・・。）

その時うるかは、暫くスマホを胸に抱き締めていたのであった。

翌日

実況『さあー両校、勢いよくベンチを飛び出してきました!』

成幸家

成幸「いよいよだな!!」

古橋「そうだね!!」

緒方「はい!!」

うるか「純、頑張れ・・・!!」

小美浪「キンチョーしてきた・・・!!」

実況『1回の表、一ノ瀬学園の先発のマウンドに上がるのはもちろんこの人、不動のエースであり、高校No.1ピッチャー安達純。ここまでまだ失点が僅か1という抜群の安定感を誇る最強右腕。この決勝戦でどのようなピッチングを見せるか? いよいよプレイボール!』

審判「プレイ!」

そして純は、初球に真っ直ぐを投げた。

審判「ストライク!」

成幸家

成幸「始まった!!」

古橋「そうだね!!」

緒方「どんな試合になるでしょうか!!」

小美浪「さあな・・・。」

うるか(純・・・、頑張れ・・・!!)

そして、

ズバン!!

純「シャー!!」

実況『まずは148キロ真っ直ぐで空振り三振!!いきなり吼えました!!』

解説『今日は一段と気合いが入ってますね!!ここからでも気迫が伝わります!!』

成幸家

成幸 「よっしゃ!! ナイスボール!!」

古橋 「いきなり吼えたね!!」

緒方 「はい!!」

小美浪 「気合い入ってんな、テレビ越しでも気迫が伝わるぜ!!」

うるか (純・・・／／)

その後、2番を内野ゴロに打ち取り、

ズバァン!!

実況 『三振!! 安達、決勝戦の初回、真っ直ぐで2つの三振を奪う上々の立ち上がりを見せました!!』

成幸家

成幸 「よっしゃ!! まずは上々の立ち上がりだな!!」

古橋 「うん、そうだね!!」

緒方「フランス!!」

うるか「純・・・、ナイス立ち上がり!!」

小美浪「まずは三者凡退だな・・・!!」

その裏、一ノ瀬学園の攻撃も三者凡退に抑えられ、これ以降、両者の緊迫した投手戦が続いたのであった。

ズバアン!!

実況『三振!!安達、まだ3回ですが、既に4つめの三振を奪いました!!』

その裏も、

実況『こちらも、安達に負けず、三者凡退!!』

それから、

実況『三振!!安達、5回で初めてヒットを許しましたが、毎回の7つめの三振を奪い、この回を0に抑えました!!』

ククツ、

実況『三振!!一ノ瀬学園、相手のキレのあるカーブに全く手が打てません!!』

そのまま7回まで0行進が続いたのであった。

実況『さあ、ここまで両軍合わせてまだヒット4本。緊迫した投手戦が続いております!!均衡を破るのはどっちか!!』

成幸家

成幸 「これは凄い試合だなー。」

古橋 「そうだね、疲れてきちゃった……。」

緒方 「はい、そうですね……。」

小美浪 「武元は、大丈夫のようだな……。」

うるか 「大丈夫です。それに、純と比べたら、こんなのへっちゃらです!!」

小美浪 「そ、そうか……。」

古橋 (うるかちゃん、凄い……!!)

そして、

ズバァン!!

純 「シャー!!」

実況 『三振!!安達、まだ8回でありながら、既に13個目の三振!!そして、気迫の雄叫び!!気力体力共にまだ大丈夫です!!』

成幸家

成幸「……。」

古橋「成幸君？」

成幸「あ、ああ。何か、純が凄すぎて……。」

小美浪「そうだな……。益々凄味が増したみたいだな……。」

緒方「そうですね……。」

うるか（純……。頑張れ、あたしが付いてるよ……!!）

すると、8回の裏、

カキーン!!

快音が響いた先には、

実況『は、入ったー!!一ノ瀬学園、8回の裏、均衡を破るソロホームラン!!これで1―0となりました!!』

成幸家

成幸「うおー!!遂に均衡が破れたー!!」

古橋「うん!!凄いねー!!」

緒方「はい!!」

小美浪「あのバッター、ナイスバッティングだな・・・!!」

うるか「よっしゃー!!」

そして、その回は1点に終わり、9回の表、

実況『さあ、一ノ瀬学園、夏初優勝に向けて、今背番号1がマウンドに立ちました!!』

成幸家

うるか「純ー!!頑張れー!!」

成幸「この回だぞ!!」

古橋「安達君、頑張れー!!」

緒方「頑張って下さい!!」

小美浪「ここだぜー!!」

そして、

実況『三振!!まず先頭バッターを、151キロの真っ直ぐで三振を奪いました!!1アウト!!いやあ、まだ球威が衰えておりませんね!!』

解説『はい、まだまだ次のイニングも行けるのではないのでしょうか!!』

その次も、

実況『三振!!このバッターも、150キロの真っ直ぐで三振を奪いました!!2アウト!!』

成幸家

成幸「よっし!!あと1人だ!!」

古橋「緊張してきた・・・!!」

緒方「フンス!!」

小美浪「ヤベー、心臓がバクバクいつてるわ・・・!!」

うるか「純ー!!」

実況『まず初球!!』

ククツ、

実況『変化球が決まって、1ストライク!!』

成幸家

成幸「あと2球・・・!!」

古橋「……………」

緒方「……………」

小美浪「……………」

うるか「純…………!!」

実況『2球目!!』

キーン!!

実況『外の真っ直ぐ149キロファール!!今の真っ直ぐも、何か気迫が伝わりますね

!!
』

解説『そうですねー!! 見てるこつちもドキドキします!!』

成幸「後1球……。」

古橋「……。」

緒方「……。」

小美浪「……。」

うるか「純……!!」

実況『さあ、夏の初優勝まで、後1球!! 大歓声がこだましています!!』

そして、最後まで純は真っ直ぐを投げた。

ズバン!!

純「よっしやあああああーッ!!!!」

実況『空振り三振!! 昨年、後1歩で涙を呑んだ日本一、それを今年は雪辱を果たし、昨年ここに置いてきてしまった忘れ物を見事取って参りました!! 一ノ瀬学園、昨年の悔しさを晴らす、夢の全国制覇です!!!!』

純「よっしやあああああーッ!!!!」

吉田「やったー!!!」

野口「サイコーだー!!!」

それぞれ喜び合い、抱き合い、皆マウンドでもみくちやになったのであった。

成幸家

うるか「よっしやあああああーッ!!!!」

成幸「やったー!!!」

古橋「やったー!!!安達君スゴイスゴイ!!!!ね、りっちゃん!!!!」

緒方「はい!!!スゴイです文乃!!!!」

緒方と古橋は手を取り合った。

小美浪「ヤベー!!!マジスゲー!!!!」

審判「1-0で一ノ瀬学園!!礼っ!!」

「「ありがとうございます!!」

こうして、純達一ノ瀬学園は、全国制覇という最高の結果で終えたのであった。

3 2 話

某大学グラウンド

甲子園が終わった後、純達は今、某大学のグラウンドにいる。その理由は、来月に開催されるU-18の大会があるためである。そのため、現在その大学のグラウンドで練習していたのである。

純（まあ、当たり前だけど、スゲーメンツだよな・・・。）

投打問わず、色んなメンツが参加しており、一ノ瀬からは吉田と野口がいる。そして、甲子園でも純と壮絶な勝負をした奥居もいる。

純（奥居もいんだな・・・。）

そんなことを思いながら、練習をしていたのであった。

その間純の18歳の誕生日のパーティーを開き、奥居が音頭をするなどして、結束を深めたのであった。

サプライズの誕生日を終えた後、純はスマホを見てみると、武元から着信があった。純「うるかか。どったの？」

うるか「あ、純。誕生日おめでとう!!後、甲子園優勝おめでとう!!」

純「おう!ありがとう!」

うるか「まだ、帰れないの？」

純「まあな。大会があるから、まだ帰れねーし、学校にも行けねーよ。」

うるか「そっか・・・。」

すると、

純「そんな声を出すな、うるか。帰ったら、甲子園の話や、このU—18の世界大会の話もするし、いなかった分一緒にいるから。なっ。」

そう言つて、武元を慰めた。

うるか「うん・・・、ありがとう。」

純「うん、よし!!次の試合も頑張りますわ!!」

うるか「頑張つて!!後、野球部の優勝報告会、今年は純達がないから、純達が帰ってから全校集会でやるって、学園長が言つてたよ。」

純「マジで。あの人ならやるだろうな・・・。」

うるか「あはは、そうだね。」

純「はは。」

うるか「純。」

純「どうした？」

うるか「大会、頑張つてね。」

純「おう！」

うるか「それじゃ、またね。」

純「ああ、また。」

そう言つて、電話を切つたのであつた。

武元家

うるか「純……。」

電話を終えた後、武元はスマホを胸に抱き、目を閉じていた。

うるか（純も頑張つてる！あたしも……！）

そう思いながら、勉強を頑張つたのであつた。

某国ホテル

純達は、U—18の開催地である某国のホテルにいた。その時のルームメイトは、

純「お前か、奥居。」

奥居「おう、宜しく!!」

奥居であった。部屋が一緒になったので、その時は色んな面白い話をしていき、お互いを純、紀で呼び合うほど仲良くなっていたが、話を進めていくうちに、あの準々決勝のホームランを純は尋ねたのであった。

純「紀、お前に聞きたいことあんだけどき……。」

奥居「何?」

純「俺から打ったあのホームランだけどき、アレって、狙ってた?」

そう尋ねた。すると、

奥居「いや、確かにお前の真っ直ぐを狙ってたけど、外の真っ直ぐを狙ってたわけでは無かったな。」

そう言ったのであった。

純「え、どこ狙ってたの？」

奥居「インハイの真っ直ぐ。けど、外に来たから咄嗟に反応して打ったんだけど。」

純「マジかよ……。俺、あのコースはヒットもホームランも打たれたことも無かつたんだよ……。」

奥居「マジで!?!こりや貴重な一発だったな！」

純「ホントだよ。結構良い感じの真っ直ぐだったから。」

奥居「はは。」

その後も野球の話や、面白いこと、こういった練習をやってたなどといった話をしたのであった。

そして、日本の初戦が始まったが、その日の先発であった純は圧巻の投球をしたのであった。

実況『空振り三振!!安達、まだ6回ですが、これで毎回の二桁10個目!!カナダを圧倒しています!!』

一方の打線も、

実況『打ったー!!奥居、この日3本目のヒットは、タイムリー三塁打!!甲子園を沸かせた投打の2人のライバルが、躍動しています!!』

奥居が、大暴れしていた。

吉田「あの2人、ヤベえな・・・」

野口「ああ、今日安達のボール受けてるけど、甲子園が終わっても、まだ成長してやる。それとあの奥居だけど、やっぱレベルが違うぞ。」

2人の活躍を見ていた吉田と野口は、唯々呆然としていたのであった。

この試合は、最終的に6―0で勝ち、純は7回を投げて12奪三振無失点の好投であつた。

その後も、予選を危なげなく突破し、決勝リーグも勝ち進み、そして、アメリカとの決勝を迎えたのであった。

その決勝戦でも、純は圧巻の投球を見せ、7回まで三振16個奪う好投を見せ、一方の打線も、奥居がホームランを含む3安打の活躍を見せ、日本は世界大会を優勝したのであった。

33話

緒方家

洗面所の前で、緒方は自身の前髪を気にしていた。

緒方「フム……。前髪……。やはり少々伸びすぎてますかね……。」「
そうやってハサミを取り出し、

緒方「少しだけ整えて……。」「

前髪を切ろうとした。その時、

緒方父「リズたまりズたま！。パパ今日の仕事終わったよ！」

緒方の父親が突然乱入してしまい、

ザクッ

緒方「あ……。」

緒方父「お疲れ様のハグを……。」

前髪を切りすぎてしまったのである。

翌朝

うるか「おっはよー、文乃つち！」

古橋「あー。うるかちゃん、おはよう！」

うるか「いやー、今日も暑いねー。」

古橋「そうだねー。あ、後安達君、甲子園も凄かったけど、世界大会でも大活躍だったね！」

うるか「うん!!日本の世界大会初優勝に貢献したね!!」

古橋「そうだねー！」

その途中、緒方を見つけ、

うるか「あ、リズりん!おっはよー!」

古橋「おはよう!」

声を掛けたら、

う・古「あ．．．。」

緒方の前髪を見て固まってしまった。

緒方「文乃、うるかさん。おはようございます。」

うるか「どツ・・・、どしたんリズムりん、その前髪・・・!?!」

緒方「手が滑りました。」

古橋「りつちゃん、自分で切ってるの!?!ちゃんと美容室行こうよ・・・。」

緒方「変・・・でしょうか?」

その問いに、武元と古橋は必死に首を横に振り、

うるか「カワイイに決まってんじゃん!!」

古橋「うんうん!ちよつぱり若く見えるけど、似合ってるよりつつちゃん!」

緒方の前髪を褒めたのだが、

緒方「つまり・・・、幼く見えると?」

緒方のその問いに、

う・古「ギクツ!」

凶星だったのか、目を逸らしたのであった。

緒方「別に・・・、気にしていません。どうせすぐまた伸びますし、前だつてよく見えますし、合理的に考えてなんの問題も。」

うるか「ほえ・・・。」

古橋「もー、りっちゃんつてば、もう少し乙女としての自覚を……。」
と古橋がそう言ったが、

緒方「必要ありません。」

と返されてしまったのであつた。その時、

成幸「お、みんな！」

純「久しぶりー！」

成幸と純が来た。

うるか「おーつす、成幸！純、久しぶり！後、甲子園と世界大会優勝、おめでとー！」

古橋「おはよう唯我君！久しぶり、安達君！後、優勝おめでとー！」

成幸「おはよう。」

純「おはよう。後、ありがとう！」

うるか「一段と日に焼けたねー！」

古橋「ホントだねー！」

純「はは。」

成幸「ホントだよなー。あ、緒方もおは……よ？」

成幸は緒方にも挨拶しようとしたが、目を逸らされてしまったのであつた。成幸が近

づくつと、また目を逸らされ、

成幸「あ、あれ？緒方？」

声を掛けたが、全速力でダツシユして行ってしまったのであった。

成・純・古・う「二「えっ!」「三」

うるか「リズりん!？」

成幸「緒方さーん!!!」

純「何だ!？」

それには、

成幸「ど．．．どうしたんだ緒方の奴．．．」

純「俺が知るかよ．．．」

うるか「あれえー？」

この3人は疑問も思ったが、

古橋（前言撤回．．．。乙女だなあ、りっちゃん．．．。きゅーん♡）

古橋だけは、緒方にキユンとしていたのであった。

学校、全校集会

学園長「えー……。この度の全国高等学校野球選手権大会において、見事優勝を果たしてくれました野球部に全員……、盛大な拍手を。」

その日の全校集会で、学園長が、野球部の優勝報告会を行った。しかし、最後には、学園長「そして、その後に行われた、U—18世界大会で、見事な活躍で金メダルに大きく貢献した、安達純君と、吉田良平君、野口健太郎君にまた盛大な拍手を。」

そう言い、

純「どーも……。」

吉田「こりやスゲー……。」

野口「ああ……。」

3人は少し戸惑ったのであった。その時、

成幸「……。」

古橋「凄い……。」

緒方「……。」

うるか（はう……、純……／＼／＼）

それぞれ色んな思いで、純を見ていたのであった。

その後、3—D教室

うるか（スゴイ・・・、雑誌に特集ページが・・・。）

武元は、高校野球の雑誌を見ていた。すると、

男子生徒A「何見てんだ？」

男子生徒B「安達の動画。」

男子生徒A「マジ!?見せて！」

そんな声があった。

うるか（去年よりも盛り上がってる・・・。）

そう思い、ページをめくると、練習姿であつたり、試合での雄叫びの姿など、色んな一面があつた。

うるか（はう・・・、カッコ良すぎだよ・・・／／／／）

そう思い、次のページをめくると、

雑誌『気になる理想の女性は!?!』

と書かれた記事があり、その記事を見ると、

雑誌「『元気で明るくて、泳ぎが上手い女子がタイプ』と答えてくれた安達選手。全国の水泳女子諸君。君も立候補してみては!？」

と、そう書かれていたのであった。すると、

女子生徒A「へーっ♡」

女子生徒B「私、今日から泳ぎの練習しようかなー!」

そんなことを話していた。その時、

純「悪い、うるか!おくれ・・・」

純が武元の教室に来たのだが、

生徒「『安達だー!!』」

純「な、何だっ!？」

生徒が一気に純に集まったのだ。

男子生徒C「甲子園優勝、世界大会優勝なんてスゴイよ!!」

女子生徒C「サイン下さい!」

純「えっ、ちょ・・・。あ、あはは、ありがと・・・。」

そう言つて、純は生徒達を対応していたのであった。すると、

川瀬「去年より一気に人気が爆発したな・・・。」

海原「そうだね。あれだけの活躍をしたら・・・。」

うるか「海っち、川っち……。」

海原と川瀬が武元の傍に来て、そう言った。

うるか「うん、去年より良い顔してるかも。去年は、サインなどを求められても、終始複雑な顔してたから……。」

うるか（それに、同中で、好きな人がこうして人気になるのは、嬉しいな……。）

柔らかい顔で、純を見ていると、

海原「乙女ですなー。」

川瀬「全くですなー。」

と海原と川瀬に言われ、

うるか「う、うっさいなー！」

武元は顔を真っ赤にして言ったのであった。

図書室へ行く道中

純「疲れた……。」

うるか「お疲れ……。大変だったね……。」

純「マジ去年よりスゴかったわ……。お前もゼツテーこうなるぞ。」

うるか「そうかも……。」

純「ああ。ゼツテーこうなる！国体が終わったらゼツテーな！まあ、俺ら野球部も出るけど……。」

うるか「あはは。けど、去年と比べて、良い顔だったね。」

純「まあ、去年は素直に喜べなかったからな……。準優勝だったし……。」

うるか「そうだね……。」

純「まあ、今はホツとしてる。次はプロの世界だ……。」

うるか「うん、そうだね!!」

純「その前に、国体だけだな。」

うるか「そうだね!!お互いガンバロ!!」

純「おう！」

そう言つて、グータッチをしたのであった。そして、成幸らと合流し、図書室で勉強を始めた。しかし、

図書室

成幸「いいか緒方、古文の文法は少し特殊だ。舞台そのものが昔の日本で、常識や慣習もまったく違うから、理屈ではなく、割り切つて丸暗記が必要な部分も……」

成幸や純、うるかと古橋は、緒方のある一点に注目していた。

成幸「……な、なあ、緒方。ひとつ聞いてもいいかな……?」

緒方「はい、なんででしょう?」

成幸「それ……」

成幸は、緒方が被っている被り物に注目したが、

緒方「あ、お気になさらず。」

緒方は、そう言ったのであつた。

成幸「……うん……」

純（いや、マジで気になるから……）

古橋「りつちゃん、そんな被り物どこから……?」

古橋が尤もな事を言つた。一方、

うるか「ちよつと欲しい……」

純「お前、マジで……」

緒方が被っている被り物を取った。すると、

緒方「!? あーっ!! ダメです文乃!! かか返して下さい!!」

緒方は必死に被り物を取り戻そうとしていたのであった。

古橋（もー、大丈夫だってばりっちゃん! 唯我君ならきつとちゃんとフォローしてくれるから……。）

すると、

成幸「お、緒方。」

成幸が声を掛けると、緒方は前髪を手で隠すような格好になり、その後、

緒方「な……、成幸さん。」

手を取って、成幸を見た。その際、

純「なあ、うるか。古橋。」

うるか「何、純?」

古橋「どうしたの、安達君?」

純「緒方、前髪切った?」

うるか「うん、そうだよ。気付いたんだ。」

純「まあ、以前見た時より短い気がしたから。」

古橋「流石だね、安達君。」

純は、緒方の変化に気付いた。しかし、

成幸「な、なんだ。いつも通り、普通に元氣そうじゃないか。良かった。」

成幸は、緒方の変化に気付かなかったのであった。これには、

うるか「……。」

古橋「……。」

純「お前、マジで……。」

他の3人はドン引きして、緒方は、

緒方「……えっ？」

成幸「……ん？」

緒方「いつも……、通り？」

成幸「えっ、うん……、えっ？」

シヨツクを受けていた。これには、

うるか「成幸マジ信じらんないツ!!」

成幸「えっ!?!」

純「お前、今のは流石にフォロー出来ねーよ……。」

古橋「最低ツ!!最低ツ!!最低だよ成幸君!安達君は気付いたのに……!!」

成幸「ええええっ!?!なんで俺いきなり糾弾されてんの!?!」

武元と古橋に糾弾され、純にも呆れさせてしまったのであつた。その為、もう一度見てもらうことにしたのであるが、

成幸「え……、どこかが変わつてゐる？ えつと……。あつ、リボン変えた!?!」

うるか「……。」

純「お前……。」

古橋（そこじゃねーよ！だよ。りつちゃんゴメン……。ここまでとは……。）
更に呆れさせてしまったのであつた。

帰り、

うるか「ねえ、純。」

純「何？」

うるか「成幸のあれ、どう思う？」

純「どうって、まあ、あいつのあれは昔からだからなあ……。確か、妹の水希ちゃ

んにも言われてるらしい。」

うるか「そ、そーなんだ……。」

純「でも、俺より一緒にいた時間が長かったんだから、流石に気付くと思っただが……。」

うるか「それだよねー!!」

純「はは。」

うるか「じゃあ、あたしの髪型、気付いてる?」

そう言っつて、武元は髪をいじり、顔を赤くしながら歩いて純に近付いた。

純「うん。前に可愛いって言った髪型にしてるんだな。やっぱりその髪型、似合ってるし、可愛いな。」

すると、

うるか「ホント!? えへへ、もう一回!!」

以前と同じように、武元は催促した。

純「可愛いよ。」

そう言っつて、武元の頭と頬を優しく撫でながら歩いた。その最中も、

うるか「もう一回!!」

催促し続けていて、武元の家の前まで続き、このやり取りは、武元の母親が偶然見て

おり、その後、武元をからかったのであった。

ちなみに緒方は、成幸と一緒に帰っており、暫く不機嫌であったが、成幸のとある一言で機嫌が良くなったのは秘密である。

34話

滝沢「安達。唯我……。このままだと、お前ら体育赤点だぞ……。」

この一言に、純と成幸は固まった。

成幸「えええ!? そ、それは推薦的にマズイっていうか……!!」

純「なんで俺は赤点なんすか!？」

滝沢「安達は全体的に文句はないよ。唯我はアレだが……。唯我は特に水泳があまりにもなあ……。安達は水泳の授業に出てないし……。」

純「俺の場合は、大会の運営に文句言つて下さいよ!!」

滝沢「そう言われてもなあ……。」

成幸「た、滝沢先生、そこをなんとか!!」

滝沢「うーん……。じゃまア、2人とも補習だな。」

純「え、俺国体の練習が……。」

滝沢「体育赤点でも良いのか？」

純「……分かりました。」

そして、2人の補習が決まったのであった。

室内プール

後輩女子A「武元せんぱいつ。そろそろ国体ですねっ！」

後輩女子B「武元先輩ならマジでいけますよ！絶対優勝できるって信じてますから

！」

池田「が、頑張ってください・・・！」

うるか「おうっ!!まかせとけっ!!」

その時、

うるか「ん?」

端の1レーンで何かに気付いた武元は、そこに目をやると、

滝沢「ホレしっかり足動かす!1・2!1・2!」

純「成、頑張れー!」

バタ足をしている成幸とそれを応援している純、そして、滝沢先生がいた。

うるか「うえええ!?純!?成幸!?なんで!」

純「よう、うるか！」

滝沢「おう、お前から来たか。悪いが端の1レーン、補習で使わせてもらうぞ。お前らは気にせず部活やつとけ。」

成幸（なんたる辱め……！さっさと終わらせて一刻も早く帰りたい……。）
すると、

滝沢「よし、じゃあ唯我。ビート板ありでいいから、25mなんとか泳ぎ切ってみろ。それで合格にするから。」

そう言った滝沢先生。

成幸「は、はいっ！」

しかし、

滝沢「これは……、なんとというか、筋金入りだな……。」

成幸は沈んでしまった。

純「滝沢先生、成のこれは昔からっすよ。」

うるか「ギャーツ、成幸ーッ!!!」

純「滝沢先生、このままで俺の補習がなくなっちゃうんすけど。」

滝沢「おっと、そうだな。悪いが誰か安達の泳ぎを見てやってくれないか？」
すると、

うるか「!」

水泳部のみんなが揃って武元を見た。

海原「ギロンの余地はないよねー。」

うるか「え!?!ええ!?!」

そして、武元は準備をしたのであった。

うるか（も、もう……。みんなして……。）

そして、武元はプールに入った。

うるか「あ……。じゃあ……。よろしく……。」

純「おう、よろしくな。」

そう言つて、純は武元の頭を撫でた。

うるか（はう……。嬉しいけど恥ずかしいよう……。／／／）

純「はは。顔真っ赤!!」

うるか「も、もー!!」

その様子を見ていた周りは、

海原（この2人……。）

川瀬（既に付き合つてるみたいだな……。てかもう付き合えよ!）

池田（武元先輩のあんな姿、初めて見る……。）

成幸（武元でもあんな表情するんだな・・・。）

滝沢（武元・・・。）

それぞれ色んな反応をしていたのであった。

純「そんじゃあ、泳ぐわ。」

うるか「う、うん!!」

そして、純は25mを危なげなく泳いだ。

純「うし！おしまいつと！」

うるか「お疲れ!!」

純「おう！」

滝沢「安達はOKだな。うーし、それじゃ唯我にも見てくれないか？」

うるか「はい！」

その時、

桐須「滝沢先生。」

滝沢「桐須先生・・・。」

桐須先生がプールに来て、滝沢先生を呼んだのであった。

桐須「先日お伝えした申請書・・・、期日は今日までですが、提出をお忘れではありませんか？」

滝沢「あ！いつけね忘れてた！あつぶねー！」

桐須「早急。では速やかに……」

すると、

滝沢「ごめん……、あと頼めるかな、桐須先生！」

桐須「え！」

滝沢「ダツシユで書類出して来るから!!」

桐須「えええっ!?!」

桐須先生に全てを任せて、書類提出に向かったのであった。

桐須「……私、担当は世界史なんです……」

しかし、やむを得ず、水着に着替えた桐須先生であった。

桐須（……何故私がこんなことを……）

と、威圧感むき出しのオーラを放ったのであった。

川瀬「うわ怖ッ！」

海原「威圧感だだ洩れてますなあ……」

うるか「じゃ成幸、お手本見せるから、あたしと同じようにやってみて。」

成幸「お、おう！」

純（あ、でもコイツ……）

うるか「まず、良い感じに息継ぎしながらドンツつと行って・・・、ギユワつとターンして、ビヤーツと戻ってくるみたいな！うんまあ、だいたいそんなカンジ!!あれ？」

成幸「ブボバボベゲ（ムチャぬかすなアホーツ!!）」

純（ヤツパこうなった・・・。）

川瀬（忘れてたぜ・・・。うるか、こいつ・・・、）

純・川（教えるのド下手なんだ・・・!）

海原（天才でバカだからなあ・・・。）

その後も、

うるか「もー、沈むのやめなってばー。」

成幸「好きで沈んどるんちゃうわっ!!」

うるか「じゃ、もう一回いくよ?こういつて・・・、こうっ!!」

成幸「いや・・・、だからもう少し具体的なアドバイスを・・・ッ。」

全く上手くいかなかったため、

純「・・・桐須先生。」

桐須「・・・はあ、そうね。」

そう言つて、上着を脱いで水着姿になり、プールに入ったのであった。

成幸「!」

桐須「……らちがあかないわね。」

そう言つて、成幸の手を取つた。

うるか「おっ！」

成幸「えええっ!？」

すると、

桐須「畏怖。水が怖い？唯我君。」

桐須先生が、成幸に聞いた。

成幸「あ……いや……、はい少し……。」

それを聞いた桐須先生は、

桐須「泳げないもつとも大きな要因のひとつは、恐怖といわれているわね。呼吸のできない恐怖、足のつかない恐怖、沈んでしまう恐怖。様々な恐怖が折り重なって発生するが故に、余計に体が固まつてしまう。それでいいの。まずは自分が何に怖がつているのか受け入れた上で、私に集中しなさい。私が手をとつている限り沈みはしない。いつだつて足もつける。呼吸もできる。そのまま……、ゆっくり足を動かしてみて。」

と、成幸に丁寧な指導したのであつた。

成幸「は、はい……。」

そう言つて、成幸はバタ足を始めた。

成幸（ううう・・・、これってまるで子供じゃないか・・・。それにこんなので簡単に泳げるようになったら苦労は・・・。）

その時、

桐須「目を開いてちゃんと見てみなさい、唯我君。」

桐須先生にそう言われて、目を開けてみると、先程いた場所より5 m程進んでいた。

成幸「ぬおおおっ!!？」

うるか「すすすスゴイじゃん！5 mは進んでるよ成幸!!」

純「ホントだよ!!スゲー!!」

桐須「おめでとう。まだたったの20 mね。」

そう言っつて、

桐須「武元さん、あとは代わってもらえるかしら？」

うるか「はっ、はい！」

そう言っつて、後は武元に任せて、上がったのであった。

シャワー室

うるか（桐須先生、か。たしかりズりんや文乃つちの、元キョーイク係だっけ……。）

回想

古橋『とても……、冷たい人です。』

回想終了

すると、

桐須「失礼。失礼。」

うるか「つてうわっ！きつ、桐須先生!?!」

隣に桐須先生がいたのであった。

桐須「失礼……、シャンプーを貸してもらえないかしら。」
うるか「あ……、どうぞ。」

桐須「どうも。」

その時、武元は桐須先生の体を見て、
うるか（細いのに……、すごくバランスよく引きしまったしなやかな筋肉……。）
と思い、見つめていた。

桐須「何か？」

うるか「あつ、いえっ……。」

そう言つて、体を洗うのを再開した。

うるか「先生つてもしかして、何かスポーツやってました？それもけっこうガチめに……。」

桐須「……ええ。昔少しね。」

うるか「あ、あはは。どーりで教えるのうまいわけですねー！なるほどガツテン！すると、

うるか「あつ……、大会なんかにも、出たりしたんですかー？」

と質問すると、

桐須「そうね、何度かは。」

そう返したのであった。

うるか「やっぱ先生って、クールっぽいですし……、あんまキンチョーとかしなかったカンジですか？」

桐須「緊張、しているの？」

その質問に武元は、

うるか「最近……、あんまり眠れないってゆーか……、」

回想

後輩女子A『武元せんぱいならマジでいけますよ！』

後輩女子B『絶対優勝できるって信じてますから！』

池田『が、頑張ってください……！』

回想終了

うるか「次の大会、絶対に勝ちたい。勝たなきゃ、あたしみんなに・・・ッ。」

回想

川瀬 『負けんなよーっ!!』

海原 『行ける行ける!』

回想終了

うるか「平常心平常心って・・・、いつも自分に言い聞かせてはいるんですけど・・・、
どうも・・・。」

すると、

桐須「くだらないわね。」

うるか「!!」

とバツサリと言った。

うるか（うええ!?! 思った以上にばつさりじゃん：：!! やっぱ冷たい人ってホント：：。）
と思った。

桐須「皆無。正念場で全くの平常心でいられる選手なんて、そういないわ。」

うるか「えっ!?!」

桐須「無理に平常心でいようなんて、くだらないことを考えるのはやめなさい。緊張感、周囲の期待、結果へのプレッシャー、全てを受け入れて楽しんでしまえばいいわ。むしろそういう時にこそ、高いパフォーマンスは引き出せるものよ。あなたと特に仲が良
い安達君も、恐らくそうなんじゃないかしら？」

うるか「あつ・・・。」

すると、武元は、過去に純と話していた時のことを思い出していた。

回想

うるか『前から思ったけどさ、純ってさー、スゴイ気迫で投げてるし、よく吼えてるから、メンタル強そーだよねー。』

純「俺？イヤイヤ、俺メツチャ脆いよ。』

うるか『えっ!?ウソだあー。』

純『マジマジ。俺、登板の日は毎試合胃が痛くなるから・・・。』

うるか『マジ!?』

純『ああ。だから酷いときは胃薬飲まねーとダメだったときもあるんだよ。』

うるか『へえ、意外。』

純『でも、背負えるもんは、逆に背負って行ったられて思いながら投げてる。』

うるか『へえ。』

純『それで自身の力が出せるのなら、まあそれの方が俺にとって良いのであれば、そうしようって決めたから・・・。』

うるか『そっか・・・。なんか、純らしくて良いね!!』

純『はは。』

回想終了

うるか（たしかに・・・、純もそのようなことを言ってた・・・。）

桐須「大人になってしまえば、そんな大舞台には、そうそう巡り合えない。そこに立てるのは、才能ある者の特権なのだから、しっかりとみしめていらつしやい。」

そう言つて、シャワー室を後にしたのであつた。

その帰り

うるか「ねえ、純。」

純「何、うるか？」

うるか「桐須先生つて、良い人だね。」

純「・・・なんだ突然。」

うるか「実はさ・・・」

そう言つて、シャワー室での出来事を話した。

純「へえ。桐須先生が・・・。」

うるか「うん。だから、あたしも国体楽しんでみようと思うんだ。」

純「そっか。まあ、俺はみんなとやれる最後の大会だし、お前同様、思い切って楽しむことにするか！」

うるか「えへへ!!お互い楽しもうね!!」

純「ああ!!」

そう言つて、グータッチをしたのであった。

そして国体では、武元は女子400m自由形を圧倒的なタイムで優勝を、純達野球部も、国体制覇したのだが、中でも純の投打に渡る活躍が目立った優勝であった。

35話

体育館

学園長「この度の全国体育大会水泳競技大会において、見事圧倒的なタイムで女子400m自由形優勝を果たした武元うるかさんと、国民体育大会高等学校野球競技硬式部において、夏の甲子園に続いて、見事優勝を果たした硬式野球部で特に圧倒的な活躍を見せてくれた安達純君に盛大な拍手を。」

純「はは、どーも……。」

うるか「やつ、どもども……。」

純「お前メツチャ緊張してんじやん。」

うるか「えへへっ。」

その時、

小林「やつぱハンパないなー、あいつら……。」

成幸「そうだな……。もう遠い存在みたいな感じだ……。」

と小林と成幸がそう言った。

放課後、図書室へ行く道中

うるか「うへえー．．．。」

純「はは、お疲れ。」

うるか「今日は色んなトコで捕まるよー。」

純「だから言つたろ、苦労するつて。」

うるか「そうだったねー。学園長にも呼び出されてもークタクタつすわー。」

純「？学園長からの呼び出して．．．、何かあつたのか？」

うるか「別にー？水泳成績はもうモーシブンないから、後はベンキョー頑張れつて
「さ。」

純「そつか．．．。」

うるか「だからさ、こつから英語を本腰入れて頑張るから、成幸にしごいてもらおう
と思うんだ！だから、純もサポート宜しくね！」

純「ああ、分かった。」

うるか「うん！」

そう言つて、図書室に向かつて行つた。その時、

海・川「……。」

その様子を後ろから見ていた海原と川瀬は、先程の学園長での武元の話进行い出して
いた。

数時間前、学園長室

川瀬「おい、やめとけつて智波。恥ずかしーな。」

海原「へっへっへー。だつて学園長に呼び出しなんて気になるじゃーん。」
しかし、

学園長「まずは大会優勝おめでとう、武元うるか君。」
うるか「あつ、はい！おかげさまです！」

川瀬も気になるのか、やっぱり聞いてしまうのだった。

海原「うん……。あゆ子って、そーゆートコあるよね。」

川瀬「う……。うるさいな！」

すると、

学園長「英語の成績、少しずつ伸びているようだね。」

と言う声が聞こえた。

うるか「あ、はい。なりゆ……。唯我君に教えてもらい、じ……。安達君にサポートしてもらってるおかげで、前よりはそれなりに……。えへへ。」

学園長「……。武元君。」

うるか「？」

学園長「もしその機会があったら、海外留学する意思はあるかね？」

海・川「……。ッ。」

盗み聞きしていた海原と川瀬はその提案に驚いていた。

うるか「え？」

もちろん、提案された武元も驚いていた。

滝沢「武元、オズウェイ・ヨーギイ大学は知ってるか？」

うるか「ええつと確か、オーストラリアの水泳でめっちゃ有名な名門……。」

学園長「そこは、君の志望する音羽大学との交換留学制度を実施している。滝沢先

生が言うには、大会であれ程の成績を残した君ならば、是非向こうの大学で才能を伸ばすべきだと。」

うるか「あたしが、海外に留学？」

学園長「しかし：：、しばらく向こうで過ごすことになる以上、英語力は不可欠。入試の英語で8割のボーダーを越えてもらわねばならんが：：、どうするかね？」

一方、それを聞いている海原と川瀬は、

海原（い、いやいや：：、そんな今ここでほいつと決められるわけないじゃん：：！）

川瀬（だ、だよな：：。）

そう思っていた。しかし武元は、

うるか「やります！」

と言った。これには聞いていた海原と川瀬は驚いた。すると、

うるか「以前：：ある人に言ったんです。『やれること全部やってから泣いてやる』って。：：だから、どこへだって行きます！背負えるもん全部背負って：：、泳げるレーンがある限り!!」

と武元は真っ直ぐな目でそう言った。

滝沢「武元：：。」

うるか「・・・あ、でも結局あれですよね。英語勉強しなきゃって状況は、今までと変わらないわけですよね？」

学園長「ウム？」

うるか「だったら、留学を目指してる件、唯我君と安達君、特に安達君には内緒にしておいてもらえませんか。」

学・滝「？」

うるか「・・・ただのわがままです。でも・・・できれば、残された高校生活、最後の最後まで今まで通りじ・・・安達君にサポート役してもらえたらって。」

そう言った。それを見た滝沢先生は、

滝沢（武元・・・やはりお前は、安達のこと・・・。）

そう思っていたのであった。

そして今、

純と武元の後ろ姿を見ていた2人は、

川瀬「あいつ・・・、わかってんのかな。」

海原「百も承知でしょ。うるかだつてバカだけど、馬鹿じゃないもん。・・・皮肉だよね、うるかが頑張れば頑張るほど、安達君との距離が遠ざかつていくなんて。」

川瀬「でもそれは、逆も当てはまるよな・・・。」

海原「うん・・・。2人とも、本当は両思いなのにね・・・。」
そう言っていたのであつた。

36話

図書室

この日も、成幸と古橋、緒方、武元は勉強をしており、純はサポート役をやっているのだが、

純「……。」

この日の純は、左手で頬杖を突きながら遠い目で空を見ていたのであった。その様子を見ていた武元は、

うるか「純。」

純に声を掛けた。

純「あ、何？」

うるか「『何?』じゃないよ。空見てぼーっとして、どうしたの?」

成幸「確かに。お前いつも大人しいけど、いつに増してぼーっとしてんな。」

純「いや、なんでもねー。」

成幸「……そうか。」

純「ああ。それよりさ、うるか……。」

そう言つて武元に近付いたが、肩に触れた瞬間、

ひゅぱっ

純・成・緒・古「「!?」「」」

武元が顔を背け、離れたのであつた。

純「なんだ、どうしたうるか？」

うるか「い、いや別にツ!？」

しかし、

古橋「……おや？」

この様子を見た古橋は、ある疑問を感じたのであつた。

翌日、ファミレス

うるか「……えっ!? 『お友達』？」

古橋「ほら……、前にラーメン屋で相談してくれた。」

うるか「あ、ああ……。」

古橋「そのお友達、好きな人とうまくいってるのかな？」

うるか「うんまあ……、その……。」

すると、武元はある質問をした。

うるか「文乃つちはさ……、エンキヨリ恋愛ってどう思う……？」

古橋（？急になんの話だろう？）

そう思った古橋だったが、

古橋「まあ今の時代、別に普通なんじゃないかなあ？会えない時間が2人の絆を強く

するって言うしね。」

そう述べたのであった。

うるか「そつ、そーゆーものかなつ？」

古橋（わたしもよくしらんけど。）

そういつた経験が無い古橋は、そう思っていたのであった。

古橋「まあ、さすがに海外だとしんどいかもだけど……。」

そう言ったら、

うるか「だよね。」

武元が死んだ目をしたのであった。その様子に、

古橋「海外!?うるかちゃん海外に行く予定あるの!!?」
そう尋ねると、

うるか「ち、ちがつ!?友達!!友達がね!!」

と武元はそう言ったのであった。さらに武元は、

うるか「な、なんでもその・・・、最近部活の大会で優勝したとか何とかで、その男子も、甲子園優勝して、世界大会と国体も優勝したんだけど、その友達は部活の活躍で海外リユースにチョーセンすることにするかもとかなんとか?」

そう続けたのだが、

古橋(どう考えてもうるかちゃんじゃない!!てか甲子園と世界大会と国体って安達君のことだし、隠す気あるの!?!てか海外留学ウウ!?!言えよ!!だようるかちゃん!)
完全にバレバレであった。

すると、

うるか「・・・みんなに言うのはね、結果出してからにしよっかなって。」

そう武元は言った。

古橋「え・・・。」

うるか「今でさえじ・・・、好きな人のこと考えると頭ぐるぐるしちやつて、ちよつとキヨリおいちやつてるカンジだし・・・。・・・って!友達がね!友達が!」

それを聞いた古橋は、

古橋（あああ菌がゆい！この純情乙女めー!!）

と内心思っていた。その時、

店員「いらつしやいませー。」

うるか「!」

店員の声に反応した武元が、声のした方に目を向けると、

店員「1名様でよろしいですか？」

純「あ、はい。」

純がいたのであった。

古橋「あ、安達君！」

純「ん!?古橋も来てたんだ。今日は1人か？」

その問いに、

古橋「え!?!何言っ・・・んん!?!」

正面を見ると、武元が忽然といなくなっており、テーブルの下を見ると、

古橋（んんん!?!）

武元が隠れていたのであった。

古橋「ちよつとうるかちゃん、何を・・・」

と小声で聞くと、スマホのバイブが鳴ったので見ると、

うるか『しーっ、しーっ！いないってゆって！（><・;）』

そうメツセージが届いたので、

古橋（小学生の居留守か!!）

と心の中で突っ込むと、

うるか『あつ！あとさっきの話とは全然カンケーないかんね!!』

とメツセージが来たので、

古橋（ホントに隠す気ある!?!うるかちゃん!?!）

とまた心の中で突っ込んだのであった。すると、

純「せつかくだし、俺も一緒にいいか？」

と純が座ったので、

古橋（ああもう！なんなのこの状況!?!）

と思っていたのであった。

古橋（はあ・・・、もうしようがないなあ。可愛いうるかちゃんのために一肌・・・）

と思っていると、再び武元からメツセージが届いたので目を向けると、

うるか『文乃っちって意外と大人なパンツはいてんね！ちよつとドキドキしちゃつ

た』

といったメッセージが届いたので、

古橋（ぶつとばすよ？）

と思つた古橋であつた。その時、純がボールを持っていじつてゐるのを見た古橋は、

古橋「最近安達君、よくボールいじつてるね。」

と言つたのであつた。すると、

純「ああ。何か最近、ボールをいじらないと落ち着かなくてな。何より、うるかが閑わつてるかもな。」

そう言つたのであつた。

古橋「うるかちゃんか？何で？」

純「あいつとは中学からの付き合いだけど、あの頃から、いや、もつとスゴくなったなつて。」

古橋「なるほどね。国体も優勝しちゃつたし。でも安達君も、甲子園に加えて、世界大会と国体も優勝しちゃつたから、安達君もスゴイよ。」

純「はは。でも、そんなスゴイあいつがいたから、俺は頑張れたんだ。だから、次のステージも、もつと頑張んねーとなつて。」

古橋「ふふつ。それ聞いたらきつとうるかちゃん喜ぶね。」

その時、武元の喜びがメッセージから漏れていたので、

古橋（うん。漏れてる漏れてる。喜び漏れてるうるかちゃん。）

と古橋は若干苦笑いしながらメッセージを見ていた。

純「あ。うるかと言え、ちよつと古橋に聞きてーことがあんだけど。」

古橋「ん？」

純「あいつ、最近ちよつとよそよそしいというか、避けられてるような気がすんだ。他のみんなに聞いても知らねーって言うし、古橋は、何か聞いてる？」

古橋「えつと・・・、それは・・・。」

そう言つて、古橋は純の顔を見ると、本当に心配している顔であつた。

古橋（安達君・・・。）

純「あいつ、好きな奴いるから、それに関する事だと思ふんだけど・・・。」

と言つた。それを聞いた古橋は、

古橋（本当に安達君は、うるかちゃん絡みだと色んな顔するな・・・。でも、安達君つて、時々何考えてるのか分からないときがあるし・・・。）

そう思いながら下のテーブルを見ると、武元が首を横に振つていたので、古橋は純にこう言つた。

古橋「うるかちゃん、誰とも付き合つてなんかいないよ。」
と言つた。

純「・・・そつか。」

そして、古橋はコーヒーを一口飲んで、

古橋「もし、うるかちゃんか『そう』いうことになって、自分から離れていつちやつたら、安達君はどう思うのかな？どうあつてほしいのかな？」

純にこういつた質問をしてみたのであつた。

純「・・・スゲー質問だな。・・・そうだな、あいつに好きな奴がいるんだつたら、その人とうまくいつて幸せになつてほしいと、それが一番じゃねーかな。」

と答えた。それをテーブルの下で聞いていた武元は、切ない表情を浮かべたのであつた。

古橋「・・・それだけ？」

と、古橋がそう聞くと、

純「・・・いや。やつぱり寂しい・・・な。」

と寂しそうな表情を浮かべていたのであつた。それを見た古橋は、

古橋「安達君はうるかちゃんのこと、本当に大切に思つてるんだね・・・。」

そう言うのと、純は目を瞑り微笑を浮かべながら、

純「つたりめーだろ。あいつのこと・・・。」

そう言ったのだが、

純「……いや、なんでもねー。」

途中で言うのを止め、財布から千円札を取り出し、それをテーブルに置いて、
純「そんなじゃ、またな。」

古橋「あ、うん……。」

ファミレスを出たのであった。

古橋（つたりめーだろ、か……。その後何か言いかけたけど、多分好きって言いかけたんだと思うな……。）

そして、テーブルの下を見ると、

古橋（……まあ、そうなるよねえ……。）

恥ずかしさと幸せのあまり、煙を吹き出していた武元がいたのであった。

帰り道

うるか『文乃つち今日は相談のつてくれてありがとう！ちよつと楽になったよつて友達
が言つてた！友達が!!』

うるか『I LOVE YOU♡』
そのメッセージを見た古橋は、

古橋（・・・『うん、良かった。留学も恋愛もうまくいくように応援してるよって、お友達に伝えてあげてね』つと・・・。）

と送り、

古橋（・・・『あと・・・相手の人のことあんまり避けてると別の誰かが』つていやいや、変な誤解招きそうな文章になっちゃってるーツ!!）

と感じたので、

古橋（削除！削除！）

続きは削除したのであった。その時古橋は、武元と安達の言葉を思い出していた。

回想

うるか『心の重荷になっちゃうくらいなら、別に好きな人がいるって思われてる方が』

純『あいつに好きな奴がいるんだったら、その人とうまくいって幸せになってほしいと、それが1番じゃねーかな。』

回想終了

その時、古橋はさつき来た道を引き返したのであった。すると、スーパーカワイで、成幸と一緒に歩いている純を見つけたのであった。

スーパーカワイ

成幸「大漁大漁！」

純「はは。良かったな、成。」

成幸「ああ。けど、悪いな。荷物持ち手伝わせちゃって。」

純「別に構わねーよ。その代わり、今日お前んちで飯食って良いか？」

成幸「良いぜ。きつと母さんも妹達も喜ぶと思う。」

純「よっしゃ!! そんじゃあ、早く帰ろーぜ!!」

成幸「ああ!!」

その時、

古橋「安達君っ!!」

純「ん？」

成幸「何だ？」

後ろから声がしたので振り返ると、

純「古橋か。」

成幸「どうしたんだ？」

古橋がいたのであった。すると、純に近付き、

古橋「嘘、だからっ!!」

そう言った。

純「は？」

成幸「え？」

古橋「うるかちゃんに好きな人いるって話・・・、嘘だからっ!!」

純「……」

その発言に純はしばらく黙っていたが、

純「……そっか、……分かった。」

そう返したのであった。その時、純は少しホツとしたような顔をしていたのであった。一方、

成幸「え？え？何の話？」

話の意味が全く分からない成幸は、

成幸「何の話してるの？」

と尋ねたが、

古橋「それは自分で考えて!!」

成幸「はあ!?!?どういうこと!?!」

古橋「どうもこうもありません!乙女心『実践』問題だよ!!それに、成幸君は安達君の幼馴染でしょ!!」

成幸「えええ……」

と返されたのであった。

37話

3—D教室

うるか 『pretain』 『維持する』 『solid』 『堅実な』 『principal』
『主要な』 『precise』 『正確な』 。

川瀬 「最近・・・、えらい頑張ってるじゃないか、うるか。」

うるか 「!あはは・・・、まあ、ちつとね!」
すると、

海原 「・・・ねー、うるか。安達君に告白しないの?」

う・川 「!?!」

海原が武元にズバツと言った。

川瀬 「お、おい智波、そんな単刀直入に・・・。声でかいし・・・。」

海原 「ねーねー、しないの?どうなの、うるか?」

うるか 「ど、どうって・・・。」

すると、武元はしばらく黙っていると、

うるか「……うん。しない……かな。」

と、切ない表情を浮かべながら答えたのであった。

川瀬「海外留学。今はその目標に一心不乱って感じか。あんなきつぱり『告白しない』って……、安達のこと、どうする気なんだよあいつ……。」

海原「もし……、もし告白してうまくいったとしても……、留学が決まったらすぐ離れ離れになっちゃうんだよね……。安達君もプロに行くと思うし。うるかつてそーゆーとこ不器用だしさ、そうなるくらいなら……って、自分の気持ちに『歯止め』をかけようとしているのかも……。これ以上安達君のこと好きにならないように、距離が近付かないように。」

川瀬「でも、安達がこのことを知ったら、どう思うんだろうな？」

川瀬のその疑問に、

海原「分かんない。安達君もうるかの事が好きなんだと思うけど、時々何を考えているのか全く分かんない時があるから。でも、寂しがると思うな……。」

と、海原は言ったのであった。

廊下

純「おつ、いたいた！うるか！」

うるか「純！」

そして、純はある用紙を武元に見せた。

うるか「キャンパス見学？」

純「ああ。これ、成から借りたんだけど、勉強のモチベアツプに繋がればと思つてさ、良かったら明日、一緒に行かね？」

しかし、

うるか「音羽大……。」

留学を決めている武元は、あまり喜んでおらず、まだ武元が留学することを知らない
純は、

純「？どつたの？」

純（いつもなら飛び上がるレベルで喜ぶんだが……？）
と疑問に思つたのだつた。

うるか「んーん！なななんでも……。い……。行こっか！」

純「……。そっか。じゃあ明日駅でな。」

「そう言つて、武元の頭を撫でようとしたが、

さっ

武元に避けられ、若干距離をおかれたのであつた。

純（まだ距離があるように感じんな……。）

と思つた純であつた。

翌日、一ノ瀬駅

純「……。お前、それって水泳部のジャージだよな。なんて斬新なカツコ……。」

うるか「そっそう!?フツーだって、こんくらい！さっ行こ、純！」

そう言つていたが、

うるか（今日の純、伊達眼鏡かけてるけど、その姿もカツコいいよ……／＼／＼）
と純の伊達眼鏡姿に見とれていたのであつた。

純（変だな……。コイツんちに行ったときなんか、フツーに女子らしいカッコして
んだけど……）

そう思っていたが、ジャージ姿も似合っていたので、

純「うるかつて、何着ても似合うな。」

と正直な気持ち述べたのであった。すると、武元は恥ずかしさと嬉しさのあまり、
しやがみ込んでしまったのであった。

音羽体育大学

うるか「大学の教室！でっか!!」

純「確かにデケー……!!」

うるか「ジム広ツツ!!」

純「確かに……!!」

うるか「ゼミ！なんか大人っぽい!!」

純「そうだな……!!」

うるか「わあ！学校に喫煙所!?不良!?あ、そっか！大学生ってハタチもいるんだ！」
純「そうだな・・・。」

そして食堂では、

うるか「うまあっ!!やっぱい学食めっちゃキレイでメニュー多いし・・・、大学サイ
コーじゃんっ♡」

純「はは。」

すると、頼んだ学食の梨を見た純は、

純「うるか、梨食う?お前、好きだったろ。」

そう言つて、爪楊枝に刺して、武元にあげようとした。

うるか「えっ♡いーの!?!いただきっ・・・」

しかし、

しゅぱっ

すぐに顔を背けてしまったのであった。

うるか「ご・・・ごめん。やっぱいい・・・。」

純「え?そう?いつもメツチャ食いつくの・・・。」

うるか「梨とか全然キライだし!!」

純「そう言ってる割にはハラ鳴ってるし、ヨダレ垂らしてんじやねーか。」

すると、武元も純と同じメニユーを頼んでいたの、

純「じゃあ、お前の梨チョーダイ。」

そう言うと、

うるか「えっ!?ダメ!!あげない!!」

と言われたのであった。

純「何でだよ!!」

うるか「ダメなのはダメ!!」

純「・・・分かった。でも、俺の分の梨あげるから、好きにしな。」

そう言つて、純は武元に梨をあげたのであった。

うるか「えっ!?う、うん・・・。」

その際、武元は顔を真っ赤にしながら受け取つたのであった。

純「はは。お前顔真っ赤!!」

うるか「も、もー!!」

その時、純達の周りの大学生は、

大学生A（初々しいなー♡）

大学生B（彼氏さんもイケメンで、彼女さんも可愛らしいし。良いなー♡）

何てことを思いながら、2人の様子を見ていたのであった。

純「美味かったな。」

うるか「そーだねー!!」

すると、カップルを何組か見かけた純達。すると、

うるか「カップル多いね……。」

純「……そうだな。」

と言った。その時、純は武元とカップルになつて一緒に過ごす姿を想像したのであつた。

純（ふつ、まさかな……。）

その時、純と同じ想像をしていた武元も、

うるか「……。」

泣きそうかつ切ない表情を浮かべていたのであつた。

帰りの電車

うるか「色々あつたけど、楽しかったねっ！」

純「ああ、そうだな。」

その時、武元が純にくつついたのであつた。

純「どうした、うるか？」

その時純は前を見ると、帰宅ラツシユでくつついたのだと気付いたのだが、

ギユツ

うるか（あつ・・・／＼／＼）

武元に抱き付いて、帰宅ラツシユの混雑から守つたのであつた。その際武元は、幸せかつ恥ずかしい気持ちになつたのは内緒である。

38話

3—B教室

この日は三者面談を行っており、純の三者面談が行われていた。

先生「いやー、とても良いお母さんじゃないか安達！はっはっは。」

純母「そんなことないですよー、センセ！」

純「母さん……。」

先生「それはそうと安達、優勝本当におめでどう。よく頑張ったな。去年のあの悔しい準優勝があったにもかかわらず。西辺先生はもちろん、先生も心配していたからな。去年よりも良い顔になって、安心したぞ。」

純「……いえ、ありがとうございます。」

先生「聞くまでもないと思うが、進路はもちろんプロなんだな？」

純「はい。監督にも、母にもそう言いました。」

先生「そうか……。これから先辛いことがあるかもしれないが、頑張れよ。」

純「ありがとうございます。」

廊下

純母「ねえ。もしかして純、前から薄々思ってたけど、プロに行く理由って、私のため？」

純「・・・それもある。けど、実際にあの世界で活躍したいという気持ちはちゃんとあるから。」

純母「そ？それなら母さん、あなたのこと応援してるから。」

純「ああ。」

純母「けど、一番大切なことだけははき違えるじゃないわよ。」

純「・・・。」

その時純は、母親の言った言葉に、何かを感じたのであった。すると、うるか「失礼しましたー！」

うるか母「失礼しました。」

3 | Dの教室から、武元とその母親が出て来たのであった。

純母「あらー。」

うるか「あつ。」

うるか母「あら。」

純母「うるかちゃんじゃない！それと、ご無沙汰してます。」

うるか「こんにちは、おばさん。」

うるか母「こちらこそ、ご無沙汰してます。純君も久し振りね。後、優勝おめでとう。」

純「ご無沙汰しております。後、ありがとうございます。」

うるか母「うるかなんて、純君の活躍にもうメロメロだったんだからー♪」

うるか「ち、ちよつとママ！」

うるか母「何よー。」

純「はは。そつちも三者面談終わったトコなんだ？」

うるか「う、うん!!丁度ね!!」

純「そつか。」

うるか「純も?」

純「ああ。それで、どうだったんだよ？」

うるか「まあ、色々ね。」

純「何だよ、色々って。はは。」

うるか「へへ。」

2人の様子を見ていたそれぞれの母親は、微笑ましい気持ちで見えており、

純母・うるか母「「じゃッ、あとは若い者だけでごゆつくりっ!!」」

純「おい!!」

うるか「マ、ママ!!」

そう言いながら、その場をダツシユで去ったのであった。

純「・・・まったく相変わらずだな・・・」

うるか「こつちこそ、ごめんね。ママが余計なこと言つて。」

純「気にしてねーよ。相変わらず楽しい母さんだな。」

うるか「そつか・・・。それで・・・、純の進路、お母さんはどうだつて?」

純「もちろん、了承してくれてる。」

うるか「そつか・・・」

純「そう言うお前はどーなんだ?」

うるか「う、うん!!純と一緒に了承してくれてるよ!!」

純「そつか・・・。そうだ、俺この後練習あるんだつた。」

うるか「そーいえば、純ってここ最近よく授業中寝てるって聞いたけど、それつ

て・・・」

純「お前、それつてまさか・・・」

うるか「うん。成幸から聞いたよ。」

純「そつか……。まあ、特に国体が終わってからプロ経験者に練習メニューを作成してもらってさ、その練習をやってんだよ。」

うるか「そうなんだ。キツいの？」

純「まあな。部活の練習の方がまだマシだよ。」

うるか「そつか……。でも、頑張つてね！」

純「ああ！そうだ、お前も今日練習あんの？」

うるか「うん、一応ね。」

純「じゃあさ、今日練習が終わった後、一緒に帰ろうぜ。」

うるか「うん、いいよ!!」

純「はは。じゃあ、校門前で待ち合わせな。」

うるか「分かった!!」

そして、2人は別れるまで一緒にいて、放課後一緒に帰ったのであった。

その頃、成幸は古橋の父親と再会し、古橋が父親と大喧嘩した結果、成幸の家に泊まる事になったのである。

39話

唯我家

純「お邪魔します。」

水希「あつ、純さん。」

純「やあ、水希ちゃん。成に呼ばれたんだけど……。」

水希「あ、えつと……。」

すると、

成幸「おお、純！悪い急に呼び出して！」

成幸が現れたのであった。

純「成、呼び出した理由は？」

成幸「まあ、とにかく中へ。」

純「分かった。」

そう言って、家の中に入っていった。すると、

純「え？」

古橋「あ、安達君。こんばんは。」

古橋が成幸の家にいたのであった。

純「何で古橋が？勉強って感じじゃねーし。」

成幸「それはこれから説明する。」

そう言つて、成幸は純を座らせたのであった。

和樹「よめにきたー？」

葉月「ついにきたー？」

花枝「・・・成程、事情はわかったわ。」

成幸「わ、悪い母さん。俺がとっさに変なこと言っちゃつて・・・。」

純「しつかしお前、思い切つたこと言つたな・・・。」

成幸「いや、俺もつい・・・。」

すると古橋が、

古橋「あ・・・、あの・・・つ。やっぱりそんなご迷惑をおかけするわけにはツ!!!失

礼します・・・ツ!!」

そう言つて、家を出ようとした。その時、

花枝「まった文ちゃん。」

花枝さんが古橋を止めたのであつた。

花枝「ご家庭によつて、教育方針があるでしょうし、家族なのだからケンカもするでしょう。その良し悪しに口を出すつもりはないわ。」

純（水希ちゃん、メツチャ睨んでる……。相変わらず成のことが好きなんだな……。）
花枝「……。でも、それはそれとして私の可愛い文ちゃんにひどいこと言つてから!!!
オツケー文ちゃん!!向こうの頭が冷えるまで、いくらでもウチにいなさいツ!!」

古・水「「えええええっ!!」」

純（おばさん……。いつからあなたの古橋になつたんですか……。）

古橋「で、でも、着替えもないですし……。」

水希「そ、そう!!私の服もサイズがなー!残念だなー!!」
すると、

成幸「じゃあ、俺のシャツとかでよかつたら。」

成幸の提案に、

水希「ガビーン!!」

水希はシヨックを受けたのであつた。

純「けど成、お前のサイズじゃあ、デケーンじゃねーか？」

成幸「うーん、多分大丈夫だと思う。」

純「・・・そっか。」

花枝「さあ、話も纏まったようだし、お鍋食べましょ!!純君も食べて良いわよ!!」

純「え、良いんすか!?!」

花枝「ええ!!」

純「けど、一応母さんに連絡しても良いですか？」

花枝「ええ、構わないわ。」

そう言われて、純はスマホを取って電話をしたら、許可が下りたので、純は成幸達家族と古橋と一緒に鍋に舌鼓を打ったのであった。

翌日

古橋「行ってきまーす!」

成幸「行ってきまーす!」

花・水・和・葉 「「「いつてらっしやーい!!」

古橋 「安達君は先に行つたんだよね？」

成幸 「ああ。ちよつと用があるつて。」

古橋 「そつか。・・・あつ、ちよい待ち。」

すると、何かに気付いた古橋は、成幸を止めたのであつた。

古橋 「2人一緒に出るとこ見られたらマズイでしょ？」

成幸 「おお。ああ、そうか。」

古橋 「成幸君は、此処でしばらく待機してて。」

成幸 「いやでも、それだと遅刻・・・」

すると、

古橋 「だからわたし、超特急で先に行くからー!!」

成幸 「あっ!？」

と古橋はそう言いながら、全力疾走で先に行つたのであつた。しかし、初っ端の授業がマラソンであつたため、これ以上は知りたくないと思つた古橋であつたのと、武元にバレそうになつたのは内緒である。

翌日の休日

何か物音がしたので目が覚めた成幸は、起きたら

古橋「あつ、おはよう！ごめんね、起こしちゃった？」

古橋が朝食の準備をしていたのであつた。

成幸「な、なんで古橋がそんなことを・・・てか他のみんなは？」

古橋「あ、あはは。実は昨日・・・」

そう言つて、古橋は昨晚花枝さんに言われたことを言つた。

回想

古橋「えつ、明日一日・・・ですか？」

花枝「ごめんねえ、成幸以外皆朝から出かける用があつて・・・、2人でお留守番頼めるかしら？」

古橋「あ、はい。」

花枝「ごはんは何か、できあいのもの冷蔵庫に入れておくから・・・。」

古橋「い、いえ大丈夫です！お世話になってますし、わたしにまかせてください、おばさま!!」

回想終了

成幸「な、なるほど・・・。それで古橋が朝食を・・・、すまんなあ・・・。」
 そう言つて献立を見ると、

成幸「・・・。」

如何にもコメントしづらいメニューが並んでいたのであつた。これには、

古橋「イヤアアア見ないでえつ!!和洋中なんでもござれつて言つてたのウソなのオオ!!!
 実はずつぱりお料理苦手で・・・、こんなミジンコなわたしを見ないでエエ!!!」

古橋は涙目で小さくなりながら言つたのであつた。しかし、古橋の絆創膏だらけの手を見た成幸は、

成幸「・・・いただきます。」

そうやって、古橋が作った朝食を口にしたのであった。これには、

古橋「ちよっ?! 食べちゃダメだつてば!! おなか壊しちゃう!!! わたしが全部食べるから
!」

古橋は慌てて止めたのであった。しかし、成幸は構わず口に運んだのであった。

古橋「ほらすっごいガリゴリいってるし!!」

しかし、

成幸「・・・うん。ちよつと固くてしよっばいけど、うまいよ。俺は好きだな、この
スクランブルエッグ。」

成幸はそう言って古橋をフォローしたのであった。

古橋「それ目玉焼きなんだけど・・・。」

成幸「ああっスマン!!」

・・・多分。すると、

古橋「お昼は絶対おいしくリベンジしますので!!」

成幸「え!?! でもお前、昨日あまり寝てないんじゃない?」

古橋「今日一日はわたしにまかせて!!」

と言ったのであった。また、

古橋「それに、こう見えても・・・天文学の前は・・・、良いお嫁さんになるのも夢

だったから!!」

「とある意味爆弾発言をしたのであった。これには成幸も顔が赤くなり、察した古橋は、

古橋「ゆっ・・・、『唯我君の・・・』って意味じゃないからね!!」

成幸「わっ、わかってるよ!!」

と言ったのであった。その時、

ピンポーン

突然チャイムが鳴ったのであった。

成幸「誰だ?こんな朝早く・・・。」

そう言った成幸は、玄関に向かった。すると、

純「うっす、成。」

純がいたのであった。

成幸「純!?!何で!?!」

純「ちよつと気になつてな。」

成幸「そつか・・・。」

純「朝早くから悪いな。一応朝飯は済ませたから。」

成幸「いや、気にすんな。上がつて。」

純「ああ。」

そして、純は成幸の家上がった。

古橋「えっ、安達君!？」

純「おはよう、古橋。今日はオフだから様子見にな。」

古橋「そう。何かゴメンね。」

純「気にすんな。」

そして古橋は手伝いをしたのだが、

古橋「まずはお掃除！」

畳の部屋の扉を箒の柄で一部破いてしまったり、

成幸「古橋!!」

純「鍋嘖いてんぞ!!」

古橋「えっ、わああっ!？」

うどんを茹でていた鍋が嘖いてる状態にしてしまったり、そのうどんの量も多かったりした。その分純が食べたりにした。

古橋「お洗濯お洗濯つと・・・。」

しかし、成幸の下着を取って慌てたりしたりなど、怒濤の一日であった。

その夜、

成幸「何か、怒濤の一日だった……。」

純「そうだったな……。しかし古橋、家事は苦手だったんだな。女子力マックス感出てるからついできるんだと思った。」

成幸「それな……。武元はスゴいんだけどな……。人は見かけによらないな……。」
純「はは、そうだな。しかしお前、これからどうすんだ？古橋をこのままお前んちに居候させるわけにもいかねーだろうし。」

成幸「ああ。何とかするよ。」

純「……。そっか。まあ、お前がそう言うなら、頑張れよ。じゃ、またな。」

成幸「ああ。」

そして、純は成幸の家を後にした。後日、古橋の母親のノートパソコンがきっかけで、古橋は父親との仲が改善されたのである。

その後、成幸は古橋の父親にどこまで関係が進んでるのかを尋ねられたのは内緒である。

40話

図書室

うるか「そっかあ。んじゃあ、文乃っちもリズりんも、希望の進路にチャレンジすることになったんだ。」

緒方「はい。お父さんを途中で追い返してからは至ってスムーズに。」

古橋「わたしの方は色々あったんだけど、まあ何とか・・・。」

うるか「色々？色々って？」

古橋「色々は色々だよ。英語で言うところ、『various』だよ。」
すると、

成幸「武元、お前は？」

成幸が武元に聞くと、

うるか「あ、あたし？」

成幸「音羽大学のスポーツ推薦を・・・。」

うるか「あーうんうん、そう！それ！成幸のおかげで英語英語の成績も調子良いし、これなら向こうに行っても……」

その時、

純「向こう？どういう意味？」

向こうという言葉にいち早く反応した純がそう聞くと、

うるか「む、向こうは向こうだよ。英語で言うと、『no effect』……」

成幸「いやそこは『invalid』だろ？つか純が聞いているのは、『over t here』だぞ？」

うるか「と、とにかく、色々だよ！」

純「まあ成。俺も一応こいつから先日聞いたし、希望の進路のチャレンジはオツケーつてことだろ。」

成幸「そ、そつか……。」

うるか「あはは……。」

しかし、その様子を覗き見していた者がいた。

川瀬「どう思います、海原隊員。」

海原「よくありませんなー、川瀬隊員。」

小林「俺的には、純ちゃんが幸せならなんでも……」

川瀬「お黙り、小林。」

女子水泳部部室

川瀬「うるか。あんた、本当にこのままでいいわけ!？」

うるか「な、何が？川つち……。」

川瀬「安達のことだよ!!いまだに変なキヨリおいたままなんだろう!？」

うるか「そつ……、それはその……。」
すると、

海原「あはははつ。てゆうかさー、うるか……。海外留学の件、いつまでだんまりだオラアツ!!」

海原がそう言ったのであった。これには武元も、

うるか「!？」

衝撃を受けたのであった。

うるか「うえええつ!?!いつからそのこと知って……。」

海原「学園長呼び出しの時から知つとつたわ!! あゆ子なんかめっちゃ聞き耳たてまくつてたし!!」

川瀬「ちつ、智波もだろぅが!!」

うるか「……はは。知ってるならさ、分かるつしよ? もういいんだつてば。こ……」
川瀬「『これ以上好きになつても寂しいだけだし』?」

うるか「い……」

海原「『今一緒にペンキョーでできるだけでシアワセだし』?」

台詞をとられた武元は、

うるか「……」

口を開けたまま、絶句したのであつた。すると、

海原「じゃ、たとえばさ……、今安達君にとびきりカワイー彼女ができて……、卒業まで散々イチャイチャラブラブっぷり見せつけられてもかまわないつてコトだよね? 安達君、タダでさえイケメンなんだから。」

海原のそういつた問いに、

ドズウウウ……ン

武元は死んだ目をしながら座り込んでしまったのだった。その様子を見た海原と川瀬は、

川瀬「もーいい。問答無用だウルア！」

海原「けっけっけ、うるか！ノーブラで帰りたくなかったら、おとなしく言うこと聞くんだねエ!!」

うるか「うぎやーっ、返してーっ!!!てか2人ともカオ怖アツ!!!」
荒療治をしたのであつた。

数時間後

純「タイム測定なら別に構わねーぞ。」

海原「いやー悪いね安達君！もう今日は部員全員あがつちやってさー！」
その横で、武元は顔を赤くしながらあわあわしていた。

純「しっかし特Sランチの券3枚か……。お前らはどーすんの？」
すると、

海原「いつけない！私たちそろそろアレがアレする時間だから!!」

純「は!?!」

川瀬「あとは誰もいないプールに2人つきりでよろしく!!!」
うるか（あからさまーっ!!!）

分かりやすいウソでその場を後にしたのであった。

純「よー分からんが……、とりあえずやるか……?」

うるか「う……うん。ホンツトゴメンね純……。」

しかし、純の顔を見ると、

純「うおっ!?!」

すぐに泳いでしまったのであった。

純（やっぱまだ……少し避けられてるような気がすんな……。）

その時、

うるか「……。」

武元は、ある作戦を実行しようとしたのであった。

川瀬（今だ。いけ、うるか!）

海原（名付けて……）

海・川（わぎと溺れて人工呼吸大作戦!!むちゅー♡）

うるか「あ、あーれーっ、しまった急に足がーっ!」

純「!」

うるか「あつぷあつぷ！このままじゃ濡れちゃうーっ!!だれかーっ!あつぷあつぷ」

しかし、

うるか（しまった!!どうしよう海っち川っち……。濡れるってムズカシイ!!）

海・川（知らん。）

どうやって濡れたらいいのか分かんなかったのである。

うるか（うーっ、このままじゃアスリートとしてのプライドが……。ツ!!次こそちやんと濡れて……。ツ。）

そう思って後ろを見ると、

純「うるかっ!!!」

純がすぐ後ろにいたのであった。

うるか「うえええっ!?!純!?!」

純「うるか!!大丈夫か!!」

そう言つて、純は武元に抱き付いたのであった。

うるか「う、うん!!大丈夫!!」

純「そっか……。」

すると、

うるか「え!? 純!？」

純は更に強く抱き締めて、

純「よかった……。お前に何かあつたら、俺どーすればいいか……。ホントによかった……。」

武元にそう言った。これに対し武元は、

ギョッ

純「!」

純の背中に手を回して、

うるか「大丈夫だよ……。ごめんね……。」

そう言つて純を慰めたのであつた。

放課後

純「さつきは悪かつたな……。その……。慌てちやつて……。」

うるか「う、ううん!! 全然!! むしろこつちがごめんね!!」

純「ああ、うん……。」
すると、

純「日……、だいぶ短くなって肌寒くなってきたな。」

そう言うのと、

うるか「……うん。」

武元もそう答えたのであった。

純「もうすぐ文化祭だし、それが終われば本格的に受験シーズン。気合入れ直して頑張れよ。まあ文化祭の前に、俺はドラフトだけど。それに、最近のお前の頑張りなら、音羽大は大丈夫だと思うぜ。」

うるか「……そう……かな。」

しかし、少し気まずい雰囲気になったので、

純（やべ……、何か変な空気になっちゃった……。）

すると純は、ある事を武元に尋ねた。

純「そういえばさ、最近はどうなんだ？例の好きな人とは。」

うるか「どうって……、何が？」

純「まあ、進展というかなんとか……。」

すると、

うるか「いないよ、そんな人。」

と武元は言ったのであった。

純「え。」

そして、

うるか「今までも、これからも、ずっと。やれること全部やりきるまでは、好きな人なんていない。ほら、あたしつてさー、水泳が恋人みたいなたこあるじゃん？ やっぱりそれでいいってゆーか・・・、そうじゃなきゃだめなんだ。だからね、全部ウソ！ えっへっへ、だまされたー？」

と言ったのであった。

純「そつか……。まったくお前なあ……。何でそんなウソ……」

すると、武元は純の唇にそつとキスをしたのであった。そして、

うるか「……。だからさ、これも、ただの練習。海外じゃフツのアイサツらしーしね。」

純「海外……。それって……」

うるか「あたし、海外留学すんだ。」

と、武元は言ったのであった。これには純も、

純（え……。海外……。つてか今キス……!?)

混乱していたが、武元の肩を取って、
うるか「わっ!!」

純「マジで!?海外留学!?うるかが!？」

と言ったのであった。それに対し武元は、

うるか「あはは。まあ、テスト通ったらの話だけどね。」

と言った。そして、

うるか「・・・黙っててごめんね。ほんととはついさつきまで、色々ぐるぐるしてたんだけど・・・、もう迷うのやめた。あたし、やっぱり一番になりたい。」

と改めて純に決意を述べた。そして、

うるか「・・・純が、あたしのことから目が離せなくなるくらい。純にもつといっぱい元氣と勇氣をあげられるくらい。今は死ぬ気で水泳頑張るから・・・っ、だからずっと・・・、ちゃんと見ててねっ!!!」

と武元は純にそう言ったのであった。

純「・・・ああ。」

その時純は、武元がいつもより可愛いと感じたのであった。

うるか「よーし!じゃ、一緒に帰ろー帰ろー!」

と言い、純の手を取ったのであった。その時武元は、

うるか（ど……どうしよ。勢いにまかせてあたしスゴイこと……。で……。でもホラ、海外じゃ……。ねえ？）

と自分の行動に改めて恥ずかしくなったのであった。一方純は、

純（バーカ。もうあの時から、お前のことしか見てねーんだから、今更目離せねーよ……。）

と武元の背中を見てそう思っていたのであった。

翌日、3—D教室

昨日のことを報告した武元に海原と川瀬は、

川瀬「いやいや……。」

海原「フツーほっぺとかでしょ。海外だって。」

そう答えたのであった。それには、

ピツシヤアアアン

衝撃を受けたのであった。

海原「うるか隊長ダイターン♡」

すると、

うるか「うっぎやーツ!!マジ!?だってマンガとかでそーゆーのよく聞かない!!?恥ずい!!死にたい!!ほんなこつ!!ああああ!!」

武元が悶えながらそう言ったのであった。その様子を見た海原と川瀬は、

川瀬「：ったく、ま、そこまでやったならごまかさず告つとけて気もするが：。」
うるか「わっ。」

海原「えらいえらい!よくがんばったじゃん、うるか!!」

そう言つて、武元にくつついたのであった。それに対し、

うるか「ちよ、ちよつと2人とも苦しいつてば!!」

と言つと、

川瀬「ったく、このうい奴めー!」

海原「はっはっは、よいではないかよいではないか!」

と言つたのであった。

海原(それに安達君も、うるか一筋だし、多分大丈夫だろうな・・・)

と思つていた海原であった。

41話

今年のドラフト会議。最大の目玉は、今年の夏の甲子園の優勝投手である、安達純が目玉だ。2年の夏から3季連続の甲子園出場、準優勝1回、優勝1回成し遂げ、甲子園と世界大会では、他の追隨を許さない圧倒的な活躍を見せた。

その実績をひっさげ、運命の日を迎える。

純「俺、どのタイミングで指名されるかね・・・。」

吉田「まあ、お前は早く指名されるだろ。流石に・・・。」

野口「それな・・・。」

純「はは。でも、お前らは進学なんだな。」

吉田「まあな。自分の実力は、自分が一番よく知ってるから。」

野口「俺もだ。」

純「そつか・・・。大学行っても、頑張れよ。」

吉田「ああ。」

野口「もちろん。」

純と一緒に甲子園で暴れた吉田と野口は、大学進学が決まっいて、彼らは、プロに

行くつもりはないが、野球は続けるらしい。

そして、運命のドラフトが始まった。まず最初は、下位チームからの指名からだった。

アナウンス『第一巡選択希望選手 北海道ウォーリアーズ』

アナウンス『安達純 投手 一ノ瀬学園』

その瞬間、会場は盛り上がった。安達の指名が来たと。

実況A『来ましたねえ。高校No.1投手の指名ですか。』

実況B『そうでしょうね。このチームの方針は、良い投手だったら即指名ですからね。』

その後も大学、社会人の選手の指名が混じるが、

アナウンス『名古屋ブルードラゴンズ』

アナウンス『安達純 投手 一ノ瀬学園』

実況A『安達、これで2球団目の指名です！』

会場も盛り上がりを見せそして、

アナウンス『東京シャイアンズ』

アナウンス『安達純 投手 一ノ瀬学園』

アナウンス『埼玉ホワイトライオンズ』

アナウンス『安達純 投手 一ノ瀬学園』

アナウンス『福岡トマホークス』

アナウンス『安達純 投手 一ノ瀬学園』

実況A『な、何と、今年リーグ3連覇を成し遂げ、3年連続の日本一を狙うトマホークスと、そのトマホークスと壮絶な優勝争いを繰り広げたホワイトライオンズ、そして、去年の日本シリーズで屈辱の4連敗をトマホークスに食らい、打倒トマホークスを掲げるシャイアンズが、安達を指名しました!!』

実況B『これは中々面白くなりましたね!!』

最終的に、純はセパ合わせて5球団が指名された。そして、安達の抽選が始まり、5球団の代表が、それぞれくじを引いていく。

実況A「さあ、くじ引きが終わりました!!結果は!?!』

そして、

実況A『ホワイトライオンズだああアア!!安達の指名権を引き当てたのは、ホワイトライオンズに決まりました!!』

一方純達は、

部員 「「うおー!!」」

吉田 「スゲー!!安達、お前ホワイトライオンズだぞ!!」

野口 「スゲー!!マジでスゲーよ!!」

純 「はは。サンキュー!!」

西辺 「安達、これからだぞ。精一杯、一生懸命頑張れよ!!」

純 「はい。ありがとうございます!!」

吉田 「ヨッシャー!!皆で安達を胸上げすんぞー!!」

部員 「「おおーっ!!」」

そして、皆で純を胸上げたのだった。そして、ドラフトは終わり、純はホワイトライオンズに決まったのであった。

そして、ホワイトライオンズの2位は奥居となり、会場は大いに盛り上がったのだ。た。後日、成幸はもちろん、うるかや古橋、そして緒方からも祝福されたのである。

4 2 話

ドラフトから数日後、一ノ瀬学園では文化祭に向けての準備を進めていた。純達3人は、お化け屋敷をすることになり、準備を進めていた。

大森「なーなー、コレマジマツドサイエンティストって感じじゃね？」

純「お前なあ……。」

小林「いいからお前も手伝いなって。」

生徒A「おーい、ベニヤ足んねーぞ。」

成幸「あ。じゃあ俺もらつてくるよ。」

純「じゃあ、俺も付き合うわ。」

そして、純と成幸はベニヤを取りに行った。その道中、それぞれが出し物準備を進めている姿を見て、

成幸「わあ……、スゲ……。」

純「だな……。」

皆気合が入ってるのが伝わった。その時、

うるか「あつ、純！成幸！」

純「ん？」

成幸「うん？」

声をかけられた方に目を向けると、武元と古橋、そして緒方がいた。

うるか「一杯やつてく？」

純「おお、うるか。」

成幸「そういや緒方のクラス、うどん屋やるんだっけ？」

緒方「試作です。」

成幸「ありがとう。」

純「サンキュー。つーかき、うるか、自分のクラスの手伝いはいいのかよ？」

成幸「確かに。古橋もいいのかよ？」

すると、

うるか「えへへ……。」

古橋「ううーっ、戻らないと駄目なんだけどおいしくてっ！」

と言ったのだった。

成幸「にしても……、どこもみんな気合入ってるな。」

古橋「3年生は特に高校最後の文化祭だもんね。唯我君達のクラスは、お化け屋敷だっけ？」

緒方「はうあ！お化け！」

うるか「へー！純と成幸もお化けやんの!?見たい見たい！」

純「俺は野球部の出し物があるからやらねーよ。」

成幸「俺は衣装と小道具担当。当日はあんまりやることないかもなあ。」

うるか「えーっ。」

成幸「まあ俺はこういう裏方の方が向いてるよ。」

純「うるかは何やんの？」

すると、

うるか「あつ、あたしはヒミツツ！」

純「？」

うるか「クラスってゆーか、水泳部の方の出し物……。じ、純は絶対見に来ちゃダ

メだかんね！」

純「・・・分かった。」

しかし、

純（ゼッテー行こう。）

そう思っていた。

成幸「古橋は？」

古橋「あ、えっと、実は……」

その時、

鹿島「それも当日の……」

蝶野「お楽しみっス！」

古橋の後ろから、鹿島ら「いばらの会」のメンバー3人が現れた。

鹿島「ほらほら古橋さん、まだ大切な打ち合わせが終わってませんよ。」

古橋「ごつ、ごめん鹿島さん！まさに今戻ろうと！」

緒方「文乃、さつき頼んだおかわりです。」

純（おかわり頼んだのね……）

すると、

鹿島「そういえば、皆さんは知ってます。この一ノ瀬学園文化祭の『ジnkス』を
と切り出した。」

と切り出した。

純・成・う・古・緒「『ジnkス？』『二』」

猪森「聞いたことないかい？後夜祭で打ち上げられる一発目の花火、そいつが上がった瞬間に触れ合っていた男女は、必ず結ばれるんだってさ。」

うるか「えーっ？まつさかー！」

蝶野「かなり成功例も多いっスし……、信憑性はあるっぽいスケど……。」
蝶野のその言葉に、一同は無言になった。すると、

成幸「……それって、火花を触れ合って見るような男女が、統計的にそういう関係にあることが多いってだけなんじゃ……。」

蝶野「まあ……、やっぱそうっスよね！」

成幸「えええ、あっさり!!」

純「だな。」

鹿島「所詮は噂ですからね。」

うるか「もーっ、イノっちもチョーちんもー!そんなヒカガクなことあるわけない

じゃーん!メーシンメーシン!」

古橋「あはは。そりゃそうだよ!鹿島さんってば。」

しかし、

うるか(メーシン、ジョートーっしょ!!)

妄想

純『この手を放さない。』

うるか『もー、花火見えないじゃん・・・♡』

妄想終了

うるか「キヤーアハーツ!!!」

といった妄想を浮かべていた。その近くで関城もこの話を盗み聞きしていたのである。

西辺（文化祭のジnkクス・・・。桐須先生と・・・!!）

・・・若干一名は、職員室で密かな決意をしていた。

そして、教師陣の文化祭の出し物、古橋達3―Aの出し物が決まり、それぞれ裏で行おうとしていたある計画も密かに行っていたが、そんなこんなで文化祭当日を迎えたのだった。

文化祭当日

純「……流石に盛り上がってんなー。」

その時、純は猪森のある話を思い出していた。

回想

猪森『後夜祭で打ち上げられる一発目の花火、そいつが上がった瞬間に触れ合ってた男女は、必ず結ばれるんだってさ。』

回想終了

純（ジンクスか・・・。）

そんなことを考えていた。

しかし、『後夜祭で打ち上げられる一発目の花火。』『それが上がった瞬間、』『触れ合っていた男女は結ばれる』今思い返してみれば、あの『ジンクス』は、まさしく本物であったのを、この時の純は思いもしなかったのであった。

43話

純「さて、どうすつかなあ……。成は緒方んトコのクラスの手伝いに行ったらしいし、このまま体育館行くか。」

と思ひ、純は体育館に向かつて行つた。すると、

海原「ありやーっ、安達君じゃん！」

後ろから海原の声が聞こえた。

純「！ああ、海原……。っ」

それに反応した純が振り返ると、

海原「やつ。」

川瀬「うっす。」

海原の他に川瀬、そして武元がいた。

純「うるかと川瀬……。その衣装だと、水泳部はダンスやるんだ。」

うるか「じ、純、来ちゃダメって言ったじゃん!!」

海原「へへー、まあね。」

川瀬「これで12時から体育館のステージでダンスをやる予定！」

純「そうなんだ。」

海原「安達君んトコの野球部は、毎年のアレ？」

純「ああ、歌とダンスをやる。」

海原「へえ、やっぱり。」

川瀬「すると、安達も歌うの？」

純「ああ、まあな。」

うるか「純も歌うんだあ・・・。」

すると、海原と川瀬は、武元を見て、ニヤツと笑みを浮かべ、

海原「良かったですなー、川瀬隊員。」

川瀬「全くですなー、海原隊員。」

と言ったのだった。そして、そのまま純達は、一緒に体育館に向かったのだった。

その頃の成幸は、緒方んトコのクラスで、うどん売りの手伝いをして、その後緒方と一緒に体育館へ向かった。そして古橋は、劇の内容に不満を持ち、猛抗議していたのだった。

そして、体育館

司会『えーでは、次の演目は、野球部の皆さんと水泳部の皆さんによる歌とダンスの合同ライブをやります。』

ウオオオオ

客A「お・・・、おいおい!!」

客B「マジ!?!」

これには観客は盛り上がり、

成幸「な、何だ!?!」

緒方「こ、これはっ!?!」

ちように来ていた成幸と緒方も驚いたのだった。そしてステージの上には、

純「ヨッシャー!!!皆、盛り上がっていいこーぜー!!!」

うるか「イエーイ!!!」

純と武元がステージの上に立っていた。

緒方「な、成幸さん!?!何で安達さんとうるかさんが・・・!?!」

成幸「俺にもさっぱり・・・!!」

すると、

池田「それについて、私が説明します!!」
側にいた水泳部の池田が説明した。

今から数十分前・・・

純「間違えて野球部と水泳部の演目時間を一緒にしちやった!!!」

吉田「ああ、そうらしいんだ。」

野口「今になって気付いたらしい。」

純「そっか・・・。」

一方の水泳部も、

海原「これはマズイよ・・・。」

川瀬「ああ、流石にな・・・。」

うるか「今になって変更は難しいよね・・・。」

と顔を曇らせていた。すると、

純「・・・しゃーねー。」

うるか「純?」

純がそう言うのと、

純「野球部と水泳部の合同ライブにするしかねーな。」

そう言った。すると、

うるか「……い……いーじゃんそれ、面白そうっ!!」

武元はそう言つて賛成したが、

海原「確かにそれしかないね。」

川瀬「けど、本番まで時間ないぞ。今から間に合うと思うか?」

野口「確かに……。」

吉田「それもそうだな……。」

これには周りも妥協した。

純「今さら変更も難しい。やるとしたらそれしかねーよ。それに、歌とダンスに関しても、皆が知ってる歌も結構あるし。」

と純が言い、

うるか「うん!!純の言う通りだよ!!やるつきやないよ!!やろう!!」

武元も賛成した。そして、野球部と水泳部の合同ライブが急遽決まったのだった。

回想終了

池田「と言った事があつたんです。」

成幸「そつか・・・。」

緒方「それは何とうか・・・！」

池田「先輩達、大丈夫でしょうか？」

これには池田は心配したが、

成幸「まあ、純も苦肉の策で決めただろう。武元もやろうと言った。皆を信じるしか・・・。」

そして、野球部と水泳部の合同ライブ最初の1曲は、

純「一発目は、いきなりこの曲から盛り上がって行こーぜ!!! C O O O C O O O T

○ A I N !!!!!!」

そして、純達野球部と武元達水泳部は、それぞれ一直線上に並んで、身体をぐるぐる回り、それぞれのポジションに立った。

うるか「さあさあ、皆で一緒に!!!」

純・う「Fun Fun We hit the step step!!」

うるか「同じ風の中 We know We love Oh!!」

純・う「Heat Heat (The) beat like a skip
skip!!」

純「ときめきを運ぶよ C O O O C O O O T O A I N!!」

これには、

生徒A「スゲー!!野球部と水泳部のコンビ!!しかも、安達と武元のコンビだー!!」

生徒B「歌上手いなー!!」

生徒達は大盛り上がりで、

成幸「ス、スゲー・・・!!」

緒方「は、はい・・・!!安達さんとうるかさんは凄いです・・・!!」

成幸と緒方もびつくりしていた。その後も、歌だけだと、GR○○○○Nの『愛○』を純と武元だけで歌ったり、他にも、野球部と水泳部でA○B48の『ヘビー○ーテーショ』を歌ったりなどして、その結果、

観客「アンコール!!アンコール!!」

アンコールが来るほどだった。

うるか「ありがとーっ！ありがとーっ！いやーっ盛り上がってんねーっねえ、純さん！！」

純「そうですねー！！うるかさん！！」

観客「うおーっ！！！！」

うるか「そんなじゃあ、もうー曲行きますかーっ！！」

純「そうですねー！！！！ヨツシャー！！！！行くぜーっ！！！！」

観客「うおー！！！！」

そして、その後も何曲か歌い、野球部と水泳部の合同ライブは見事大成功を収めたのだった。

進路指導室

純・う「「それでは皆・・・、お疲れ様っ！！」

野球部・水泳部「「無事大成功！！」

海原「もー、マジで一時はどうなることかと思っただけど・・・。」

川瀬「やるじゃん安達。」

純「サンキュー。」

吉田「流石ドラー。」

野口「それ関係ねーだろ。」

純「はは。それよりうるか。」

うるか「ん？」

純「ムリに付き合わせて悪かったな。咄嗟に思いついた手だったから。」

うるか「あつ、あたしは全然……。てゆーかつ、むしろ……」

すると、

海原「むしろ……。ねえ？誰かさんの生の歌声を聞いて……。」

川瀬「プライスレス？」

うるか「2人ともうっさい!!」

純「はは!!」

海原と川瀬がからかったのだった。

吉田「良いな……。」

野口「お前にもいつか、良い出会いがあるから……。多分……。」

こうして、ライブは無事終えた。その後も、古橋のクラスの劇も、一部事故があった

とは言え無事に終え、緒方のクラスのうどん屋も、無事完売した。その際小美浪先輩も手伝い、更に恋人というテーマで販売したら特に繁盛し、その際純と武元が恋人役を演じ、端から見てもまさに恋人という雰囲気であったのだった。

後夜祭

関城「完売おめでとう、緒方理珠!!流石は私の親友ねッ!!」

緒方「ど、どうも……」

うるか「来年は2000目指すつきやないっしょ!」

古橋「留年する気?うるかちゃん。」

しかし、関城はうどんを10杯程度食べているため、鹿島に心配されていた。すると、緒方「なんだか……、不思議な気分です。」

と言い、緒方は周りを見た。

川瀬「何だ小林、その衣装……」

小林「何故かうちのお化け衣装に混ざってたみたいで……」

海原「カツコイイーツ♡♡」

そして、

緒方「知つての通り、私は人付き合いが得意ではありませんし、あれほど多くの人に協力してもらつて何かを成すのは初めてで……、です。その……、語彙がなくてうまく言語化出来ないのがもどかしいのですが、ありがとうございます！本当に……、皆さんののおかげです！」

そう言つて、緒方は頭を下げてお礼を言つた。

緒方「……そして何より……」

そう思い、成幸を振り返つた。その成幸は、純と一緒に座つていた。

成幸（疲れた……。ぶ……。文化祭つてこんなにしんどかつたわけ……？）

純「……つて顔してんな、成。」

成幸「純……。とんでもなく長い一日だったよ……。」

純「はは。けど……。楽しかったな。」

成幸「ああ。」

その時、

放送『大変お待たせ致しました。これより、一ノ瀬学園後夜祭花火の打ち上げを執り行います。』

という放送が流れた。すると、一部のメンバーの目が光った。

関城（遂に来たわねこの時が・・・ツ!!）

猪森（後夜祭で一発目の花火が上がった瞬間に触れ合っていた男女は、必ず結ばれる!!）

蝶野（劇が失敗に終わった以上不本意つつすが・・・）

鹿島（せめて、このジnkスは抑えておかねば・・・）

うるか（ひゃあああ、心臓ヤバイ! やっぱムリ・・・!）

西辺（絶対に、桐須先生と・・・ツ!!）

放送『3・・・2・・・1。』

しかし、それぞれが緒方、古橋、そして武元を純と成幸の方へ押し、西辺監督は桐須先生に近付いたのだった。これに、

桐須「えっ。」

小美浪「えっ。」

桐須先生と小美浪先輩は反応できず、

ドシヤアアツ

純・成・緒・古・う・小・桐・西「!!!!!!!!!!!!!!」

桐須「いたた・・・、な・・・何事!?!」

小美浪「後輩お前・・・、積極的にするには時と場所と人数を・・・。」
成幸「ちがッ!? すみまッ・・・ッ、えええ何コレ!?」

純「つたく、んだよコレ!?!」

うるか「ご、ごめん純・・・。あれ!? 花火は・・・!?!」

もみくちやになつたのだった。その横で、

西辺「ああ、桐須先生・・・っ。」

西辺監督は遅れていた・・・。すると、

放送『不発!! もうしわけありません。やり直しますので、もう暫くお待ち下さい。』
不発のため、やり直すとの放送が流れた。

関・鹿（マジかよ!?!）

緒方「急に押すなんて酷いです関城さん。嫌いです。」

関城「ヒギヤアアアア。」

鹿島「ふっ、古橋姫く。これには深いワケがく・・・!」

古橋「うん・・・、とりあえず・・・、劇のことも含めて後で本気でお説教ね。」

鹿・猪・蝶「「はひいつ!」」

その一方で、純は、

純（つてー、んだよつたく・・・。けど、今のジnkスのこと考えると、危なかった

気が……。

と考えていたが、

純（ふつ、まさかな……）

と思った。すると、純に手を差し伸べた人が来たので、

純「あ……ありが……」

お礼を言おうとしたところで花火が上がり、純はその差し伸べてくれた人を見たのだった。

そして、後夜祭の花火はどんどん打ち上がり、皆それぞれ後夜祭の花火に注目した。一方その横で、純は自身の手を見て、

純（結ばれる……、俺が……）

と思い、ある人をチラッと見たが、

純（まさか……な）

と思ったのだった。

44話

一ノ瀬学園校庭

この日、マラソン大会のため、校庭には生徒で溢れていた。

小林「あくあ、マラソン大会なんて何の意味があるんだろーね、成ちゃん。」

成幸「まあ……、正直喜ばしいイベントじゃないよな。」

その時、

うるか「おっしやー！気合入れていくぜー！」

純「気合入れすぎてへばんなよ、うるか。」

うるか「へっへー、それはこっちの台詞だよー！」

近くに純と武元の話し声が聞こえた。それを聞いた小林は、

小林「ま、やっぱ優勝候補は、純ちゃんと武元がダントツだろうねー。」

と言った。すると、成幸に気付いた純と武元は、

うるか「おーっす成幸！へばんなよー！」

純「自分のペースで良いぞ成！こばもな！」
そう言った。

成幸「ああ、ありがとう！」

小林「ありがとう、純ちゃん！」

その時、横から

大森「おーっす、唯我、小林ー♪昨日の洋ドラ見たー？」

大森が話しかけてきて、

大森「スゲーよな外国人って！挨拶でフツーにキスとかしちやうんだぜ！！俺外国の大
学受けよっかなー♡」

と言った。

小林「何寝ボケてんの大森。キスったって、挨拶じゃほっぺとかでしょフツー。」

大森「そりやまあそうだけだよ！！俺はほっぺでも全然オツケー♡」

成幸「そもそも、お前日本語以外喋れんのか？」

その際、成幸からご尤もなツツコミを食らった。

先生A「よーい。」

パンツ

そして、マラソンがスタートした。小林の予想通り、純と武元は順調な立ち上がりを見せ、走って行った。一方の成幸は、

成幸「はあ、はあ、はあ。」

成幸（み・・・皆ちよつと速すぎない・・・？）

体力が無いのため、遅れてしまっていた。しかし、遅れていたのは成幸だけではない。

緒方「ぜえぜえ。」

成幸「！」

緒方「はーっ、はーっ、はーっ。な・・・成幸さん、ゲホッではありまオエツ・・・。」

緒方も体力無いため、遅れていたのだった。

成幸「緒方・・・。そういや、お前も体力無い仲間だったね・・・。」

と言われた緒方は

緒方「な、何を!!一緒にされては心外ですっ!丁度これから本気を出そうとしていたところ・・・ッ!?!」

強がったのだが、その途中で足裏を痛めたのだった。それを見た成幸は、

緒方「ん・・・、ん・・・っ。」

成幸「全く・・・、ムリに見栄張ろうとするから・・・。」

緒方の足裏をほぐしていた。すると、緒方が突然

緒方「・・・成幸さん。悩みがあるなら、私に甘えて良いのですよ!!」
と言いだめた。

成幸「近いッ!!というか急に何の話!？」

緒方「先程文乃に何か相談しかけていた気がしたので・・・。」

成幸「見られてた!!何て恥ずかしい!!」

しかし、緒方の視線に負けて、成幸は悩みを相談したのだった。

緒方「・・・つまり、安達さんがプロ入りを決めたという事に關してですか？」

成幸「あ、ああ。自分の幼馴染がこうして活躍して評価され、プロの世界に入ったというのは非常に誇らしいんだけど・・・。」

緒方「・・・何か問題が？」

成幸「ああ、実はそのドラフト会議の前、あいつがやけにぼーっとしてた時があったらろ？」

緒方「そう言えば、そんなときがありましたね。」

成幸「あの後、純に聞いたんだ。」

回想

純『どうした、成？』

成幸『お前、最近やけにぼーつとしてんな。本当に大丈夫なのか？何か悩みがあるんじゃないのか？』

純『・・・何でそう思った？』

成幸『何年の付き合いだと思ってる？』

純『・・・ったく、お前って鈍いのか鋭いのか分かんねーな。』

そう言つて、純は悩みを打ち明けた。

純『・・・俺、実は去年辺りからメジャーから声が掛かってな。それで迷つてたんだよ。』

これには、

成幸『えっ!?!マジで!?!メジャー!?!』

純『ああ、マジだ。』

成幸『ス、スゲーじゃん!!』

成幸は驚いてしまった。

純『ありがとう。実際この前の国際大会で、プロだけでなくメジャーからも更に評価が上がってな。一応プロで活躍して稼いで、母さんを楽させたいという目的は持っていたんだが、メジャーでもやってみたいという思いも持っていたから、結構迷ってたんだよ。』

成幸『そ、そうなのか。』

純『ああ。』

回想終了

緒方「そうだったんですね。」

成幸「ああ。俺も聞いたときは驚いたよ。それに、あんな純を見たのは初めてだったし。」

緒方「けれど、結局安達さんは、プロに決めましたね。」

成幸「ああ、それについては、最初に相談してから暫く経った時に聞いたんだ。」

回想

純『成、俺プロ入りするわ。』

成幸『え、そうなのか!?メジャーは!?!』

純『それは胸の内にはまっておく。実際あの大会で通用したからといって、メジャーでもあつさり通用したら、全国の高校球児は全員メジャーリーガーになると思う。だから、もう迷わねー。俺は何もかもを越えてからメジャーに行く。』

成幸『・・・そうか。』

純『それに、あいつが俺の事から目が離せないくらい一番になってやる。』

成幸『あいつ?誰だ?』

純『ふっ、秘密だ・・・。』

成幸『何だよそれ・・・。けど、お前がそう決めたのなら、俺は何も言わねーよ。頑張れよ、応援してるから!!』

純『ああ!!』

回想終了

緒方「そうだったんですか。」

成幸「ああ。その後実際に指名されて、正直俺も嬉しい気持ちになったよ。」

緒方「はい、私も文乃もうるかさんもそうでした。特にうるかさんが一番嬉しそうでしたね。」

成幸「ああ。．．．けど」

緒方「?けど?」

成幸「．．．けど、それと同時に気付かされちゃったんだよな．．．。」

成幸（純だけじゃなく、緒方や古橋、そして武元がいつも生き生きと輝いていて、それに比べて何も無い自分にどこかで距離を感じていた。その距離の正体、それは．．．）

その時、

たんっ

純と武元が、並んで走り去ったのだった。

うるか「あ、おーっす！」

純「よう！」

うるか「へっへっ♪一周差ー！」

それを見た成幸は、

成幸「やつぱり、まだ無理そうか……。暫くここで安静にしててくれ。後で先生呼んでくるからな。」

と言って立ち上がった。

緒方「す、すみません……。感謝です。」

成幸「こっちだよ。」

緒方「え？」

成幸「ちゃんといっぱい悩ませてくれてありがとう、緒方。」

と言って、その場を後にしたのであった。

うるか「ほっ、ほっ。」

純「ふっ、ふっ。」

うるか「うっし、今日は結構調子良いぞ。」

純「それ、フラグだかな……。。」

うるか「ああー!!それ言わないでよー!!」

純「はは。わりーわりー。」

うるか「もー!!」

その時、

成幸「うおおお。」

純・う「ん?」

後ろから声が聞こえた純と武元は、振り返ると、

純・う「!?!」

成幸が全力疾走していた。

純「おい成、飛ばし過ぎだぞ!?!」

うるか「そうだよ!?!短距離じゃないんだし、ムリしてへばったら意味ないっしょ!?!」

すると、成幸はペースダウンをしてしまい、

純「つたく、ムリすつから・・・。」

うるか「そうだよ、言わんこつちや・・・」

しかし、

ぐんっ

純・う「!」

またペースを上げ、

成幸「おつ、追い付いたぞ、純ツ!!!」

そう言った。

純「つて、まだ一周差だぞ！」

うるか「そうだよ成幸！」

しかし、

成幸「良いんだよ、それでも。」

と言った。

成幸「周回遅れでも、意味が無くたって、それでもいいんだ。」

成幸（遠くで立ち止まったままよりはずっと良い。俺はお前らと並び立ちたい。）

成幸「うおーっ、気持ちいいぞチクショー!!」

突然成幸がそう言うので、

純・う「!?!」

純と武元は驚いた。

純「お前、マジどうした!?!」

うるか「ワケ分かんないよ!?!」

成幸「はっはっは!?!んなこと分かってるっつーの!?!」

と返した。すると、

成幸「それより純っ!!!」

純「何だ!？」

成幸「絶対一番になれよ!!」

と成幸は純にそう言った。

純「・・・はっ!!言われなくても、トーゼンだよっ!!行くぞ、うるかつ!!」

うるか「うん!!」

純とうるかは、成幸を見て何か伝わったのか、あっさり成幸を抜かして、ゴールに辿り着いたのだった。

45話

図書室

緒・古・う「「セーの……っ。」」
ばっ

緒方「なんとツ!? 皆さんスゴイですッ!?」

うるか「おっしや、自己ベストー!!」

純「スゲーじゃん、お前ら!!」

古橋「ま……まあ、範囲決まってる定期テストだし、油断は出来ないけど……。これも全部成幸君と安達君のおかげだね! 本当にありが……」

しかし、成幸は自身の勉強に集中しているせいか、話を聞いていなかったのだった。純「成?」

成幸「あつ、すまん……。皆が頑張った結果だよ! 学園長も褒めてたぞ!」

うるか「お……おおうっ! そんなじゃ……。例のベツプスイセンもバツチリだねっ

！」

純「何だよ、ベツプスイセンって……。」

古橋「VIPね、うるかちゃん……。温泉地かな？」

成幸「はは……。ん？」

その時、

成幸「やべつ、もうこんな時間か!! すまんこれ……今日の分の課題纏めといたから!! じゃあお先!!」

とドタバタした様子でその場を後にしたのだった。

うるか「……。」

その様子を見た武元らは、

うるか「……何か最近変くない? 成幸。」

古橋「分かる。マラソン大会の辺りから妙に毎日忙しいというか……。安達君は何か知ってる?」

純「いや、俺も知らねー。最近あいつと関わってねーからなー。」

古橋「そつか……。」

純「何かバイトしてたりしてな。それも掛け持ちで。」

純のその発言に対し、

うるか「ま、まっさかー!!」

古橋「そ、そうだよー!!いくらなんでもそれは……。」

と言ったのであった。しかし、

緒方「……。」

緒方は終始口をつぐんでいたの、

純（緒方、やけに口をつぐんでいるな……。何か知ってるのか？）

と思った純であった。そして、純は武元と一緒に、緒方は店の手伝いで帰ったのだが、

古橋は気になったのか、変装して成幸の後を追ったのだった。

帰り道

うるか「ねえ。」

純「ん？」

うるか「ホント成幸どうしたんだろうねー？」

純「さあな。俺も最近、あいつとはあまり話していないけど、確かにここ最近おかし

いよな……。」

うるか「やっぱそうだよねー。」

純「ああ。」

すると、

古橋「あつ。」

純「おつ。」

うるか「文乃っち。」

古橋「安達君とうるかちゃん、ちょうど良い所に！」

純「何だ急に？」

古橋「実は成幸君の事で……」

古橋と再会した純と武元は、古橋から成幸に関する事を聞いた。

古橋「……という事があったの。」

純「マジでバイトやってたのか。」

うるか「それも2件はしごで……。」

古橋「うん……。でも、何で……。」

純「うーん、俺も分かんねー。流石にそこまでやるほど家は困窮してねーはずだし

なあ……。」

うるか「確かに……。」

そうして考えていると腹が減ってきたので、純達は緒方の家のうどん屋に行った。

純「ハラ減ったー。」

古橋「ごめん下さい。りっちゃん、うどん2杯……いや、やっぱり」

すると、

成幸「いらつしやいませ！……っっておお、お前らか！」

成幸が働いていた。

純・う・古（3件目エ……。）

成幸「親父さん、うどん3杯です！」

緒方父「オウ！てか大将と呼べ大将と！お前に親父と呼ばれる筋合いは……。」

緒方「ちやきちやき作って下さい、大将さん！」

緒方父「リ……リズたまはパパと……。」

これには流石に、

純「お前流石に働き過ぎだろ!!」

純は成幸に言った。

成幸「なっ!?何でそんなこと知つ……あぶなっ」

成幸は、何故知ってるのか驚いていたが、

純「お前、何かあったのか!? 説明しろよ!」

うるか「そーだよ、成幸!? 何かあったん!」

と言われてしまったので、説明をしたのだった。

成幸「大ゲサだよ。ちゃんと体には気を付けてるし、ちよつと欲しい物があるだけだから……。」

うるか「ふーん……。」

古橋「まあ……、無理しないでくれるなら良いけど……。」

純「……。」

古橋「てかりっちゃん……、成幸君がバイトしまくってるの最初から知ってたんだね!」

緒方「知りません。文乃やうるかさん、安達さんには内緒と言われたので、お口にチャックマンです。」

古橋「放課後からいやに口をつぐんでると思ったら……。」

その時、純は

純「……成、お前、欲しい物って嘘だろ?」

と成幸にそう言った。

成幸「え!」

うるか「純？」

古橋「安達君？」

緒方「……。」

成幸「な、何で……。」

純「お前つてき、嘘つくとき、僅かに目線を上に逸らすクセあるよな。」
と指摘され、

成幸「う……。」

これには、成幸はうなつてしまった。

純「バイトしてる本当の理由は？それも掛け持ちで。」

成幸「そ、それは……。」
すると、

ガラガラ

大森「あーハラ減ったー。」

成幸「あ、いらつしやいませ……。」

大森「お？あつれ、皆揃つてどーしたん？」

大森が店にやつて来た。

成幸「なんだ大森か。」

緒方「なんだ大森さんですか。」

純「大森か……。」

古橋「ああ、大森君だー。」

うるか「やつほー、大森っち！」

大森「おっと、ぞんざうい。俺きつねうどん大盛りね、大森だけに、フヒ。」

成幸「ほいお待ち。」

大森「うひょー♪うつめ、うつめ。」

そして大森は美味そうにきつねうどんを食べていたが、

大森「あ、そーいやさ唯我ー。何でVIP推薦蹴つちやつたん？」

と言った。

大森「ひょーやつべー。マジここのきつね最強説。」

これには、

純・う・古「「えっ……」」

純と武元、古橋は驚いてしまい、成幸は目を逸らしてしまい、緒方に至っては口をつぐんでいた。

純・う・古「「えっ!?!」」

そして、疑問と驚きの声が店内に響いたのだった。

46話

一ノ瀬学園

ある人が、焦った雰囲気で学園長室に向かっていた。
バンツ

桐須「異議・・・失礼します、学園長。」

それは、桐須先生だった。

桐須「唯我成幸君の件・・・、どういふ事でしょうか？」
と学園長に尋ねた。

学園長「・・・。」

それは前日に遡る。

一日前、同所

学園長「唯我君、この場にいない安達君同様、君は本当によくやつてくれた。実のところ、ほぼ確定の方向で動いていたのだが。」

成幸「……すみません。……バカな事をしていて、自分でも思います。」

学園長「本当に……、それで良いのかね？」

成幸「はい。」

学園長「分かった。では唯我成幸君、君のVIP推薦を取り消そう。」

成幸「僕の我儘で、ご迷惑をお掛けしてすみません。」

それを、大森は偶然聞いていたのだった。

回想終了

桐須「……何故、そんなに簡単に聞き入れたのですか？彼は今まであれ程の努力と成果を……」

すると、学園長は桐須先生に対して、

学園長「おや、桐須先生。君は元々彼の教育係には反対だったのでは？」

そう言った。すると、桐須先生は、

桐須「諦観・・・、私の知る限り、彼ほど他人と真摯に向き合い寄り添える人物は希有です。少なくとも、そこは評価されるべきかと。」

と成幸を評価した。

学園長「不思議な男だね、彼は。氷の女王をしてそこまで言わしめるとは・・・。」

桐須「も、勿論、別に深い意味は・・・。」

すると、

学園長「聞き入れるしかあるまい。」

桐須「！」

学園長「そんな彼の・・・恐らく初めての真剣な我儘なのだから。」

と学園長はそう言ったのだった。

図書室

図書室では、成幸と純を除いたいつものメンバーが勉強していたが、あるいつもの席をチラツと見て昨日の事を思い出していた。

昨日、緒方うどん屋

古橋『ななな成幸君、VIP推薦蹴ったって……。』

純『お前、何で……!?!』

うるか『そーだよ!?!どーゆーこと!?!成幸!!』

成幸『わ、悪い……、あまり変な心配掛けるのも嫌だったし、皆には、もう少し落ち着いてから話そうと……あ、いや……バイトさせてもらう手前、緒方には相談してたんだけど。』

と言い、そして、成幸はこう続けた。

成幸『俺……、教育大学に行こうと思ってる。』

と言った。

成幸『教育について徹底的に一から勉強してみたい。でも、VIP推薦で提携している大学じゃ難しいみたいでな。』

うるか『で、でもホラッ！教師になりたいならなんだっけ？キョーシユク？』

純『教職だ。』

古橋『そうだよ！VIPで行った大学で教職課程取るって手も……。』

成幸『……それも考えたけど、俺……要領悪いからさ、やるからには本気で覚悟決めてやらなきゃ、本気のお前らに並び立てない。遠くから憧れてるままじゃ嫌なんだ。』

と成幸は真つ直ぐな目で言った。そして、

成幸『俺は……、ある人がそうしてくれたように、人に寄り添って教えられるような教育者を目指したい。』

と言った。これには、

純（成……、「ある人」ってまさか……！）

純はその「ある人」とは誰のことを言っているのか、察したのであった。

回想終了

古橋（・・・それで、学費や受験費用貯めるためにあんなにバイトを・・・。）
すると、

緒方「成幸さん、中々来ませんね。後安達さんも。」

と言いつ、それに武元と古橋は反応した。

緒方「？」

うるか「ほ・・・ほらさー、リズりん。スイセン蹴ったってコトは・・・。」

古橋「うん・・・。私達の教育係ももう・・・つてことだよね・・・？勿論、安達君のサポート役も・・・。」

それに緒方ははつと思いつ、

緒方「何と!?そういうことなのですか!？」

と言いつた。

古橋「気付いてなかったの、りつちゃん!？」

緒方「そうですね・・・。昨日店に忘れ物していったので、今日成幸さんに渡そうと思つていたのですが、では明日に・・・。」

うるか「タオル？」

これには、

古橋（本当に分かってるのかな・・・。）

と思っただが、

うるか「まっ、でも良いことじゃん!! 応援してあげなきやつしよ! あたし達はあたし達でガンバロツ!! 純も昨日成幸に・・・」

回想

純『そっか・・・。』

うるか『純?』

古橋『安達君?』

純『お前がそう決めたのなら、別に何も言わねーよ。』

そう言つて、純は成幸の胸に拳を当てて、

純『頑張れよ、成! 俺も、メツチャ頑張るからよっ!!』

そう言つた。

成幸『ああ!! 頑張つて、立派な教育者になってみせる!!』

回想終了

うるか「・・・つてそう言つたしね!!」

古橋「だつ、だよね! よーし、やるぞー!!」

そう言つて、それぞれ勉強を再開したのだった。

古橋(そうだよ・・・、成幸君のやりたいこと全力で応援するためにも、成幸君に頼らなくても大丈夫つてところをちゃんと証明しなくっちゃ!)

と思つた古橋だったが、

古橋「あれ・・・、この数式つてどう展開するんだっけ・・・?」

ある問題の公式に躓いてしまったので、

古橋「成幸君つ、ここの公式つてこれで・・・」

成幸に教えを請うたのだが、

緒方「・・・文乃?」

いつもいる席が空席だったので、恥ずかしさのあまり赤面してしまったのだった。

緒方「文乃？文乃……？」

古橋「分かっている……分かっているからりっちゃん……。今すぐ忘れて。」

うるか「もー、大丈夫？文乃っちつてば……。」

古橋「あ、あはは……。お恥ずかしいなあ。でもやっぱりちよこつと寂しいよね、うるかちゃん？」

うるか「そーだねー。確かにちよつち寂しいかも……。純もないし……。」

古橋「あはは……。りっちゃんは割といつも通りだね。成幸君と安達君が教育係とそのサポート役辞めちやつて寂しかったりしない？」

その問いに、

緒方「……そうですね……。確かに、『成幸さんと安達さんが来ない』という事実を快く認識していない自分があります。これが『寂しい』ということなのかもしれない。」

と答えた。そして、

緒方「ですが、成幸さんが誰でもなく自分自身のために、一杯悩んで出した答えなのですから、やっぱり嬉しいです。一番嫌なのは、成幸さんが幸せになつてくれないことです。恐らく一番長い付き合いでもあつた安達さんも嬉しいはずです。」

と続けた。これには、

うるか「リズりん……。」

古橋「りっちゃん……。」

二人は感動したのか、

う・古（（）こんなちんまいのに……なんて大人な!!!）

と失礼な事を思い、それを察した緒方は、

緒方「あ？ちんまくありません。」

と返したのであった。

うるか「でも……、リズりんの言う通りっしょ！」

古橋「うん……、私達がウジウジしてたら成幸君安心して頑張れないもんね。成幸

君に負けないように、私達も頑張ろ！」

その時、

成幸「ういーっす。」

純「よう。」

純と成幸がやって来た。

成幸「悪い悪い。今日の分のノート纏めてたら遅れちゃったよ。」

純「俺はコイツの付き添い。」

見せた。

成幸「へへ・・・、ちよつと自慢。今回の定期テスト、えらい成績上がったてき、自分でもびつくりしたわ。」

純「俺もコイツのテスト結果見て驚いたわ。」

成幸「俺、要領悪いからさ、お前らに教えながら復習する位で丁度なのかも・・・。だからさ・・・、これからも最後まで、俺を信じて付き合ってくれたら、正直助かる。」

と言った。これには3人は感動して、

う・古・緒「「引き続きよろしくお願いします!!」

純・成「「正座!」」

正座したのだった。

成幸「あ、いや、こちらこそ・・・、どうも丁寧に・・・、えええ・・・!?」

これには成幸自身困惑したのだが、

純（最後まで、か・・・。）

純は、成幸の『最後』という言葉に少し複雑な表情を浮かべた。これに、

うるか（純・・・?）

武元は気付いたのだった。

47話

安達家

うるか「おっじやましやーっす！」

古橋「お、お邪魔しまーす。」

緒方「お邪魔します。」

成幸「すまん、純。急に頼んじやって。」

純「良いって良いって。上がんな。」

この日、純の家に、いつものメンバーがやって来た。その理由は、純の家で勉強会をするからだ。そして、純は自身の部屋に案内した。

純「適当に座って良いよ。飲み物入れてくるから。」

純はそう言つて部屋を後にした。

うるか「そう言えば、純の家に来るなんてスゴイ久しぶりだなあ……。」

成幸「俺もだ。武元は、よく純の家に行つてたんだって。」

うるか「そーだよ。それで、純のお母さんと仲良くなつたんだ。」

成幸「そうなんだ。」

すると、男子の部屋は初めての古橋と緒方は、純の部屋を見渡していた。

うるか「文乃つちとリズりんは、純の部屋というより、男子の部屋が初めてだもんね。」

古橋「う、うん。よく分かんないけど、男子の部屋って分かる部屋だね。」

緒方「私もよく分かりませんが、成幸さんと違うなと感じました。」

成幸「緒方・・・、俺と純を比べないで・・・。」

緒方のサラリと言われた言葉に、成幸はズーンとした。

うるか「それにしても、相変わらず漫画多いなあ。それと、野球の雑誌。」

そう言つて、武元は純の部屋の本棚を見て、触っていた。

成幸「お、おい武元、あまり触ると・・・。」

古橋「そ、そうだよ。流石に安達君も怒るんじや・・・。」

うるか「え？大丈夫だよ！あたし、よくやつてる事だし。」

そう言つて、武元は高校野球の雑誌が特に並んでいる本棚を触っていると、ある雑誌を発見した。

うるか「ん？」

それは、グラビア写真集で『たわわな小悪魔♡鷹本えりか写真集 元競泳選手の初！撮り下ろし』というタイトルだった。

うるか（えーっ?!?!）こここここれ、グラビア写真集ってやつー?!?しかも元競泳選手とか書いてるし何コレ何コレ!?)

これには武元は動揺し、更にページをめくると、

うるか（わわわ、結構キワドイ写真あるじゃんもーっ!純もやつぱ男の子なんだ…。純ってば、純ってば!）

といったのがあり、目を覆ってしまっただが、その目の隙間から少しじーつと見ていたのだった。その様子を見ていた

成幸「何してんだ、武元?」

古橋「さあ、あの雑誌の辺りを取ってからだね…。」

緒方「どうしたんでしょうか?」

成幸らは不審に思っていた。その時、

純「お待たせー。よし、やろうぜー。」

成幸「ああ、ありがとうな。」

古橋「ありがとね、安達君。」

緒方「ありがとうございます、安達さん。」

と純がお茶を持ってやって来た。その瞬間、

うるか「う、うん!!やろう!!」

と言つて、咄嗟にグラビア写真集を隠したのであつた。
そして、勉強を始めたのだが、

うるか（と・・・、咄嗟に隠しちつたけど・・・、やっぱ純、こーゆーオトナの色気ムンムンなコが好きなんかなあ・・・。）

例のグラビア写真集のせいで集中できなかつた。すると、

うるか「なつ、なあんか・・・ちよつぱり足痺れちつたなあ・・・♡」

と足を崩し大胆な姿勢を取つた。

うるか（こ・・・こんなカンジ・・・？）

これには、

成幸（な、何やってんだ武元・・・!!?）

古橋（う、うるかちゃん・・・!!?）

緒方（うるかさん・・・!?!）

成幸らは驚いていたが純は、

純「・・・。」

日本史のテキストを読んでいたため、気付いていない雰囲気だつた。

それに対して武元は、肩口を見せるなどしたが、当の純本人は全く気付いていない感じであつた。成幸達は動揺していたが、これには、

うるか（何コレすっごい負けた感・・・。）
と撃沈してしまっただが、

うるか（アスリートとして負けたまんまはナットクいかないっ!!そう、あくまでアスリートとしてツツ!!）

とよく分からない事を決意し、

うるか「トイレ借りんね純ツ!!」

そう言つて、武元はトイレに行つたのだった。

純「・・・なあ、成。」

成幸「ど、どうした純?」

純「さっきからあいつ何やってんの?」

成幸「お、俺にも・・・。つか、気付いてたんだ。」

純「まあ、うん。」

古橋「うるかちゃん、安達君の本棚を触つてからだよね・・・?」

緒方「はい。何かの雑誌を読んでから急にです。」

純「雑誌・・・?」

そう言つて、純は本棚を見たが、

純「いつも通りの野球雑誌じゃねーか。」

と言った。

成幸「そつか・・・ん？武元の座つてた所の近くに何か・・・」

すると、何かを見つけた成幸はそれを取り出した。それは、先程武元が読んでいたグラビア写真集だった。

成幸「ええええーっ!!?これ・・・武元のなのか!!?」

純「えーつと、『たわわな小悪魔♡鷹本えりか写真集』・・・ああ、鷹本えりかね。」
成幸「純、知ってんのか!?!」

純「ああ、元競泳選手で、一時は美人スイマーとして人気があつたぞ。」

成幸「そ、そうなんだ。」

しかし、

古橋「ふーん・・・たわわ。恐らくだけどうるかちゃん、その雑誌を讀んでからだと思ふよ、様子が変だったのは。」

と古橋は死んだ目で雑誌を見て言った。

緒方「では、この雑誌は・・・」

そう言つて、純を見た。

純「いや、こんなの買った覚えねーぞ。何でこんなのが・・・ん?」

そう言つて純は雑誌を取ると、中から何か紙切れが出てきた。それを拾うと、

純「……コイツの仕業か……」

そう言つて、純は紙切れを成幸達に見せた。一方の武元は、

うるか「うーん……、オトナの色氣つてムズカシイ……。ジツサイに見てやんないと、よく分かんないや……」

と言いスマホを出して、

うるか「こうかな？」

パシヤ

うるか「こんなカンジ？もつと下のアングルの方が……」

パシヤパシヤ

グラビアポーズの真似をしながら撮っていた。

うるか（わわわ、これちよつとえっちなかも……）

と思つていたが、自身が何故純の家に来たのかその目的を忘れてしまつていたが、すぐに思い出し、慌てて戻つた。

うるか「ゴメン！戻つ……」

しかし、グラビア写真集があるのに気付いた武元は慌てて雑誌を取ろうとしたが、大森の仕業だと分かつて一安心したのだった。

帰り道

うるか「はあ・・・大森つちのシワザだったとは・・・。」

純「まさか、あいつあんなのを本棚に入れてたとは・・・。」

うるか「あはは・・・。」

勉強会が終わった後、純は武元を家まで送っていた。

純「お前、それで今日おかしかったのか・・・。」

うるか「だってー、純の本棚にあんなのがあるなんて思わなくてー!!」

純「まあ、確かに。けど、お前のグラビアポーズ、見て見たかったかも。」

うるか「あーっ!!もう、からかわないでよー!!」

純「いてて、ははは!!」

うるか「もー!!」

その道中、

水希「純さんっ!!武元先輩っ!!」

純「ん?」

うるか「!」

水希「お久し振りです！偶然ですね！」

水希達とあつた。

純「おお、水希ちゃん！葉月ちゃんと和樹君も久し振り！」

葉月「純兄ちゃんだー。」

和樹「久し振りー。」

うるか「みずきん！ちびつ子達もひつさしぶりじゃん！部活、続いてる？」

葉月「水泳のねーちゃんだー。」

和樹「ユーメイジンだー。」

水希「はっはい、何とか！武元先輩みたいにスポーツ推薦狙って頑張りますっ！！」

純「頑張れよっ！」

水希「はいっ！！」

うるか「いーね！」

と話していると、

葉・和「「ねーねーうるかちゃん、いつ純兄ちゃんのお嫁さんになるの？」」

と言われ、

うるか「えっ!!?そ、それは・・・その・・・はう・・・／／／」

武元は顔を赤くしてしまい、話せなかった。それに、

純「はは、近いうちな。」

と純は2人の頭を撫でながら言った。

水希「絶対お似合いですってー!!」

うるか「み、みずきんまで!!もー!!」

純「いてて!!うるか、いてーって!!」

と更に顔を真っ赤にしながら純の胸をポカポカと叩いたのだった。

48話

唯我家

成幸「ただいまー。」

花枝「成幸、お帰り。あら？」

純「お邪魔しまーす。」

花枝「いらっしやい、純君。」

葉月「兄ちゃんお帰りー！純兄ちゃん、いらっしやい！」

和樹「お帰りー！純兄ちゃん、いらっしやい！」

純「おう、葉月ちゃん、和樹君。」

花枝「今帰ってきた所なの、ちよつと待っててね。純君も好きにくつろいで。」

成幸「ああ。」

純「ありがとうございます。ふー。」

成幸「練習、相変わらずキツいのか？」

純「まあな。あれは慣れてもキツいわ。」

成幸「そうか……。」

すると、

葉月「ねーねー兄ちゃん達！見て見て！」

和樹「今日はね、食べられる草こんなにとれたよ！えらい？えらい？」

葉月と和樹が、草を出して純と成幸に尋ねた。

成幸「おつ、お手柄だな！偉いぞ！」

純「凄いな2人とも！」

それに、純と成幸は共に褒めた。しかし、その様子を見ていた

水希「……。」

水希は、純の事を心配そうに見ていたのだった。

七緒南中学校室内プール

水希「えー、今日は久し振りに……我が七緒南中水泳部が誇るOG……あの武元

うるか先輩が特別顧問に来てくれましたー！」

うるか「おーし、んじや、よつく見せてよーっ！」

と言ったが、

うるか「おりやーっ!!! うん、まあだいたいこんな感じ!!」

女子A（毎度ながら速すぎて・・・）

女子B（全然参考にならん・・・）

よく伝わっていないかった。けど、水希のみ伝わっており、また、武元の姿に見とれていたのだった。

水希「忙しい時期なのに感謝です先輩！」

うるか「ベンキョーばっかじゃ、体うずいて死んじやうもん。にしてもみずきん、また速くなったねー！」

すると、

水希「・・・あの、最近純さん、学校でどんな感じですか・・・？お兄ちゃんによると、国体が終わってから、いつも疲れている感じがして少し心配で・・・。」

と武元に尋ねた。

うるか「え・・・それは・・・。・・・ねえみずきん、こんな事聞いちゃって良いのか分かんないんだけど・・・。」

水希「はい？」

それを聞いた武元は、言うのを少し躊躇ったが、ある事を思いだし、その事を水希に聞いてみた。

武元家

純「うっめー!!うるかは相変わらず料理上手いな!!しかもこの餃子・・・」

うるか「へっへー!!純のお母さんの手作り餃子を作ってみたんだ!!一杯作ったからね!!」

純「マジで!!?サンキュー!!」

そう言つて、純は武元が作った自身の母の手作り餃子に舌鼓を打ったのだった。

純「しかし、お前んちなんていつ以来だ?中3か?」

うるか「うん!確か、中3の冬だったと思う!」

純「高校入つてから、一緒に帰るときはあつても部活で忙しくて家に行く時はなかったからなあ・・・」

うるか「そーだね。」

すると、武元は純の近くに寄り、

うるか「あははは、見て見て純、このコンビ、純も好きだよね!! あたしもだけど!!」

某芸人A『ちよつと何言ってるか分からない。』

某芸人B『何で分かんねーんだよ!!』

うるか「ホント、何で分かんないんだよ〜! なんちつて!」

純に某お笑いコンビの漫才動画を見せた。

純「あはは、そうだな!!」

純もそう言つて笑つていたがその半面、

純（何かちけーな・・・。）

と思つていた。すると、

ぎゅ・・・

純「!」

武元が、純の手を握つたのだつた。これには純も驚いたが、

うるか「あ・・・。」

純も武元の手を握り返したのだつた。それと同時に、

純「それで、何の用で俺を呼んだんだ? わざわざこれを食わせるためだけじゃねーだ

ろ？」

と言い、

うるか「あ、あはは・・・鋭いね、純。」

これには、武元は苦笑いしたのだった。

純「つまり、水希ちゃんから俺が毎日疲れているのを気にしていると聞いて、必死で元気づけようとしてくれたってことか・・・？紛らわしいな・・・、別に大したことじゃねーよ。」

うるか「それだけ気にしてたってことだよ。」

純「そつか・・・。」

その時、

うるか「あのさ純、プロかメジャーか迷ってたんだって？」

武元が、純にそう聞いた。

純「お前・・・。」

うるか「うん、成幸から聞いた。」

純「そつか・・・。でも、今は迷ってねーよ。まだあの舞台には早過ぎるからな。」

うるか「そうなんだ……。」

純「そういやうるか……、留学だけど、親御さんにどう話したんだ……？」
うるか「ほえっ？あたし？ここう。」

回想

うるか『サーセンパママ、留学させてつかーさいッ!!』
うるか父・母『スライディング土下座!?!』

回想終了

純「そ、そうか……。」

純（コイツらし……。）

うるか「……ヨノナカってさー、子供だけの力じゃ、『できない』ことで一杯じゃん。だからこそ、ちゃんと大人に頼って、感謝して、死ぬほど感謝して、後で倍返すつきやないっしょ！」

と武元はそう言った。

純「……ああ、そうだな。」

すると、

うるか「……みたいになりたいでしょ？」

純「えっ。」

武元が何か言っているのが聞こえた。すると、武元は顔を上げて

うるか「斉藤○巳選手みたいな選手になりたいでしょ？」

純にそう言った。それを聞いた純は、

純「お前……、覚えてたのか？」

と驚いた顔で聞いた。

うるか「うん……、覚えてた……。それに、みずきんからも聞いて確信した。」

回想

純『いつかこの人みたいに、いろんな人を魅了する選手になりたいんだ!!』

回想終了

うるか「あの時の純の顔、本当にキラキラしてたし・・・。」

そして、武元は純の手をまた握って、

純「うる・・・。」

うるか「お母さんを大切にする純はスキだけど、ちゃんと幸せになるために、ちゃんと周りを頼ってよ。純を助きたい人、一杯いるんだから！あたしがホシヨーする！」

と真つ直ぐに見てそう言った。それを聞いた純は、

純「・・・うん。・・・うん。」

少し涙ぐみ、零れないように顔を伏せた。それを見た武元は、純の傍に寄って、優しく抱き締めたのだった。そして、小さい子供をあやすかのように頭を撫で、背中をポン

ポンと叩いたのであった。

そして、ひとしきり泣いた後、

純「その……、悪かった。」

と純は視線を逸らしながら言ったが、

うるか「ううん、私も助けてもらってるから……。」

と武元は言った。

うるか「でも、まだ他にも悩みがあるでしょ？」

純「……何でそう思った？」

うるか「この前、成幸が最後まで付き合ってくれて言った時、なんか複雑そうな顔だったから。」

と言った。それに対して、

純「……よく見てるな、お前は。」

純はそう言ったが、正直に言った。

純「実は俺、冬休みが終わったら、新人合同自主トレに参加しなくちゃいけないんだ。

それが終わったから春のキャンプ、そしてオープン戦に入る。だから、お前らと一緒にやるのは、実質冬休みまで。次に学校に来るのは卒業式なんだ。」

うるか「そうなんだ……。」

それを聞いた武元は、少し寂しい表情を浮かべた。

純「けど、出来る限りサポート役をやるから、だから……その……」
すると、

うるか「うん、分かった。ありがとう、言ってくれて。」

武元は優しい顔でそう言った。

純「うるか……。」

うるか「だから、冬休みまで宜しくね、純。」

純「ああ、ありがとう。」

そう言つて、純は武元の頭を撫でたのであつた。

純「それじゃあ、また明日な。」

うるか「うん、また明日。」

そう言つて、純は武元家を後にした。そして、自身の手を見て、

純（サンキュー、うるか……。）

と思つた。一方の武元も、

うるか（純……。）

自身の手を見ていたのであった。